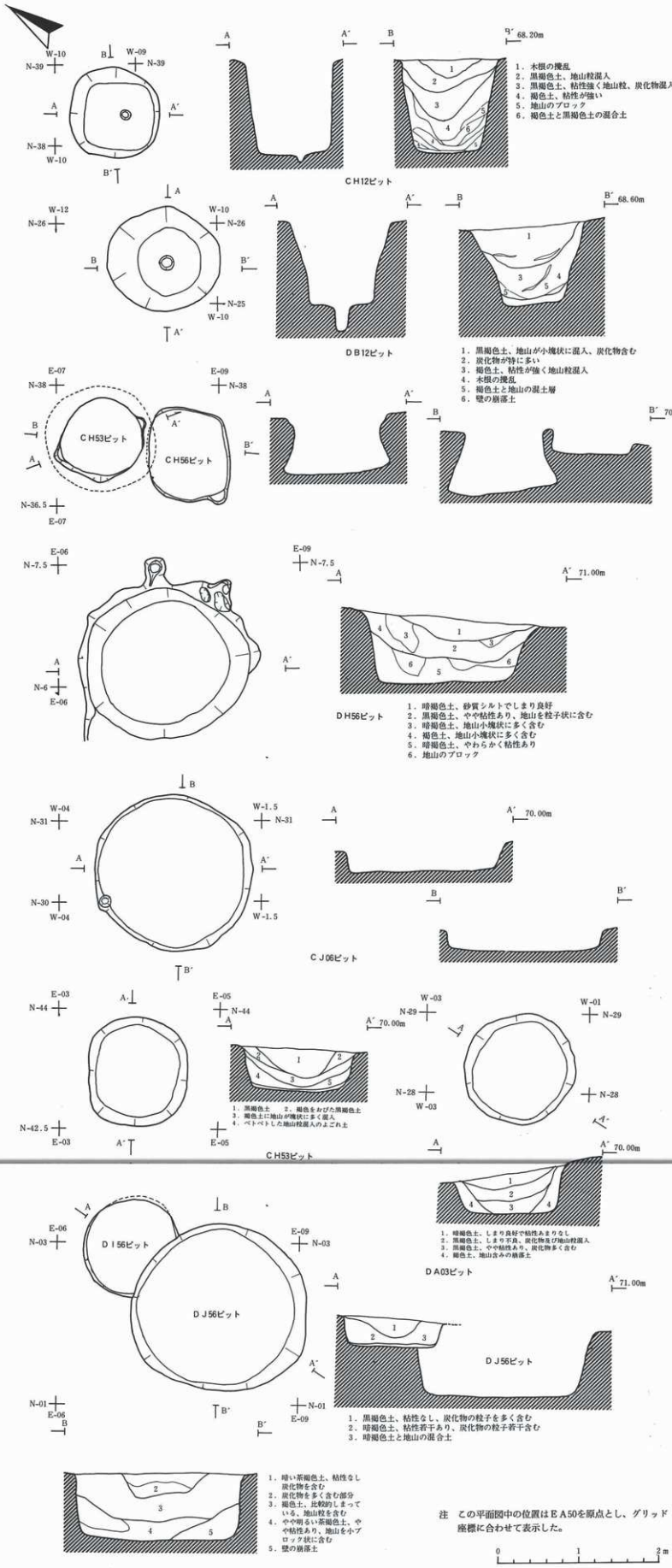


第20図　ピット類平断面図

底部に比して開口部はやや開き、壁は半ばまではほぼ垂直に立ち上がり、以後17°程の傾斜で開口部へ至る。埋土は基本的に3層に区分され、自然堆積の様相を示す。上層には炭化物の混入が目立ち、下層には壁面の崩落土の混入がみられる。木根がかなりの深さまで入りこんでいる。遺物の出土はない。

CH 53 ピット

開口部より底部が広いフラスコ状の断面をもつピットである。口径約96、底径 130 ～ 140 cmの円形のプランを呈し、深さは約80cmを測る。開口部の南北対称の位置に若干の張り出し部をもつ。壁は底部より開口部に向けてほぼ直線的に立ち上がり、頸部のくびれはもたない。埋土は壁面の崩落土がブロック状に混入し、下層に移行するにつれ混入度合が多い。縄文土器の細片 1 片が出土した。

B：円形のプランを呈し、浅いビーカー型の断面をもつ。つまり口径に対して深さの浅いピットである。

DH 56 ピット

口径 190 ～ 200 cm、底径 145 ～ 150 cmの円形のプランを呈し、深さは約70cmを測る。壁は開口部に向けて開き気味に直線的に立ち上がる。埋土は基本的に 3 層に区分され、全般的に炭化物を含む。遺物の出土はない。

DJ 56 ピット

DI 56ピットと重複して検出された。DI 56ピットより古い。口径 210 ～ 220 cm、底径約190cmの円形のプランを呈し、深さ約80cmを測る。壁は開口部へ向けてやや開き気味に直線的に立ち上がる。埋土は 3 層に区分され、全般的に炭化物を含む。遺物の出土はない。

CF 53 ピット

口径 120 ～ 135 cm、底径 105 ～ 115 cmのほぼ円形のプランを呈し、深さは約50cmを測る。前述の二つのピットよりひと回り小さい。埋土は 3 つに区分される。遺物の出土はない。

DA 03 ピット

口径約 140 cm、底径約 120 cmの円形のプランを呈し、深さは約50cmを測る。埋土は 3 層に区分される。全般に炭化物を含み、縄文土器の細片が若干出土した。

C：円形のプランを呈し、口径に対して深さが20～30cmと極めて浅いピットである。この種のピットは 3 個検出した。

CH 56 ピット

CH 53ピットに近接して検出されたピットである。口径 100 ～ 115 cm、底径96～112cmの不整円形のプランを呈する。深さは20cmと極めて浅い。遺物の出土はない。

DI 56 ピット

DJ 56ピットと重複し、DJ 56ピットよは新しい。口径約 118 cm、底径約 110 cmの円形のプランをもち、深さは約30cmを測る。壁は直立しており、底面は平担であるが、DJ56ピットの埋土の一部を底面に利用し、貼られていた。

埋土は 3 層に区分され、炭化物の混入が目立つ。遺物の出土はない。

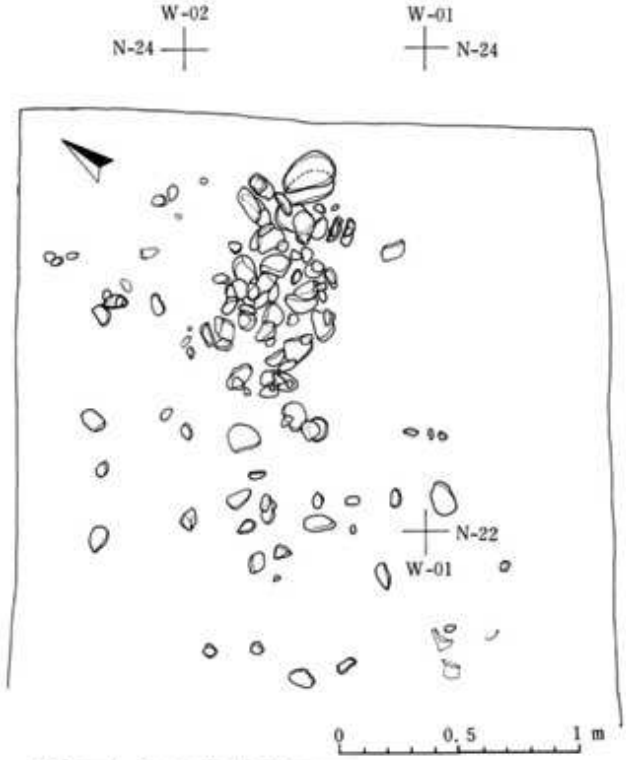
CJ 06 ピット

口径約 190 cm、底径約 185 cmの円形のプランをもち、深さは約30cmを測る。遺物としては縄文土器片が出土したが、いずれも細片で観察不能である。

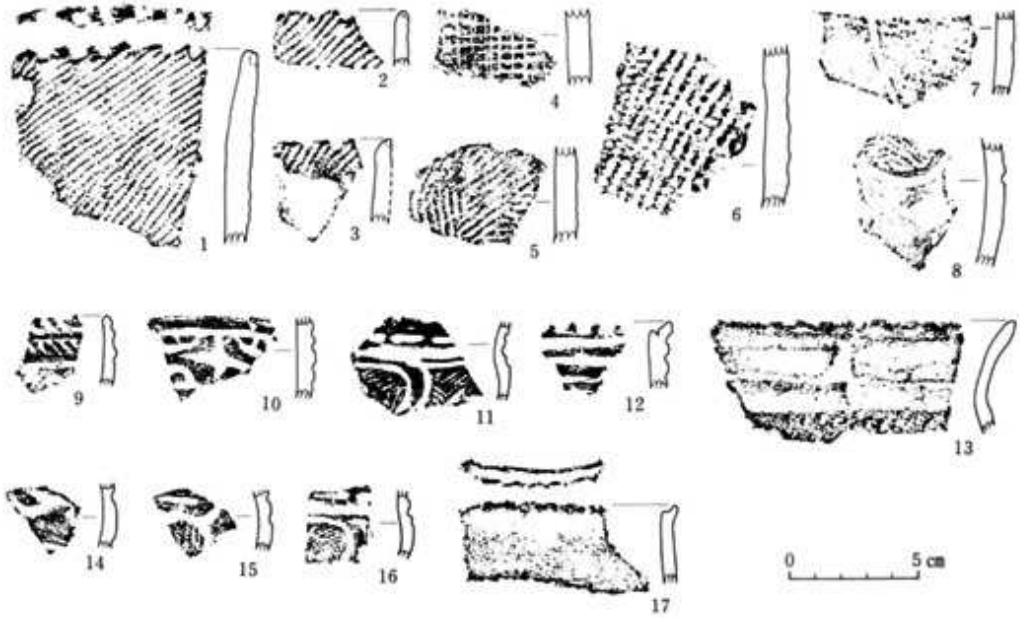
(4) CA 03 集石遺構（第21図、写直図版11－1）

CA 03 グリッドに検出されたものである。粗掘りの進行につれてCA 03 グリッドからCD 03 グリッドにかけてコブシ大から径20cm程の河原石がかなり検出された。そのうちCA 03 グリッドに検出された石は一定のまとまりをもっており、CA 03集石遺構として精査を実施した。

集石は東西 1 m、南北0.5 m程の範囲で、集石を中心に 1.2 × 0.7 m 程の範囲で黒色土が認められ、ピット



第21図　CA 03集石遺構平面図



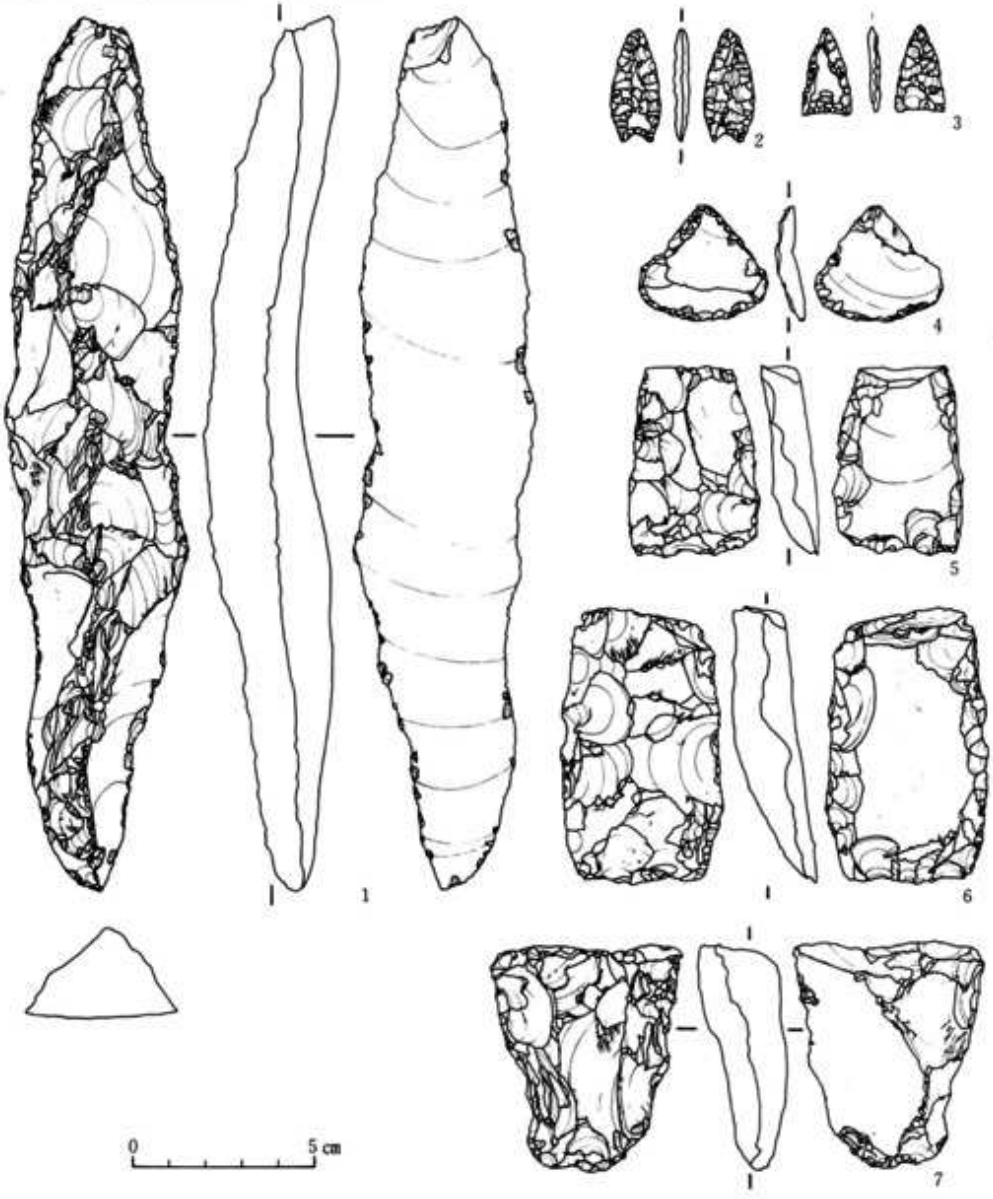
第22図　土器拓影

の存在も予想されたので石を除去して精査を加えたが、ピット等の遺構は存在しなかった。遺物としては縄文土器の細片、石核、フレーク等が若干出土した。なお他の石は散発的であり、グルービングは不能であった。

(5) グリッド出土遺物

旧石器時代（第23図、写真図版11－4）

BG 03 グリッド表土中より1点出土した。北東に向けての緩斜面にあたる。第23図1に図示したが、最大長 24.0 cmの長い剥片を利用し、最大幅 4.8 cm、最大厚 2.8 cmの断面三角形状に作り出した石器である。裏面は第一次剥離面をそのまま残しているが、縦断面は平担ではなく全体が幾



第23図　石器実測図

分彎曲している。表面はほとんど中心部から左右両端へ向けての調整剥離が行われ、中心部に高い陵が残る。また側縁及び陵には刃滑れ状の細かな押圧剥離が見られ、ポイント或はナイフとして使用されたものと考えられる。

縄文時代（第22・23図、写真図版11－2・3・4）

土器：散発的出土で 157 片を数えるのみであり、いずれも破片である。第22図 1 ～ 3 ・ 5 ・ 6 は器内に多量の繊維を含む土器類である。 1 ～ 3 は単節縄文が口縁直下まで施文され、口唇に原体の押捺が見られる。 5 ・ 6 の体部片はいずれも地文に単節縄文が施されたものである。いずれも早期末葉の土器類と考えられる。 4 は繊維の混入は顕著ではなく、砂土が混入している。器面には沈線文が縦横に施されている。 7 ・ 8 は中期末の土器類である。沈線によって文様が描かれ、無文部は磨きが顕著である。

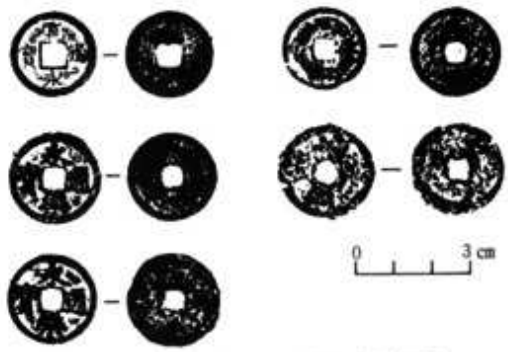
9 ～17は晩期の土器類をまとめた。 9 は口唇に刻みが見られ、口縁部文様帯として縦の刻みが連ねられている。10は注口土器の体部片か？。羊歯状の名残りと思われる文様が浮彫化されている。11・14～16は幾分沈線化した施文手法で曲線文が描かれたものである。12は外面に 4 本の沈線がめぐり、口唇には刻みが見られる。さらに口縁部内面には一本の深い沈線が見られる。13・14は共に粗製の壺形土器の口縁部である。口唇部は刻みにより小波状となっている。いずれも縄文晩期大洞 BC 期から C_1 期に含められる土器片と考えられた。

石器：第23図 2 ・ 3 は石鏃で、 2 は基部に抉入があり、両側縁が外彎している。 3 は基部の抉入が顕著ではなく、側縁に細かな二次加工を行っただけのスクレーパーである。刃部は孤状をなし刃角は薄い。 5 ・ 6 は類似したいわゆる篦状石器である。共に調整剥離は表面に集中し、裏面は側縁の加工にとどまっている。上部の打面は最終的に表面からの剥離により除去されている。共に使用の痕跡は明瞭ではない。 7 は裏面に原石面を残し、剥離は表面に集中している。使用痕は見られない。その他凹石 1 点出土した。

その他

CA 50 グリッド出土の墨書石：CA 50 グリッド表土中、第 1 号墳墓に近接して出土した。縦約 8 ㎝、厚さ 1.5 ㎝の不整形の扁平な川原石で、片面に文字が墨書されている。縦 6 行に亘って約36～40字の文字が書かれていると推定されるが、 2 ・ 3 の文字が断片的に判読できるだけで全体の解読は不可能であった。「時」「計」「是」「我」「夢」「之」 等が判読できる文字である。

従ってこの銘文の意味、墨書石の性格等については不明である。なお赤外線写真を使用して解読を試みたが、効果はなかった。



第24図　グリッド出土古銭拓影

古銭：墳墓以外より出土器した古銭は 6 枚であり、第24図に拓影図としてまとめた。永楽通宝 2 枚、寛永通宝 1 枚、他の 2 枚は判読できなかった。

その他：調査区BC24、BD24グリッド附近より楽焼の破片が数点出土した。この附近には鬼柳焼と称する楽焼の窯は藩境塚（挟塚の南部藩側）に接して位置していたと思われが、後世のカッテングや通学道の拡巾工事等により破壊された。

この鬼柳焼は明治10年代に営まれた楽焼で鬼柳の正覚寺に残っている香象の銘によれば「明治十八歳初冬　正覚寺応需　京都陶工。雪林院伊左阿弥造　楽」とある。[注4)]

注1）　中川久夫「北上川中流域沿岸の第四系および地形」（1963年）地質学雑誌　第69巻　第812号
注2）
注3）　同上論文柱状図番号
注4）　奥羽史談52号（昭44）

V　考察とまとめ

今回の調査で発見された遺構は墳墓6墓、経塚1基とそれにピット10個と集石遺構である。以下各遺構毎に若干の考察を加えてみよう。

(1)　墳墓について

〔墳墓の形態〕 調査の結果は6基のマウンドのうち5基のマウンドが墳基と判明し、1個のピットが墓壙と確認された（DD50墓壙）。これ等墳墓の形態等についてまとめたのが第3表である。この表よりうかがえるように6基の墳墓のうち第4号墳墓を除いては、すべて土葬墓である。

第2表　墳 基 一 覧 表　　単位cm（ ）内尺寸

遺物名	墳丘		墓壙						埋葬	出土遺物		備考
	形状	高さ	長軸	短軸	深さ	方向	形状	人骨の有無	状態	封土	墓壙内	
1号墳基	方形	100 (3.3)	180 (5.9)	140 (4.6)	70 (2.3)	N－17°－W	隅丸長方形？	無	土葬	寛永通宝1枚 永楽通宝2枚	なし	周溝あり
2号墳基	円形	60 (1.9)	160 (5.3)	130 (4.2)	60 (1.9)	N－7°－W	楕円 ～隅丸方形	有	土葬 （北枕）	永楽通宝2枚 供養石　1	なし	
3号墳基	円形	90 (3.0)	160 (5.3)	110 (3.6)	70 (2.3)	N－2°－E	隅丸長方形	有	土葬 （北枕）	宣德通宝10 永楽通報2 不明　1	なし	
4号墳基	円形	50 (1.6)	160 (5.3)	50 (1.6)	25 (0.8)	N－79°－E	長楕円 ～隅丸長方形	有（火葬骨）	火葬	なし	永楽通宝6	
5号墳基	円形	70 (2.3)	120 (3.9)	110 (3.6)	60 (1.9)	N－2°－W	隅丸長方形	無	土葬	なし	永楽通宝2 不明　3	
DD50墓壙（6号墳墓）	消滅		160 (5.3)	120 (3.9)	70 (2.3)	N－11°－W	隅丸長方形	無	土葬	なし	永楽通宝2	

この5基の土葬墓のうち、1号墳墓だけが封土の形態とその版築方法を異にする。他は円形土饅頭型であるが、1号墳墓は方形である。しかも周溝を伴い墳丘の規模も最大であり、封土の版築にも意をこらしている。墓壙を掘り、掘り上げた土で埋め戻し、さらに周囲の土を除々に盛り上げ墳丘を形づくることは他の墳墓と共通するが、1号墳墓は墳丘が造成されている途中に若干の礫が封土の中に混入しており、造成後には大量の礫を配している。調査時にはこの礫が墳丘の裾から周溝へと滑り落ちたかたちで検出された。これは明らかに川原から直径20～30cm大の礫を運びこんで、封土表面にその崩れを防ぐ事を意図して配したものと考えられる。

墓壙は若干のずれはあるものの、すべて墳丘の中央に位置している。1号墳墓の墓壙は半壊していて明確ではないが、長軸約180 cm、短軸約140 cm程と考えられ、他の墓壙よりひとまわり大きい。他は長軸140～160 cm、短軸110～140 cm程で深さは60～70cmを測る。長軸方向についてはいずれの墓壙も南北方向を指す。2号と3号の墳墓より人骨が出土し、北枕で屈葬である事が判明したので、他の墳墓も墓壙等の規模より、同様の埋葬状態と考えたい。しかし棺の存在についてはいずれの墳墓からも確認できなかった。なお副葬品については殆んど出土せず、わずかに5号墳墓とDD50墓壙（6号墳墓）より古銭が出土したのみである。

一方火葬墓と考えられる4号墳墓について述べてみたい。4号墳墓も土饅頭の封土をもつことは他の墳墓と同様であるが、墳丘も低く規模もひとまわり小さい。土葬墓との比較で注目されるのは墓壙である。規模は長軸約160 cm、短軸約50cmと巾が狭く長楕円～隅丸長方形のプランをもち、深さも約25cmと浅く、断面はナベ底状に近い。また長軸はN－79°－Eとほぼ東西方向である。

埋葬方法は墓壙を掘り、底部に木炭屑を敷き火葬骨を納骨して最初掘り上げた土で埋め戻して封土を造成したと考えられる。副葬品としては6枚の古銭（すべて永楽通宝）が出土したが、これは六道銭を意味するものであろう。

火葬墓の場合大きく分けて「荼毘所で火葬した後、他へ埋葬する場合」と「荼毘所と埋葬場所が同一の場合」の二つに分けることができるが、4号墳墓の場合は墓壙内に焼土化した場所も検出されず、その痕跡もないことから、火葬の場所は別の所にあったと思われる。

〔墳墓の時期と被葬者〕 遺構の時期決定に欠かせない資料に出土遺物があるが、墳墓の場合は副葬品である。然るに6基の墳墓のうち副葬品として墓壙内より出土したのは4号と5号墳墓、それにDD50墓壙だけであり、しかも古銭のみで他の出土はない。封土からの出土品としてはやはり古銭、2号墳墓からは供養石が出土した。これ等の出土品を中心に墳墓の時期等について検討を加えてみたい。

（1号墳墓）当遺跡は字門覚地内に所在し、一説に門覚上人の墓があった場所と伝えられることは前述した。即ち元禄年間の古絵図「相去六原道之全図」[注1]には藩境塚の一つ堀切坂脇大塚（大明神鼻）の挟塚の南側に接して「回」の印でその位置が示され「もんがくがはか」と記されており、一方安永5年風土記御用書上[注2]には

| ′ 七間十八
| ′ 文覚壇　墓ヶ岡にあり

右ハ文覚上人墓所故之由申伝候事

とある。しかしその場所についての記録は風土記書上にはないが、古絵図と併せ考えると「もんがくがはか」と「文覚壇」は同一であると考えられ、本調査区では1号墳墓がその位置にあたる。

調査の結果は1号墳墓は方形のプランを呈し、封土の高さは約1 m（3.3尺）、1辺約8 m（約4間）の規模である事が判明した。風土記御用書上には「高さ4尺5寸、廻り8間」とあり、これを調査結果と比較すると封土は若干低く、廻りは約2倍となる。しかし位置的には「1号墳墓」＝「文覚壇」＝「もんがくがはか」と考えて間違いないであろう。問題となるのは墳墓の年代と被葬者である。

年代決定に欠かせない資料としては出土遺物があるが、副葬品の出土はない。封土中からは永楽通宝２枚と寛永通宝１枚、それに腐蝕の進んだ鉄製の紡錘車１個の出土をみているが、出土状況から埋葬時のものではない。

一方記録によると文覺壇は文覺上人の墓所と伝えられることから被葬者は文覺上人と云うことになる。文覺上人は俗名を遠藤盛遠と称し、源頼朝に平氏討伐の挙を勧めた事で知られているが、その生死については詳らかではない。上人がこの地に赴いた証拠は何もない。

なお年代決定の資料とはなり得ないが１号墳墓に近いCA 50グリットの表土中より発見された片面に墨書された扁平な川原石については前述したが、この書体について司東真雄氏は「江戸期のものではなく、鎌倉期の書体によく酷似している」[注3]と述べている。以上のことから１号墳墓について要約すると

・一説に云われる「文覺壇」は１号墳墓にあたる事は云えても、その被葬者は文覺上人であると云う結論にはなり得ない。

・墳墓の形態及びその造成等が他の５基の墳墓と異なっており、時期差は考えられる。風土記御用書上に古塚として伝説的ではあるにしても記録され、元禄年間の古絵図にも位置が明示されており、さらに墳墓付近より発見された墨書のある川原石を資料の１助と考えるなら、中世墳墓の可能性も考えられる。墨書文字の解読と意味それに川原石の性格づけの不能なことが残念である。いずれ年代決定資料に欠ける。

（２号墳墓）副葬品の出土はない。封土中より古銭と墨書のある供養石が出土した。供養石には宝永２年６月（1705年）の年号があり、

相當過去道情禅門
七廻忌之辰供佛施僧
次建石塔様以伸供養
（以下略）
宝永２年６月□日

と記されてある。これは７回忌の供養石であり、被葬者は「道情」の法名をもつ男子であることを意味する。しかも埋葬されたのは７年を遡る元禄12年（1699年）である。過去帳の割り出しを試みた結果、相去地区を壇家にもつ瑞雲山洞泉寺[注4]に現存する過去帳のうち第壱号台帳[注5]の元禄12年６月12日の項に

十二日 相去 元禄十二年 六月 道情 [illegible]

と明記されてあり、供養石の法名と年号が過去帳と一致する。

この事から２号墳墓はその被葬者は吉エ門本人であり、埋葬は元禄12年６月（1699年）であることが確認された。なお墓壙からは歯と人骨が検出されたが、鑑定の結果性別の判断はつきかねた。[注6]一方封土の裾の方表土下10～12cm程より永楽通宝２枚が出土しており、周辺に炭化物がかなり認められたが火葬骨に伴うものか、２号墳墓の後世供養のためのものかは判断できかねた。

（３号墳墓）３号墳墓は経塚と重複しており、経塚より新しい。副葬品の出土はない。

封土中より13枚の古銭が出土した。宣徳通宝10枚、永楽通宝２枚、判読不能１枚である。出土状況は封土第１層もあるが大半は墓壙検出面である事から埋葬時のものと判断した。

なお墓壙から人骨が出土し、鑑定の結果被葬者は年齢60歳前後の女性で、身長は 170 ～ 180 cm 程度あったものと推定された。[注7)]

（４号墳墓）本調査区唯一の火葬墓である。墓壙内より副葬品として古銭６枚が出土し、すべて永楽通宝である。六道銭とした埋納したものと考えた。

（５号墳墓）副葬品としては墓壙内より古銭５枚が出土した。かなり腐蝕がすすみ原型をとどめないが、２枚は永楽通宝と判読できたが他の３枚は不能であった。

（DD50墓壙）現状では封土は存在しないが、本来は墳丘が形成されていたと考えられる。墓壙より２枚の永楽通宝が出土した。

以上副葬品を中心に述べたが、３号～DD50墓壙の時期についてまとめてみたい。副葬品としては古銭であり、すべて永楽通宝、宣徳通宝の明銭であり、寛永通宝の伴出はない。この事から考えると明銭が流布し寛永通宝が量産される以前と云う巾の中に設定される。しかし２号墳墓は供養石により元禄12年（1699年）の築造は明確であり、墳墓の形態や造築方法等を併せ考えると２号墳墓と年代的な差はあっても時期的にはあまり差のないものと考えたい。つまり17世紀頃に造築された墳墓と考えるのが妥当であり、巾をもって把えても中世末より近世初期のものと考えたい。

(2) 経塚について

１基確認され、一字一石経塚である。一字一石経塚は古くは平安時代末頃から営まれたと云われ、東北地方では弘安６年（1283年）の記年銘のものが最古と云われる。[注8)] 岩手県内では宮古市和見の永和２年（1376年）のものが最も古く、南北朝時代のものである。しかし県内における経塚としてまとまった資料はなく管見できる資料から県内の一字一石経塚を拾ってみても10個所程度である。[注9)] 従って一字一石経塚としての計画的調査例としては本書収録の鬼柳西裏遺跡の一字一石経塚を知る程度で、一般的にはその形態や造築方法についても不明な点のみで今後の調査例に期待する以外にないのが現状である。

東北新幹線関連遺跡として調査された鬼柳西裏遺跡の一字一石経塚は方形の土壙に経石がぎっしり埋納されて墳丘が形成されたものである。しかし当経塚は墳頂を中心としてその周辺緩斜面に厚さ20～25cm程に敷きつめた礫石の中に経石が含まれ（経石は墳頂付近の上部に集中する）、経石埋納のための土壙等の遺構は認められない。覆石型態をもつ一字一石経塚の最近の調査例としては福島県会津の中目経塚がある。[注10)] 墳丘の形は長方形で礫層を形成する礫の中に経石が含まれる。中目経塚の場合多数の経石の中に長い銘文を持つものと１字の経石の２種類が出土し、それによって経塚造築の時期、造築の目的、造築の関係者さらには埋納された経文の種類などが明らかになった。[注11)] しかし当経塚の場合多数の礫の中から文字の判読できるのは僅かに44個で、しかも一字のみの経石だけで、造築の時期、目的、経文等については全く不明である。ただ３号墳墓との重複関係より、３号墳墓よりは古い事は明らかである。しかし時期的にはこれ等墳墓と大差のない時期であろう。

いずれ本遺跡に近接した鬼柳西裏遺跡で調査された一字一石経塚は方形の土壙に経石が、ぎっしり埋納されていたのに対し当経塚の場合は墳丘の頂上を中心に経石を含む礫を敷きつめた覆石型態の一字一石経塚である。形態を異にする経塚が同地域に存在することは特筆されよう。

第3表 経石墨書文字一覧表

No.	墨書文字	備考（経石No.）	No.	墨書文字	備考（経石No.）	No.	墨書文字	備考（経石No.）
1	一	4	27	我	37	53	斎	34
2	一	23	28	我	31	54	衆	42
3	一	40	29	佛	58	55	欲	45
4	二	6	30	言	35	56	溢	48
5	三	1	31	是	83	57	奈	49
6	二	43	32	華	63	58	等	51
7	三	84	33	得	36	59	今	54
8	大	57	34	清	14	60	札	60
9	之	22	35	授	52	61	集	62
10	之	32	36	無	47	62	億	66
11	千	59	37	菩	67	63	者	68
12	千	72	38	菩	21	64	是	69
13	也	61	39	聞	41	65	菩	71
14	山	65	40	薩	10	66	中	77
15	心	44	41	養	17	67	不	79
16	不	8	42	億	55	68	仂	80
17	似	38	43	經	74	69	七	85
18	尼	26	44	諸	28	70	仰	86
19	而	20	45	下	2	71	見	87
20	行	39	46	台	5	72	死	88
21	合	15	47	逝	9	73	等	89
22	百	46	48	屎	11	74	以	91
23	而	73	49	薩	13	75	全	92
24	法	30	50	但	16	76	旦	96
25	亦	50	51	苦	25	77	青	97
26	何	18	52	於	27	78	二	99

※1　No.1～No.44までは実側図（第19図）に掲載した。
　2　経石No.は整理時に経石にラベリングしたNo.である。

(3)　ピット類について

発見されたピットは10個で、三つにグルーピングした。Aとしたものは円形のプランを呈し、ビーカー状及びフラスコ状の断面をしたピットである。このうちCH 12ピット、CB 12ピットは底面に小穴をもつ。遺構の性格や時期決定の資料としては出土遺物があるが、これ等のピットからの出土遺物は皆無である。しかし周囲より縄文土器片の出土もあり、最近の調査例ではこの種のピットは縄文時代の遺構として取り扱われており、本遺跡でも縄文時代の貯蔵穴と考えた。

次にBとしたものはプランは円形で、口径に対して深さの浅いピットである。つまり浅いビーカー型の断面をもつものであり、Cとしたものは更に浅く、シャーレ型の断面を呈するものであ

る。BとCに属する7個のピットのうち遺物を出土したのはDA 03ピットとCJ 06ピットの2個だけである。いずれも縄文土器の細片が若干で時期決定資料としては乏しいが、この種のピットも縄文時代の集落の調査に伴って検出されることから縄文時代のものと想定した。[注12)]

第4表 ピット類一覧表

No	遺構名	開口部プラン		底部プラン		深さ	出土遺物	備考
		形状	長径×短径(cm)	形状	長径×短径(cm)			
1	CH12ピット	円形	115 × 110	隅丸方形	88 × 84	120		小穴あり 深さ10cm
2	DB12ピット	円形	140 × 130	円形	84 × 80	104		小穴あり 深さ25cm
3	CH53ピット	不整円形	97 × 96	円形	140 × 130	78	縄文土器片1片	
4	DH56ピット	円形	200 × 190	円形	153 × 145	72		
5	DJ 56ピット	円形	220 × 210	円形	193 × 190	80		DI56ピットに切られている。
6	CF53ピット	隅丸方形～円形	135 × 120	円形	115 × 105	54		
7	DA03ピット	円形	138 × 135	円形	118 × 111	50	縄文土器片若干	
8	CH56ピット	不整円形	115 × 100	不整円形	112 × 96	20		
9	DI 56ピット	円形	118 × 118	円形	115 × 110	30		DJ56ピットを切っている。
10	CJ06ピット	円形	194 × 192	円形	186 × 178	27	縄文土器片若干	

(4) まとめ

以上各遺構について若干の考察を加えたが次に調査結果をまとめてみたい。

① 今回の調査で6基の墳基と1基の経塚が確認され、ピット10個、集石遺構1ケ所が発見された。

② 6基の墳墓のうち2号墳墓と3号墳墓からは人骨が検出され、鑑定の結果3号墳墓の被葬者は女性であることが判明した。

③ 2号墳墓からは供養石が出土し、それにより墳墓の造築年代が判明し、過去帳との照合から被葬者は男子と判明した。

④ 6基の墳墓のうち、4号墳墓だけが火葬墓で、他はすべて土葬墓である。

⑤ 1号墓は方形のプランで周溝を伴ない他の墳墓と形態を異にする。

⑥ 墳墓の時期については1号墳墓を除いては時期的に大差はない17世紀頃と考えられる。

⑦ 1号墳墓は他の5基よりも古く中世墳墓の可能性も考えられる。

⑧ 経塚は1基のみで覆石型態の一字一石経塚である。

⑨ 経塚造営時期については明確ではないが、3号墳墓よりは古い。

⑩ ピット類については時期決定資料を欠いているが、今回の調査で縄文土器片の発見もみており、この種のピットは縄文時代の集落に伴って発見される例が増加していることから一応縄文時代のものと想定した。

⑪ グリッド出土遺物としては旧石器1点、縄文土器157片、石器7点が出土したが、旧石器の発見は注目される。

⑫ 本遺跡は縄文時代の遺構と中、近世遺構との複合遺跡であり、調査区の西側には更に縄文時代の遺構の存在が予想される。

⑬　本調査区附近一帯は明治中頃までは墓地として利用されており、中、近世の墓地の立地としては条件にかなっている。

注1）　「相去、六原道之全図」元禄12年5月24日　浅水末男氏所蔵
注2）　「陸中国胆沢郡相去村史料巻之一」　浅水末男氏所蔵
（財）宮城県史刊行会「宮城県史28別刷」（昭37）
注3）　司東真雄氏の教示による。
下記の仏像の胎内銘の書体と酷似する。
①水沢市折居の票林屋敷鈴木家に伝わる仏像（宝治2年）1248年
②花巻市笹間延明寺の木造阿弥陀如来立像（寛元元年）1243年　県指定文化財
注4）　瑞雲山洞泉寺は慶長17年（1672年）の開基で元和2年（1616年）の開山であり、元禄11年（1698年）よりの過去帳が現存する。
注5）　千枝俊英住職の御配慮による。
第壱号台帳は元禄、宝永、正徳、享保、元文、寛保までのものを1冊にまとめてある。
注6）
注7）　岩手医科大学医学部　桂秀策教授に鑑定を依頼した。
注8）　藤沼邦彦「宮城県の経塚について」（昭50）東北歴史資料館研究紀要Ⅰ
注9）　本書収録の鬼柳西裏遺跡第9表
注10）　中目経塚調査会「会津坂下町中目経塚」（昭51）福島考古第17号
注11）　中目経塚は天文13年の造立である。
注12）　岩手県教育委員会　高畑遺跡「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」（昭55）岩手県文化財調査報告書第49集
岩手県教育委員会　西田遺跡「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」（昭55）岩手県文化財調査報告書第51集

参　考　文　献

岩手県教育委員会（昭55）「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」岩手県文化財調査報告書第52集
〃　（昭51）墳館現地説明会資料
北上市教育委員会（昭50）「鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ」文化財調査報告第14集
北　上　市（昭43）「北上市史第１巻」原始古代(1)
和　賀　町（昭52）「和賀町史」
熊本県教育委員会（1979）「おさき墓地古塔碑群―中、近世墳墓の調査」熊本県文化財調査報告書第36集
斉　藤　忠（昭53）「墳墓」日本史小百科
雄　山　閣（昭52）「新版仏教考古学講座」第６巻
〃　〃　〃　第７巻

人 骨 鑑 定

1. 南館出土人骨の鑑定は岩手医科大学医学部桂秀策教授に依頼した。
2. 鑑定書は四部から成るが、このうち東北新幹線にかかわる遺跡（南館遺跡）のみ掲載した。
3. 鑑定書には各部位の骨個々について撮影した写真が添付してあるが、本報告書にはその一部のみ掲載した。（写真図版14）
4. 鑑定書は岩手県教育委員会事務局文化課において保管してある。

鑑　　定　　書

本鑑定書は四部から成り、第一部には序文ならびに鑑定が、第二部には柳田館遺跡出土人骨、第三部には一関萩荘所在の墳墓出土人骨、第四には南館４号マウンド人骨の各所見と総括がそれぞれ記載されている。

第　一　部

昭和53年11月８日、岩手県教育委員会教育長畑山新信殿は教文第853号をもって、東北新幹線予定地内埋蔵遺跡発掘調査ならびに東北縦貫自動車道建設予定地埋蔵遺跡発掘調査により、出土した人骨につき下記事項を鑑定するよう嘱託された。

記

1. 人骨か否か、人骨ならば骨の部位
2. 性別
3. 年齢
4. 個体数
5. その他

よって私はこれを承諾し、岩手医科大学医学部法医学教室において諸計測を行い、写真を撮影し、また、必要によっては顕微鏡検査あるいはＸ線写真撮影などを行い、その結果に基き本鑑定書を作成した。

鑑　　定

1. 柳田館遺跡出土人骨には、（ｉ）年齢６～10歳前後、性別不明の歯牙、（ii）年齢45～55歳位、性別不詳の歯牙（iii）年齢・性別不詳の人右大腿骨の一部、（ｉｖ）加熱されたと推定される人頭蓋骨、顔面骨、指骨、長管骨等の各一部分、および（ｖ）人臼歯の一部分がある。
2. 一関萩荘所在の墳墓出土人骨は、人骨１体で、年齢は50歳以上60歳代前後、性別は不詳、身長は145～155cm位と推定する。強度の脊柱後彎があったものと推定する。
3. 南館３号マウンド人骨は、年齢60歳前後の女性人骨で、身長は170～180cm位あったものと推定する。

以　上

昭和54年６月29日

盛岡市内丸19－１　岩手医科大学医学部 法医学講座

医　師　桂　　秀　策㊞

第四部　南舘遺跡出土人骨

2号墳墓人骨

歯牙4個と骨片16個がある。以下a～tと符号をつけて検査する。

a　歯牙、咬面の大きさ 11.1×9㎜、歯冠部のみで、右上第2または第3大臼歯と推定される。咬耗はエナメル質に留り、咬面に灰褐色歯石様のものが付着している。

b　歯冠部のみの歯牙、咬面の大きさ 12.3×10.0㎜、歯冠結節は4個あるとみられ、右上第1または第2大臼歯と推定される。咬耗が強く、一部帯状に象牙質が露出しており、頰面と舌面に灰紫褐色の歯石が少許付着している。

c　大きさ 11.5×9.9×17.2㎜、大臼歯で、歯根部が存在する。咬耗は強く、米粒大に象牙質が露出している。頰側面の歯頸部に米粒大の陥凹が2個あり、齲歯と推定される。

d　大きさ 11.1×10×12.2㎜の大臼歯で歯根が2本ある。咬耗は極めて強く、咬面の殆んど全面にわたり象牙質が露出し、歯冠の約半分が咬耗している。

e　左側頭骨の頰骨突起の一部、下顎窩の部分に相当する蝶形骨の一部である。

f　大きさ 66×59×34㎜、左側頭骨乳様突起部である。

g　大きさ 52×57㎜、後頭骨の一部で、内外の大後頭結節がある。

h　大きさ 71×51㎜、左右の別は不明であるが頭頂骨である。

i　大きさ 42×21㎜、頭頂骨の一部とみられる。

j　大きさ 36×40×31㎜、左正円孔がみられ、蝶形骨の一部である。

k　大きさ 27×20㎜、頭蓋底の一部と推定する。

l　大きさ 36×20㎜、頭蓋底の一部と思われる。

m　大きさ 50×23㎜、頭蓋底の一部とみられる。

n　大きさ 21×20㎜、頭蓋骨の一部と推定する。

o　大きさ 29×23㎜、頭蓋冠の一部と推定する。

p　大きさ 36×25㎜、前項と同様である。

q　大きさ 29×20㎜、下顎骨左下顎頭部である。

r　大きさ 29×28㎜、後頭骨、左後頭顆の部分と推定する。

s　大きさ 32×20㎜、第1頸椎の左外側部で前項rとよく接合する。

t　大きさ 25×10㎜、左右と第何指かは不明であるが、中節骨の一部である。

3号墳墓人骨

A、B両群に分ちA群にはa～kの、B群にはa～kの符号をつけ検査した。

A群

a　長さ 420㎜、左大腿骨で、近位、遠位両骨端部は1部欠損しているが、概ね形態を留める。

b　長さ 427㎜、右大腿骨で、一部欠損はあるがほぼ形態を留める。これに身長係数を乗すると、167.6～168㎝の値を得た。

c　大きさ 150 × 100 ㎜、寛骨の一部で、左腸骨、坐骨、恥骨の各一部からなる。

d　大きさ 180 × 112 ㎜、寛骨右の一部である。

e　仙骨、上端面は長さ 110 ㎜あり、仙骨尖までの距離は 104 ㎜で正三角状である。前面はほぼ平面で前凹彎度は軽度で女性骨を推定できる。

f　第 3 または第 4 腰椎と推定する。骨棘形成が著明である。

g　腰椎の一部で、部位は不明である。骨棘が水平にのびている。

h　長さ 245 ㎜、左脛骨の内側縁部、ほぼ縦に骨間縁部から半分が欠損している。また、遠位端部が欠損している。

i　長さ約 260 ㎜、右脛骨で、遠位部約⅓が欠損している。

j　土塊に固着していて分取できないが、長さ約 8 ㎝、径約 0.9 ㎝の長管骨で、左右の脛骨と一緒に存在すること、および太さから腓骨と推定する。

k　長さ 133 ㎜、右腓骨と推定する。

B群

人の頭部矢状断を呈する骨を含む土塊で、予めX線写真をとり、頭部の骨の他、長管骨など含むことを確めた後、土砂を除き、頭蓋等を露出し、頭蓋最大長を測定するに約18㎝あり、右側頭と矢状縫合の距離 6.5 ㎝から推定最大頭巾を求めたところ13㎝あった。

矢状縫合前半は骨化しているが、後半は骨化していない。下顎骨は左⅓が欠損している。残存する骨に歯槽はなく、骨萎縮が高度である。下顎角の角度は 115°である。

B群におけるその他の骨等にはa～kの符号をつけ、検査した。

a　上顎骨から脱して検するに、右上内切歯と右上犬歯である。内切歯には象牙質が巾約 1 ㎜にわたり、犬歯においては面状に露出している。

b　長さ約 100 ㎜、肋骨溝が明瞭ではないが、肋骨と推定する。

c　長さ78㎜、左橈骨の遠位端部である。

d　長さ 137 ㎜、左尺骨近位端部である。

e　長さ98㎜、左橈骨近位端部である。

f　大きさ95 × 50㎜、右肩甲骨の肩甲外側角部である。

g　長さ 280 ㎜、右上腕骨で、外側半分と近位端部が欠損している。

h　腰椎 5 個で、骨棘形成の著明なものである。

i　2 個の胸椎の一部と右肋骨の一部と野われる 3 個、および肋骨の左右別および部位不明のもの 1 個である。

j　2 個の胸椎の一部で骨棘形成が極めて著明である。

k　椎体の一部と推定する。土砂との分別が困難である。

l　長さ 235 ㎜、左上腕骨で遠位端部約⅓を欠く。X線により骨頭部の桂構造が著明である。

m　長さ 113 ㎜、左上腕骨遠位端部で、骨幹に大豆大の新しい円形欠損がある。断端は前項 1 の断端とほぼ接合する。全体の長さは 330 ㎜である。これに身長系数を乗ずると 179.5 ～ 184㎝の値を得た。

n　長さ 105 ㎜、右尺骨近位端部である。

o　長さ71㎜と83㎜の長管骨の一部で、巾15～17㎜ある。断面は水滴状をなし、一縁は鋭く、尺骨の一部と推定される。

p　長管骨（骨名不詳）の一部と左肩甲骨の一部である。

総　括

a　南館4号マウンド人骨は明らかに人骨であり、人骨以外の獣骨などを証明することはできなかった。同一部位の骨は、骨名が判明したものではみられず、肋骨、椎骨等の数も1体の数以上には存在せず、本人骨は1体分と推定する。

b　本人骨の仙骨は正三角状で、前面はほぼ平面であり、女性骨と推定する（第四部2－A－e）。

c　矢状縫合の前半は骨化が進んでおり（同2－B）、上顎右内切歯、同右犬歯、小臼歯、大臼歯の咬耗は高度であり（高四部2－B－a、同1－a・b）、腰椎および腰椎の棘形成は極めて著明である（第四部2－B－g、同2－B－j）。また、下顎骨に歯槽はなく、骨萎縮が高度で下顎角の角度は 115°ある（同2－B）。以上の所見ならびに左上腕骨のX線写真で骨頭部の柱構造が著明である点などを考慮し、本人骨の年齢は60歳前後（50～70歳）と推定される。

d　比較的原形のまま保存されていた右大腿骨からその長さに身体係数を乗じて得た身長は 168 ㎝（第四部2－A－b）で、同じく左上腕から得た値は 180～184 ㎝である（同2－B－m）。これらから身長係数を求めた人達と同様の身長と長管骨の比率を本人骨が有するものとすると、本人骨の身長は 170～180 ㎝程度あったものと推定される。

e　本人骨は非常に脆弱であり、脂肪分は勿論、人頭髪なども存在せず、紫外線を骨に照射してその蛍光をみるに、いずれも褐色であり、相当古い人骨と推定される。しかし、具体的に年数を表現することは困難である。死後経過時間の判定には他に1－2の検査方法があるが、本人骨には必ずしも有効とは考えられず、省略した。

「附」被検人骨等は本鑑定書とともに岩手県教育委員会に返却した。また歯牙の検査に当っては岩手医科大学歯学部口腔解剖第一講座　伊藤一三講師の助言を得て行った。

鬼柳西裏遺跡

遺跡記号：ＯＹＮ

所在地：北市鬼柳町字町分38－2他

調査期間：昭和50年9月3日～12月25日（第一次調査）

昭和51年7月1日～12月15日（第二次調査）

調査対象面積：4,400㎡

平面測量基準点：新幹線北上保守基地線分岐点起点0.441496km（ＢＡ50）

（ＢＡ09≒本線ルート東京起点443.880km）

基準高：海抜57.00m、59.00mほか

Ⅰ 位置と立地

1 位置と現状

鬼柳西裏遺跡は北上市鬼柳町字町分(まちぶん)地内に所在し、国鉄北上駅の南南西約1.6km地点付近に位置している。遺跡所在地付近には相去(あいさり)方面の台地東北端から、周囲の沖積平野部に向って、南北に細長い独立丘陵が延びている。比高15m内外の、丘陵の西から北にかけての一帯には低地水田面が開け、本郷川が丘陵北麓部を通って西から東に流れている。また、丘陵の東麓部から相去台地の東側裾部にかけては、前記水田面からの比高1～2m内外の自然堤防状微高地が発達している。北上川西岸部に形成された、この微高地は海抜高度55～58m内外を測り、おおむね平坦で、その上には相去町、鬼柳町の旧中心集落が形成されている。(1)

遺跡所在地は、上記微高地の北辺部が丘陵と境する部分を中心に、周辺部一帯に広がっているが、その西辺部は東北本線の建設工事や複線化工事によって、既に大きく破壊されている。残りの部分は、一部が林地や畑地になっているが、大部分宅地化されており、遺跡全体の保存状況は必ずしも良好とは云えない状況である。

2 周辺部の遺跡

鬼柳西裏遺跡に近接する相去台地の辺縁部や北上川沿岸の沖積平野に散らばる微高地上には、南館(2)、滝の沢(3)、卯ノ木(4)、鹿島館(5)、西野(6)、松の木(7)、八木畑(8)などの各遺跡が知られている。また、すぐ西側の丘陵上は現在大部分が杉や雑木の林になり、一部が白髭神社の境内や共同墓地として利用されているが、ここからも縄文時代～弥生時代の遺物が出土している。(9) さらに、この丘陵は北上川東岸の男山などと同質の新生代第三紀の凝灰岩類からなっているが、その西～北辺部は過去の河川浸食により懸崖をなして平野部に臨んでいる。この様な自然地形を利用して、ここには古代ないし中世に城館が営まれたらしく、(10) 空堀(から)跡と思われる遺構が2～3残っている。

—注記—

（1）岩手県企画開発室　1975　土地分類基本調査「北上」
（2）岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅶ　1980
（3）北上市教育委員会「滝の沢遺跡発掘調査報告書」　1978
（4）同　　上「鹿島館遺跡発掘調査報告書」Ⅰ、Ⅱ　1975、1976
（5）～（8）岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅱ　1978
（9）「北上市史」第一巻中の写真図版、弥生12、13
（10）(9)と同じ文献中の写真図版、歴史130の中で金崎柵（白髭館）と推定されている。しかしながら、その中では、推定の根拠や出典については触れられていない。現在丘陵の中央部を境にして北側が「北館」、南側が「南館」とそれぞれ呼びならわされている。

Ⅱ　調査の方法と経過

〔1〕方法（第1図）

調査は遺跡全体のうち、東北新幹線とその両側に平行して走る保守基地引き込み線の建設予定地部分の長さ約120 m、巾約20 m、延べ面積約16000 ㎡の範囲を対象に実施した。

調査時の平面測量基準原点は、東側引き込み線の分岐点起点[1]0 km 414.496 m地点上に置き、ＢＡ50とした。さらにＢＡ50を通り、同一引き込み線上の分岐点起点0 km 451.441 m地点（Ａ）と0 km 471.441 m地点（Ｂ）を結ぶ直線を想定し、その延長線を平面測量の基準経線とした。基準経線の真北に対する振れ角は18°45′Ｅであるが、さらにＢＡ50とこの直線を基準にして調査区全体を3 m×3 m単位の方眼に区分けし、ＢＡ50を中心に経線方向30 m単位の地区割りを行い、Ｘ～Ｄの各ブロックを設定した。

高度測量の基準高は調査区内の高度差を考慮し、海抜59.00 m、および57.00 mの二者を採用し、実側図の高度標示の統一を図る様、努めた。

なお、実際の発掘作業はスコップや移植ベラなどを使用し、主として人力によって進めたが、宅地部分の雑物撤去や表土剥ぎの作業では、一部分、ユンボ、ブルドーザー、ダンプカーなどの機械力を援用した。以下、調査、整理の作業は、序文2で述べた方法に準じて実施した。また、整理作業の迅速化を図るため、出土遺物の洗滌、仕分け作業は、雨天時などを利用し、現地で済ませる様努めた。

〔2〕経過

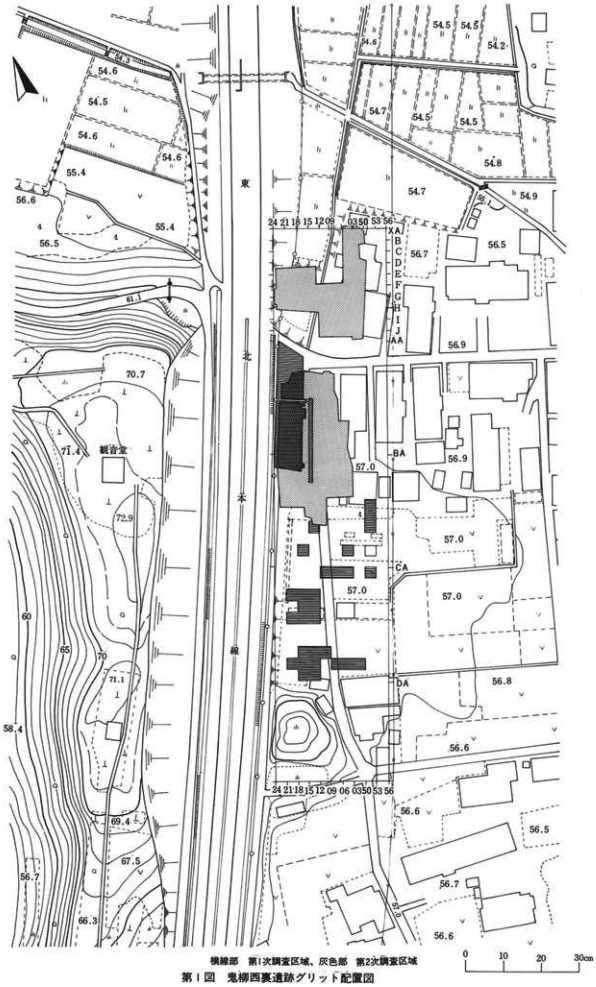
（1）調査に致る経過

遺跡所在地付近は、近世には「西裏（ぼしうら）」と呼称されており、以後、現在に致るまで、鬼柳本町（もとまち）の集落の一角をなしている場所である。そのため調査区一帯には調査開始の2～3ケ月前まで、民家が建て込んでいた。そして、その西側の東北本線寄りの部分は周囲より1～1.5 mほど高まり、杉林と、供養碑が並び、ニセアカシアや笹などの生える藪地になっていた。かかる事情のため、付近に南部藩の御仮屋跡や秀明院と称する寺院跡、一字一石経塚などの所在する事が一部の識者によって予想されていたものの、昭和47（1972）年当時行われた、東北新幹線建設予定地内の遺跡分布調査の際には、いずれも所在が確認されないままになっていた。

ところが、その後、昭和50年3月になって、付近に住む佐藤忠二、佐藤丑蔵の両氏が調査区西側の藪地の、大いちょうの木の切り株の根本から、たまたま一字一石経塚に関連した墨書礫を多数発見した[2]。この知らせを受けた岩手県教育委員会文化課では、関係諸機関と連絡協議したが、その結果、当時、同課が予定していた北上市相去地区の東北新幹線関係の発掘調査と併わせて、調査を実施する事になった。

（2）第1次調査の経過

調査は昭和50年9月3日より開始した。当初、調査対象を経塚とその近接部分に限り、調査期



横線部　第1次調査区域、灰色部　第2次調査区域

第1図　鬼柳西裏遺跡グリット配置図

間も2～3週間程に予定していた。しかし調査の進行につれ、当初予想されていなかった遺構の発見が相継ぎ、結局、12月18日、未調査部分の調査を次年度に行う事にし、調査を一応を終了した。なお、この間、12月10日には地元の人々を対象に現地説明会を開催した。

以下、50年度の調査を第1次調査として、途中経過の概略を述べる。

＜経塚付近の調査＞

9月3日から19日まで経塚周辺の雑物撤去と地形測量を行った。その結果、経塚のある大いちょうの木の南方部に土塁状構造物が延び、そのさらに南方部に、建物跡の所在を思わせる平坦地のある事が判明した。そこで、当初の予定を変え、上記各遺構と経塚との時期関係や性格的な関連性を調べるため、その調査を経塚の調査と併わせて行う事にした。そして、経塚部分については9月20日から10月21日まで、土塁部分については9月22日から29日まで、平坦地部分については9月30日から10月30まで、それぞれ調査した。(3)

以上の調査の結果、経塚部分からは墨書礫のつまったピット1が発見されたほか、周辺部から、新たに、経塚構築以前の葺石状の石組み遺構が発見された。また、土塁部分の調査では、この構築物が当初予想した通り土塁である事、そして、経塚よりかなり新期の遺構である事などを確認した。平坦地部分の調査ではベタ柱の倉庫風建物跡1を発見した。さらに、上記各遺構の調査によって、これらの遺構の載る高台部分が、人工的な盛土造成地である事が判明した。その上、上記各遺構の埋土や構築土中からは縄文時代の遺物が多数発見され、付近に縄文時代の遺構の埋没している可能性が強まった。

かかる事情から、調査期間をさらに延長し、経塚周辺の石組み遺構および盛土造成地の時期や性格を調べるとともに、盛土層下に埋没していると予想される縄文時代の遺構の探査を行う事にした。そして、10月22日からは経塚周辺部の石組み遺構の調査を始め、以後、12月17日まで行った。さらに、盛土造成地付近の土層堆積状況と縄文時代の遺構の所在を確認するために、先の倉庫風建物跡の南方部と、土塁付近の2ケ所に盛土造成地を東西方向に切断するトレンチを設定し、10月31日から調査終了日の12月18日まで調査した。

以上の各調査の結果、石組み遺構については、その範囲が経塚東方の盛土造成地の斜面にも及んでいる事が判明した。しかし、時間的な制約から、石組み遺構の全貌は明らかにできなかった。盛土造成地については盛土層の構成や盛土以前の旧地形の状況が明らかになったほか、縄文時代の遺物包含層が盛土造成地の地下一帯に広がり、その下にピット類などの遺構の埋没している事実が知られた。そこで、この遺物包含層の範囲を知るため、12月18日、盛土造成地の東方の宅地部分のうち、ＡＦ15～ＢＣ15グリッド内に長さ約23.5ｍ、巾約1.0ｍ、深さ約0.5ｍのトレンチを設定し、ユンボで試掘した。その結果、遺物包含層がさらに宅地部分の地下一帯にも広く及んでいる事が明らかになった。そればかりでなく、上記包含層と重複する形で、付近一帯に平安時代以降の各種の遺構が多数埋没している事実も予想される様になった。

そこで、再度、調査区域を拡大し、調査を継続する必要が生じた。しかし、既に降雪期を迎え、調査の継続が時期的に困難になっていた。そこで、調査終了部分の一部埋め戻しを行い、次年度に改めて調査を実施する事とし、12月8日で今次の調査を一応打ち切った。

＜御仮屋跡地付近の調査＞

なお、先に述べた経塚付近の調査と併行して、調査区南方部のC、D区に於て御仮屋跡地付近の調査を12月3日から17日まで行った。ここでは、古絵図に示されている御仮屋跡地の位置と範囲を確認し合わせて、縄文時代の遺物包含層の範囲を確認する事を主目的に調査を進めた。その結果、12月4日から17日までの調査で、御仮屋跡地の四至を区切る空堀跡のうち、南、北、西の部分を確認できた。その他、御仮屋跡地の西外側、煉瓦焼き場跡の北側部分で破壊された平安時代の住居跡1を検出し、12月13日から16日まで調査した。

（3）第2次調査の経過

第2次調査は昭和51年7月1日より12月15日までの約5ケ月半の期間内で行った。今次の調査は前年度の調査で明らかにできなかった経塚周辺の石組み遺構の性格と範囲を確認する事および縄文時代の遺物包含層の範囲と遺構を確認する事、そして前次の調査で発見された平安時代以降の遺構の時期と性格を確認する事の3つを主目的に行った。

調査開始日の7月1日から2日まではブルドーザー、ユンボ、ダンプカー各1台を用い、宅地部分の雑物撤去を行った。その後器材の到着を待って、7、8両日には、測量基準点を設置し、地割り作業を行った。さらに、28日には、第1次調査の際、調査区域から外していたA区の北接部分に新たにX区を設け、杭打ちを行った。

この間、上記作業と一部併行する形で6日から8月6日まで、石組み遺構と盛土部分の調査を行った。また、同じ6日から8月25日までは調査区全域の粗掘りと遺構検出作業を行った。その結果、平安時代以降の遺構が多数検出され、縄文時代の遺物包含層の調査開始が大巾に遅れる事が予想された。かかる状況の中で8月26日から9月10日まではX区の遺構検出を行い、9月10日からはA、B両区の遺構調査を開始した。そして10月21日からはX区の縄文時代の遺物包含層の調査を開始し、合わせて、後から発見された新期遺構の調査を行った。

以上の経過をたどるうちに、前述期間内の作業進行状況から見て、調査終了期限を当初予定されていた10月末に置く事は事実上、不可能な見通しとなった。そこで11月2日、国鉄および工事担当者の三井建設と文化課の三者で協議した結果、調査終了期限を12月中旬まで延長する様合意が成立した。

その後、11月7日にはX区の調査を終了し、12月3日には、AF24住居跡を最後にA、B両区の平安時代以降の遺構調査を終了した。また、同区の縄文時代の遺物包含層と遺構の調査を10月初旬以来、部分的に進めていたが、調査期限の12月15日に一応終了する事ができた。

なお、前述の各遺構調査と関連して、調査区内の各所に土層観察トレンチを設け、その調査を7月9、10日、10月2日、11月9、15日、12月13日などの各日に行った。その他、上記、各作業と併行し、雨天時には遺物の洗滌を行い、7月下旬〜9月上旬には夏期休暇で帰省中の学生5名の協力を得て、遺物の登録、整理作業を行った。また、調査の成果を公表すべく、調査期間中の11月1日、12月10日の両日、地元の人々を対象に現地説明会を催した。

—注記—

(1) 保守基地引き込み線の分岐点は鬼柳西裏遺跡の北々西0.45km地点付近の東北新幹線本線ルート中軸線上

の東京起点 444 km、294 m地点に位置している。
(2) この間の事情は「岩手日報」昭和50年7月10日付朝刊P13に掲載されている。
(3) 西野・鬼柳西裏遺跡調査班 1975 「現場だより西野」第3号（11月1日号）

Ⅲ 基本層序（第2図）

調査区付近の土層堆積状況は各種工事による盛土や撹乱によって、かなり複雑化しているが、基本的には第6図に示した例で代表される。図からも解る様に調査区付近の堆積層は、基底礫層と丘陵裾部斜面の堆積層、そして、それを被う盛土層および辺縁部の水性堆積層などからなっている。なお、図には示さなかったが、調査区内の新幹線工事中に観察によると、遺跡付近の地下3～5m付近には西側の丘陵から、凝灰岩類の岩盤が広がっている。直径5～15cm大の川原石を主体とする基底礫層はこの岩盤上に乗っている。礫層の上限は調査区の南西部で高く、地下0.5～1m付近、北部から、東部にかけては地下2～3m付近にそれぞれ位置し、両者の間は傾斜角20°～30°の斜面をなしている。後者の部分は、かつて遺跡付近を南流する巾10～15m程の旧河道と思われ、その断面がさらに南方の地下道工事現場で観察されている。

この河道部とその西岸部とでは、基底礫層上に乗る土層の構成が幾分異なっている。まず西岸部では、礫層上に褐～暗褐色の埴土ないし軽埴土層が薄く堆積し、さらにその上をやや緻密なクロボク質の埴壌土層が被い、その一部はさらに、河道部斜面の礫層をも被う形になっている。

これに対して、河道部では、礫層の上に砂やシルトおよびシルト質軽埴土からなる褐色の水性堆積層が厚く堆積し、その西辺部では前記のクロボク質の埴壌土層を一部被っている。

以上が人工遺物の検出されない層であるが、以上の各層の上には縄文時代の遺物包含層が0.15～0.7mの厚さで堆積している。この包含層は色調や成分の異なる2～5枚の土層よりなるが、調査区西辺部では前記クロボク質土層に類似した黒褐色土層が主体を占め、東～北辺部にゆくに従い、水性のシルトないしシルト質軽埴土などに漸移してゆく傾向が見られる。これらの層は一部に人為的な堆積状況が見られるものの、おおむね、西高東低の旧地形に沿って自然堆積した様相を呈している。層厚は一般に西に厚く、北～東辺部にかけて薄くなる傾向が認められる。発見された縄文時代の遺構もほとんどはこの層中から切り込まれたものと推定される。

さらに上記遺物包含層土には幾つかの無遺物層や前記の遺物を含む再堆積層などが乗っているが、層の構成は上記の層と同様、西に暗褐色～黒褐色土が卓越し、東～北辺部に、褐色の水性堆積層が卓越する傾向が見られる。

上記の層の上には、さらに平安時代の遺物を含む層が載っており、平安時代の遺構はこの層中から掘り込まれている。平安時代の遺物包含層の上には遺物の希薄な、礫混り黒褐色土層や暗褐色土層が乗っているが、ＡＤ24溝はこれらの層の上から切り込まれたものと推定される。

以上は盛土層形成以前の堆積層の状況であるが、次に盛土後の土層堆積状況について述べる。盛土部分の土は大部分が周辺の丘陵裾部から持たらされたものと思われるが、層構成はかなり複

雑で、場所毎にかなりの変化が認められる。ここでは、その詳細に触れないが、土層観察の結果盛土面が経塚形成期に関わる時期のものと、それ以前のもの２期の少なくとも、３面のある事が知られる。後者の形成期は不詳であるが、そのうちの古い方の面は現宅地面より１ｍ内外高い部分にあったらしく、ここからは、巾１～1.5ｍの南北方向に延びる道路敷の跡が検出されている。それより新しい盛土層は５～６層よりなるが1.2ｍ前後の厚さでこの道路敷の土を被っている。経塚はこの２期の盛土層を被う新期の盛土面を切り込んで構築されている。盛土はその後も部分的に行われたと見え、経塚周辺部には経塚構築期よりさらに新期の盛土層が部分的に認められた。

これに対して、宅地部分では、前記暗褐色土層の上部にさらに近世後期の炭化物と焼土を含む層などの、何枚かの土層が載っている模様である。しかし、その層構成については、土層の撹乱が著るしいため、充分な観察ができなかった。

Ⅳ　発見された遺構と遺物

調査の結果、調査区域の各地から縄文～弥生時代、平安時代およびそれ以降近世、現代に及ぶ各種の遺構遺物が多数発見された。以下の各項では、それらを時代別、種類別に分けて説明を加え、考察を行う。

〔１〕縄文時代の遺構と遺物

２次に渉る調査の結果、縄文時代の遺構として住居跡１、ピット４が発見された。また、それに準ずるものとして、上記各遺構を被う遺物包含層が発見されている。そのうち、住居跡と遺物包含層については日程および保安対策上の都合により、その全貌を明らかにできなかった。

現在、各遺構内の出土遺物の整理を進めているが、未だに資料を詳細に検討し得る段階に達していない。そこで縄文時代の遺構と遺物については、現在までに得られた知見をもとに、その概略を述べる事にしたい。

(1)　遺構

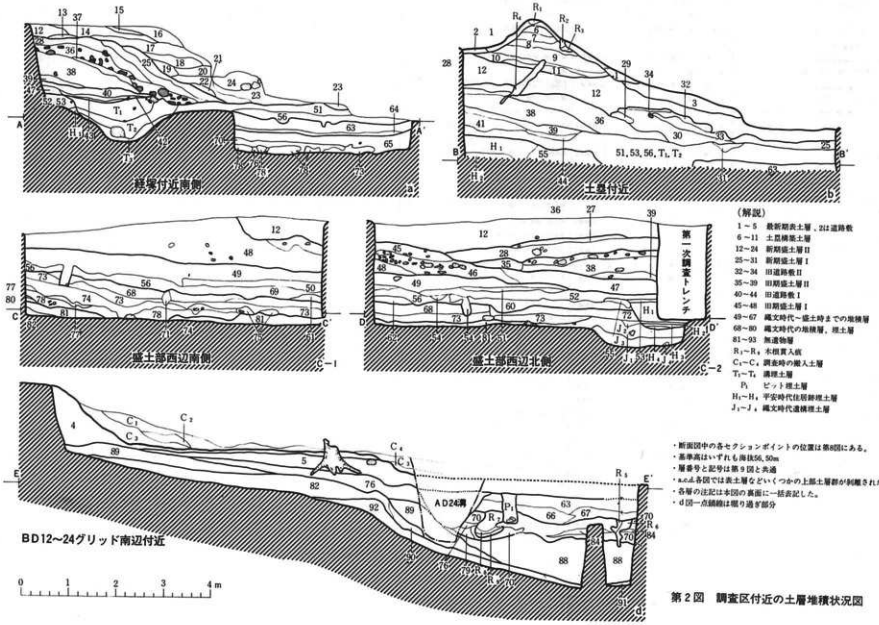
ＡＦ24住居跡（縄文時代）（第３図、第３表）

調査区の中央西辺部で、平安時代のＡＥ24・ＡＦ24両住居跡の下から発見された住居跡である。完掘されていないので、全形は不明であるが、平面円形の竪穴住居跡と推定される。その規模は推定直径4.5ｍ、検出面からの深さ約0.3ｍで、周溝は見られない。壁は東側部分では地山地形の関係で検出できなかったが、南側には、中段にテラス状の平坦面を有する壁が残っている。床には直径0.25ｍ内外深さ0.15～0.2ｍ前後の浅い円筒形ピットが２発見されている。

住居跡内の遺物出土状況は調査時には充分確認されなかったが、埋土の上部から包含層中の土器片と同種の土器片多数とフレークなどが出土している。

ＡＩ15ピット(1)（第５図、第２表、写真３－１）

包含層下から検出された北々西－南々東方向に長い平面不整楕円形の浅い皿状ピットである。



（解説）

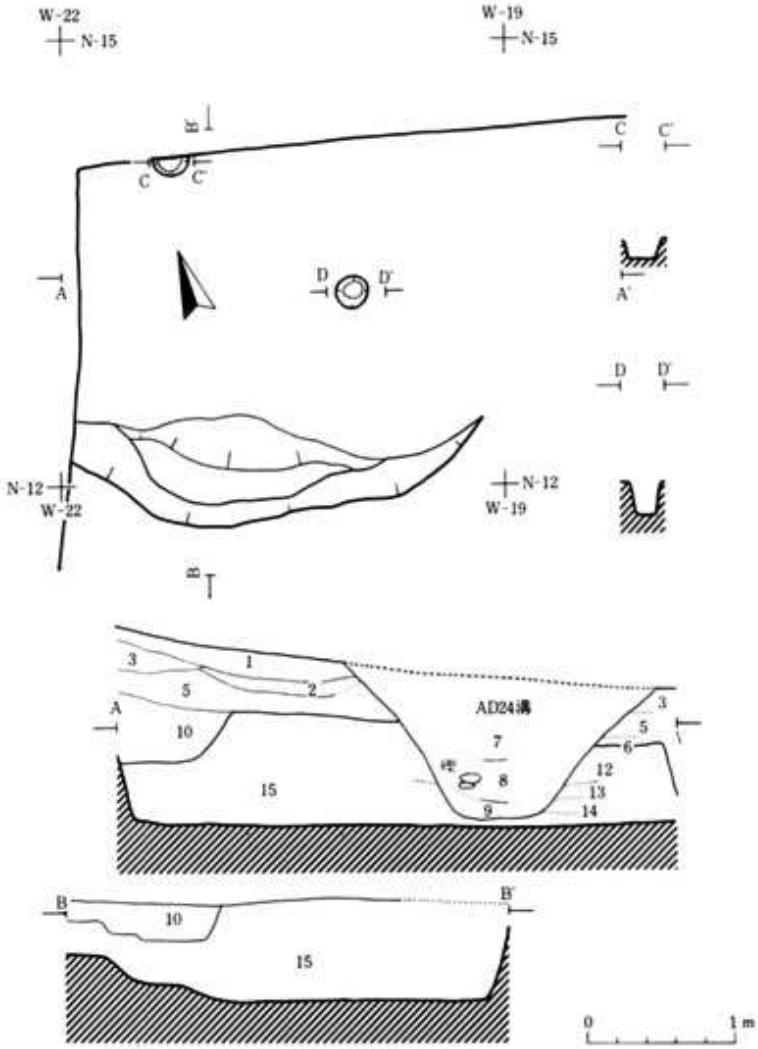
1～5　最新期表土層，2は道路敷
6～11　土塁構築土層
12～24　新期盛土層Ⅱ
25～31　新期盛土層Ⅰ
32～34　旧道路敷Ⅱ
35～39　旧期盛土層Ⅱ
40～44　旧道路敷Ⅰ
45～48　旧期盛土層Ⅰ
49～67　縄文時代～盛土時までの堆積層
68～80　縄文時代の堆積層，埋土層
81～93　無遺物層
R_1～R_4　木根貫入痕
C_1～C_4　調査時の搬入土層
T_1～T_4　遺構土層
P_1　ピット埋土層
H_1～H_4　平安時代住居跡埋土層
J_1～J_4　縄文時代遺構埋土層

・断面図中の各セクションポイントの位置は第8図にある。
・基準高はすべて海抜56.50m
・層番号と記号は第9図と共通
・a.c.d.各図では表土層などいくつかの上部土層群が剥離された後の状況を表わしている。
・各層の注記は本図の裏面に一括表記した。
・d図一点鎖線は掘り過ぎ部分

第2図　調査区付近の土層堆積状況図

鬼柳西裏遺跡第２図付表土層注記

層番号	土	色	土	性	特	性
1	暗	褐	Hue 10Y R ⅔	各種混合	—	
2	黄	褐	10Y R ⅔	礫	固く締まっている。	
3	暗	褐	10Y R ⅔	埴	土	粘土分富く、植生根が多く入り込んでいる。
4	褐 ～ 暗	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	礫やゴミが混入している。	
5	暗	褐	10Y R ⅔	黄	植 土	しまりなく、植生根が多く入り込んでいる。
6	褐		10Y R ⅔	シルト質埴土	乾燥著しく、植生根が多く入り込んでいる。	
7	黄	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	6よりやや強く、小礫と植生根を少し含む。	
8	暗	褐	10Y R ⅔	埴	土	シルト、小礫、腐植、粘土の混合土層で、中の固くしまっている。
9	〃		10Y R ⅔	砂	埴 土	直径５～10cmの礫と植生根を若干含む。
10	褐		10Y R ⅔	シルト質埴土	植生根を若干含む、固くしまっている。	
11	灰	黄	褐	10Y R ⅔	〃	直径１～４cmの礫や植生根を若干含み、褐色土の塊が混入している。
12	暗	褐	10Y R ⅔	埴	埴 土	粘が強く、腐植土を若干、直径１～３cmの礫、縄文時代遺物を含む。
13	明	黄	褐	10Y R ⅔	粘	土
14	暗	褐	10Y R ⅔	埴	埴 土	縄文時代の遺物を含む。
15	黒色 ～ 暗	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	砂礫 ＋ 粘 土	—	
16	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	粗砂、小礫、腐植土の混土層などを少量混入する。	
17	〃		10Y R ⅔	〃	土器破片、縄文時代の遺物を含む。	
18	暗 褐 ～ 黒	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	縄文時代の遺物を含む。	
19	暗	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	—	
20	〃		10Y R ⅔	シ ル ト	固く締まっている。	
21	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	やや軟＋暗褐色土に明黄褐色の混入した岩屑の粒が多く含まれている。	
22	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	直径１cm内外の小礫を含む。	
23	〃		10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	明黄褐色土を含む。	
24	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	21とは同質の土層である。	
25	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	粘りが強く、固く締まっている。	
26	黒	褐	Hue 10Y R ⅔	〃	スコリア状岩屑と直径１～２cmの礫を少し含む。	
27	〃		10Y R ⅔	〃	スコリア質の土層　色土。スコリア状岩屑、直径１～２cmの礫を含む。	
28	暗 褐 ～ 黒	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	スコリア状岩屑と直径０.５～３cmの礫混入した岩屑や礫を含む。	
29		褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	固くしまっている。	
30	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	比較的多量のスコリア状岩屑の混入と縄文時代遺物を含む。	
31	灰	黄	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	粘土の混ぶんっている。
32	黄	褐	10Y R ⅔	〃	暗褐色土やスコリア状岩屑を少量混入し、固く締まっている。	
33	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	縄文時代遺物を含み、固く締まっている。	
34	黄	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	固く締まっている。	
35	暗	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	直径１～５cmの礫、スコリア状岩屑を含む。	
36	明	黄	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	風化 岩 質	植物された細灰岩質風化岩の塊を主体とした土層。
37	黒	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	直径１～５cmの風化岩屑を少し含む。	
38	〃		10Y R ⅔ ～ ⅓	クサボタ質埴土	スコリア状岩屑、直径１～２cm礫を含む。34、35と似ている。	
39	〃		10Y R ⅔	〃	スコリア状岩屑、直径１～３cmの礫、縄文時代遺物を含む。	
40	灰	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	スコリア状岩屑、直径３～５cmの礫を多く含み、固く締まっている。	
41	黒	褐	10Y R ⅔	〃	35の一段下がるもので、固く締まれ組められた層様がある。	
42	灰	褐	10Y R ⅔	粘	土	下部に水酸化第二鉄の沈着が見られ、固く締まっている。
43		褐	10Y R ⅔	—	水酸化第二鉄の固着層。	
44	灰	褐	7.5 Y R ⅔	シルト質埴土	褐色の混ぶんがあり、直径２cmの礫を含み、固く締まっている。	
45	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	スコリア状岩屑、直径１～３cmの礫風化岩あと明褐色土が混入している。	
46	暗	褐	10Y R ⅔	〃	直径２～10cmの礫を多く含む。	
47	黒	褐	10Y R ⅔	〃	スコリア状岩屑、直径１～２cmの礫、縄文時代の遺物を少し含み、柔らかい。	
48	〃		10Y R ⅔	〃	46と同質の工層があるが含まれる礫が小さく、粘も少量である。	
49	〃		10Y R ⅔	〃	スコリア状岩屑や、直径１～３cmの礫、平安時代の遺物を含み、柔らかい。	
50	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	スコリア状岩屑、直径１～５cmの礫を少量含む。	
51	暗 褐 ～	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	暗褐色土と褐色土の混状混合層。	
52	黒	褐	Hue 10Y R ⅔	クサボタ質埴土	49と同質であるが、中の礫まりがある。	
53	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	—	
54		褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	黒褐色から褐灰に崩ったり、腐植土層か。	
55	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	直径１～３cmの礫を少し含む。	
56	〃		10Y R ⅔	〃	直径１～５cmの礫とスコリア状岩屑を含む。	
57	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	スコリア状岩屑、直径１～２cmの礫、平安時代の遺物を含み柔かい。
58	〃		10Y R ⅔	〃	直径１～２cm大の礫と褐色シルトを少し含む。
59	暗 ～ 明	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	シルト質埴土	褐色土に黒色土が若干混入した層。
60		褐	10Y R ⅔	〃	61層と同一層らしい。
61	〃		10Y R ⅔	〃	直径１～２cm大の礫を含む。
62	〃		10Y R ⅔	シ ル ト	—
63	暗 ＋ 明	褐	10Y R ⅔ ＋ ⅓	シルト質埴土	褐色土塊に明褐色が斑状に入り込んでいる。
64	暗		10Y R ⅔	細	砂	薄い層である。
65	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	62層と水洗同質であるが、スコリア状岩屑を含み、明＋縄文時代遺物を若干含む。
66	暗	褐	10Y R ⅔	〃	縄文時代の遺物を少し含む。65相当層。
67	〃		10Y R ⅔	〃	65と同一であるが前記を含む。
68	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	直径１～３cmの礫、スコリア状岩屑、縄文時代遺物を含む。
69	〃		10Y R ⅔	〃	68と同質であるが、礫や岩屑の量がかなりすくない。
70	暗 褐 ～ 黒	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	シルト質埴土	炭化物を含み、粘り強く、縄文時代の遺物を含む。68相当層。
71	暗	褐	10Y R ⅔	〃	直径１～２cm大の礫を含む。
72	暗	褐	10Y R ⅔	〃	69とは粘りがある。
73	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	69とは同質で、炭化物も含む。
74	〃		10Y R ⅔	〃	69と同質であるが、直径５～15cm大の礫や焼土末も含み、遺物も多い。
75	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	縄文時代遺物や礫を含む。
76	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	遺物が特に多い。75相当層。
77	褐		10Y R ⅔	シルト質埴土	スコリア状岩屑や縄文時代遺物を含む。
78	黒	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	クサボタ質埴土	褐色シルト、炭化物、焼土、縄文時代遺物を多数含む。
79	暗	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	78とは同質、75相当層。
80		褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	シ ル ト	炭化物末を少し含む。
81	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	スコリア状岩屑を少し含み、粘りが強い。
82	〃		10Y R ⅔	砂礫質埴土	固く締まっている。
83	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	80とは同質。
84	〃		10Y R ⅔	〃	中や固く締まっている。
85	暗 ～ 明	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	砂礫質埴土	—
86		褐	10Y R ⅔	シ ル ト	—
87	暗 ～ 黄	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	シルト質埴土	—
88	暗		10Y R ⅔	シルト質埴土	—
89	黒		10Y R ⅔	クサボタ質埴土	直径１cm前後の礫とスコリア状岩屑を含み、固く締まっている。
90	暗 ～ 明	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	シルト質埴土	褐色土と黒色土の混合土層。
91	暗		10Y R ⅔	細	砂	—
92	暗 ～ 明	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	礫	1～10cm大の礫を主とする基礎層。
R_1～R_3	—		—	古	期	本層第八による第縄土層、変質土層。
C_1	明	褐	10Y R ⅔	埴	土	礫が混入している。
C_2	黒	褐	10Y R ⅔	クサボタ質埴土	礫が混入している。
C_3	〃		10Y R ⅔	褐	植 土	古墳のゴミが混入している。
C_4	〃		10Y R ⅔	クサボタ質埴土	礫とゴミが混入している。
T_1	〃		10Y R ⅔	シルト質埴土	粘り強く、直径１～３cmの礫、縄文時代遺物を含む。
T_2	〃		10Y R ⅔	〃	に ぶい 黄 褐	に ぶい黄褐色シルトを含み固く締っている。
T_3	に ぶい 黄 褐 ～ 褐		10Y R ⅔ ～ ⅓	シルト質埴土	前記同色の黄状混合土層。
P_1	明	褐	10Y R ⅔	〃	—
H_1	〃		10Y R ⅔	〃	炭化物末、平安時代遺物を含む。
H_2	〃		10Y R ⅔	〃	H_1 の上に焼土をさらに混入している。
H_3	〃		10Y R ⅔	〃	〃
H_4	極 暗 赤	褐	5 Y R ⅔	シルト質埴土	〃
J_1	に ぶ い 黄 褐 ～ 黒		10Y R ⅔ ～ ⅓	シ ル ト	炭化物混入
J_2	黒	褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	炭化物末、焼土用、縄文時代遺物を含む。
J_3	暗 褐 ～	褐	10Y R ⅔ ～ ⅓	〃	両色の斑状混合土層炭化物、縄文時代遺物を含む。
J_4		褐	10Y R ⅔	シルト質埴土	〃



第３図　ＡＦ24住居跡(縄文時代)平断面実測図

	土	色	土 性	特	性
1	暗褐	Hue10YR¾	シルト質埴土	明黄褐～淡黄橙(Hue10YR⅞～⅚)の風化岩片、直径5cm内外の礫、土器片を含む	古墳時代土層
2	灰褐	7.5YR¾	シルト質埴土	砂、直径2cm大の礫を含み非常に固くしまっている 褐色の斑が入っている	
3	暗褐	10YR¾	シルト質埴土	土器片、直径3～5cm大の礫を含みやや固くしまっている	
4	黒褐	Hue10YR⅜	埴壌土	土器片、石片、炭化物を含む	
5	褐色＋暗褐	Hue10YR⅝＋¾	シルト	無遺物層	
6	褐	Hue10YR⅝	細 砂	〃	
7	黒褐	Hue10YR⅜	シルト質埴壌土	縄文時代遺物、石片などを含む	AD24溝埋土層
8	黒褐	Hue10YR⅜	〃	7の土に黄褐色(Hue10YR⅝)シルトを微量混入する	
9	純い黄褐～褐	Hue10YR⅝～¾	シルト	若干グライ化している	
10	〃	〃	〃	AE24住居跡埋土層群	
11	〃	〃	〃	AF24住居跡埋土層群	
12	褐	Hue10YR⅝	シルト	やや粘土が混入している	縄文時代遺物包含層
13	黒褐	Hue10YR⅜	シルト	〃 炭化物混入	
14	黒褐～暗褐	Hue10YR¾～⅜	シルト		
15	〃	〃	〃	AF24(縄文時代)住居跡埋土群(12～14も含む)	

その規模は長径約 1.25 m、短径約 0.8 m で、検出面からの深さ 0.06 ～ 0.18 mを測り、北々西寄りの部分には、直径 0.06 m内外の浅い皿状の落ち込みになっている。

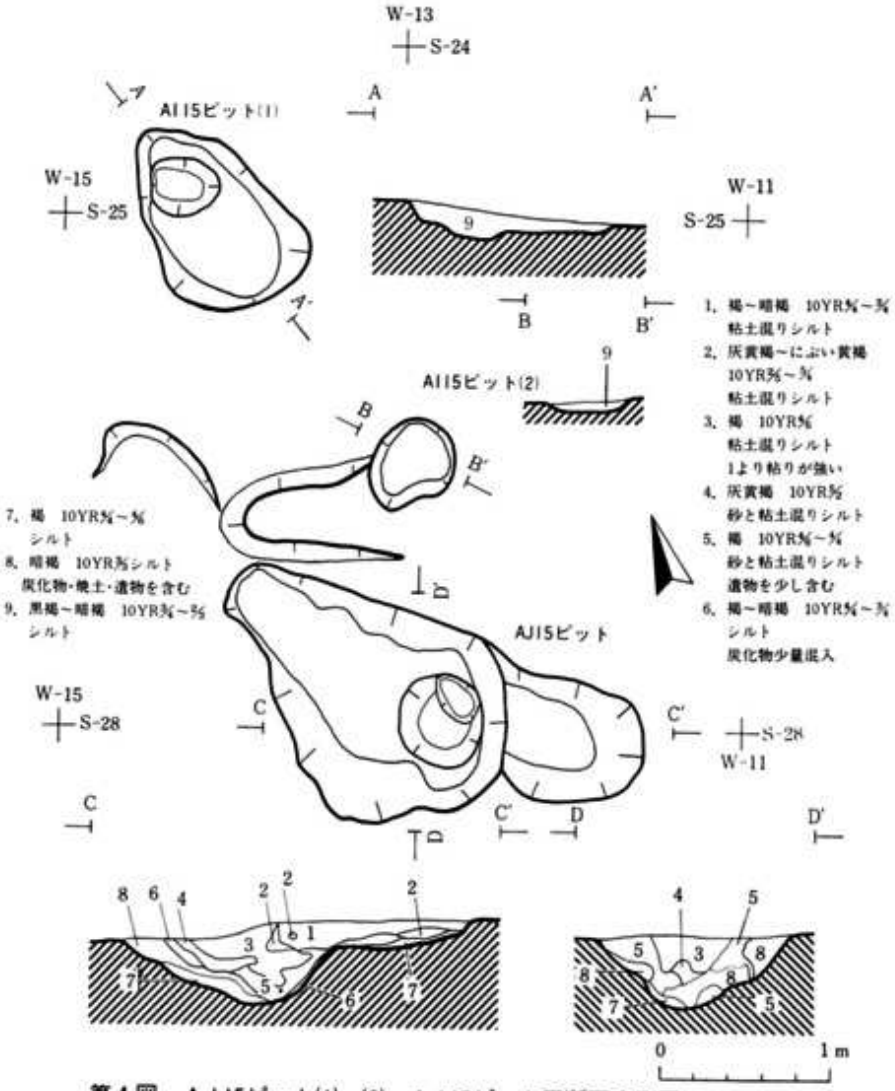
ピット内の埋土は暗褐色シルト質軽埴土の単層で、この中から土器片 2 点が出土している。

A I 15ピット(2)（第 5 図、写真 3 － 1 ）

A I 15ピット(1)の南々東方向に位置する、直径 0.48 ～ 0.58 m、検出面からの深さ約0.05 mの浅い皿状ピットである。埋土はA I 15ピット(1)と同様、暗褐色のシルト質軽埴土の単層である。遺物は出土していない。

A J 15ピット（第 5 図、第 3 表、写真 3 － 1 ）

A I 15ピット(1)、(2)の南方部に位置する平面隅丸三角形状のピットである。ピットは二つの平



第 4 図　A J 15ピット(1)、(2)、A J 15ピット平断面実測図

面不整楕円形のピット部分よりなっている。その一つは北西—南東方向に長い断面がボール状のピットで、長さ約 1.9 m、最大巾約 1.24 m、検出面からの深さ約 0.42 mを測り、その南東部は直径約 0.54 mの範囲で周囲の底面より低く落ち込んでいる。他のピットは西南西—東南東方向に長い断面皿形のピット部分で、長さ約 0.9 m、巾 0.74 m、検出面からの深さ 0.16 m を測る。両者を合わせたピット全体の規模は長さ約 2.64 m、巾約 1.24 mを測る。

ピット内の埋土は 7 層よりなるが、自然堆積層がどうか、よく解らない。遺物はこれらの層の主として中層部から出土している。

A I 21ピット（第 6 、21図、第 1 、 2 表、写真 3 — 3 〜 5 ）

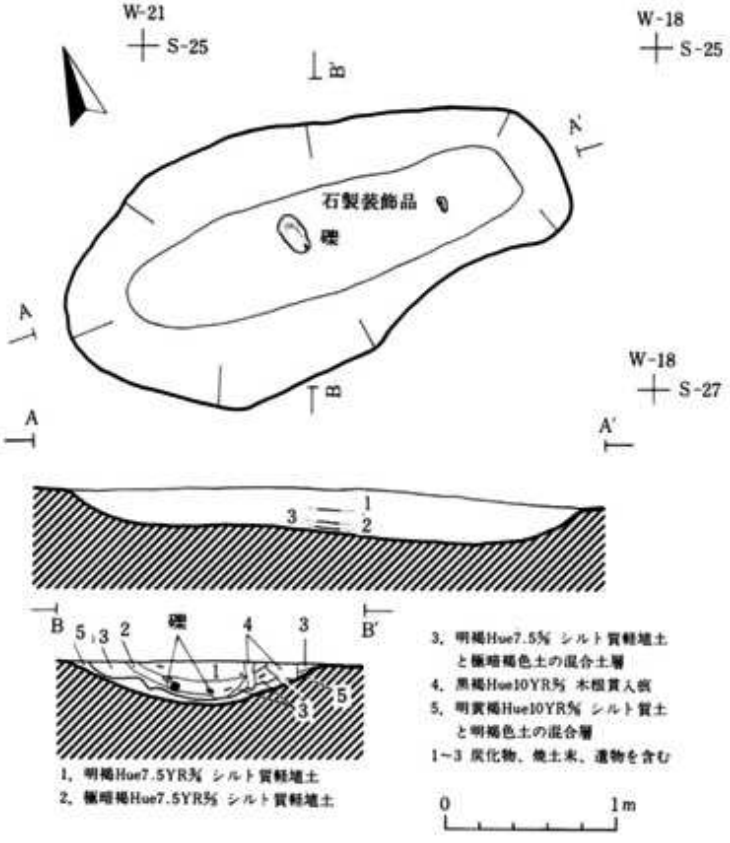
A I 15ピット(1)、(2)の西方部に位置する。東西方向に長い平面不整長楕円形の浅い舟底状ピットである。その規模は長径 3.02 m、短径 1.5 m、検出面からの深さ 0.25 mを測る。

埋土層は撹乱層を除いて 4 層あるが、いずれも自然堆積に近い状態で堆積している。そのうち、上部の 2 層中からは縄文土器片のほか、第21図に掲げるような有孔石製装飾品や礫などが出土している。

なお第 8 図の包含層中の遺物出土状況図からも知られる様に、ピットの周囲を被う包含層中の遺物は他と比べて、著るしく少ない。この事は、A I 21ピットと包含層との時間的な前後関係を知る手掛りとなるであろう。しかしながら、調査時の土層観察からは両者の関係を充分明らかにはできなかった。

A J 21ピット（第 7 、14〜21図、第 1 ・ 2 表、写真 2 — 2 、 3 、 4 — 1 〜 4 ）

A I 21ピットの南方部に位置する、平面が北を上にするC



第 5 図　A J 21ピット平断面実測図

字状の不整形ピットであるが、その全体形状は２次の調査によって明らかにされたものである。このピットは図からも解るように幾つかのピットの複合と推定される。しかし、土層観察資料が少ないので、複合関係の詳細は不明である。ただ、全体的な形状から、少なくとも、北東端と南東端の２ピットの重複している事はほぼ確実である。そのうち前者は南北長約 3.86 m、東西巾約 2.2～2.5 m、検出面からの最大深約 0.7 mの平面不整楕円形、断面、不整舟底形のピットである。また後者は口の直径 0.9～1.4 m、検出面からの最大深約 1.2 mの平面不整楕円形、断面平底の袋状ピットである。さらにその底面南壁際には長径 0.4 m、短径 0.42 m、深さ約 0.22 mの浅い楕円形の皿状ピットが付属している。そして以上の両ピットの間には浅い鍋底状のピットがいくつか重複しているらしい。

ピット中の埋土は第７図にも示す様に遺物や礫などを含んだ各層よりなるが、観察された限りでは、大体、自然堆積に近い様相を呈している。そして、これらの埋土上には平安時代のＢＡ18住居跡が掘り込まれている。またピットの北東部はＡＤ24溝によって切られている。

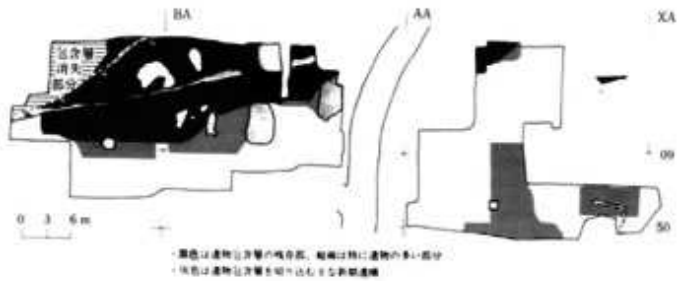
埋土中からは多数の土器片のほか、朱塗り土器片や第15図20、26、第16図１、第18図３、４、７、17－５、13などに示す様な各種の石製品が出土している。遺物の出土状況については充分な確認がなされていない。ただし調査時の観察によると、ほとんど包含層の場合と同様、不定方向に散らばっていた。

(2) **遺物包含層**（第８・９・10～22図、第２・３表、写真２－１、３－２、４－５、６５）

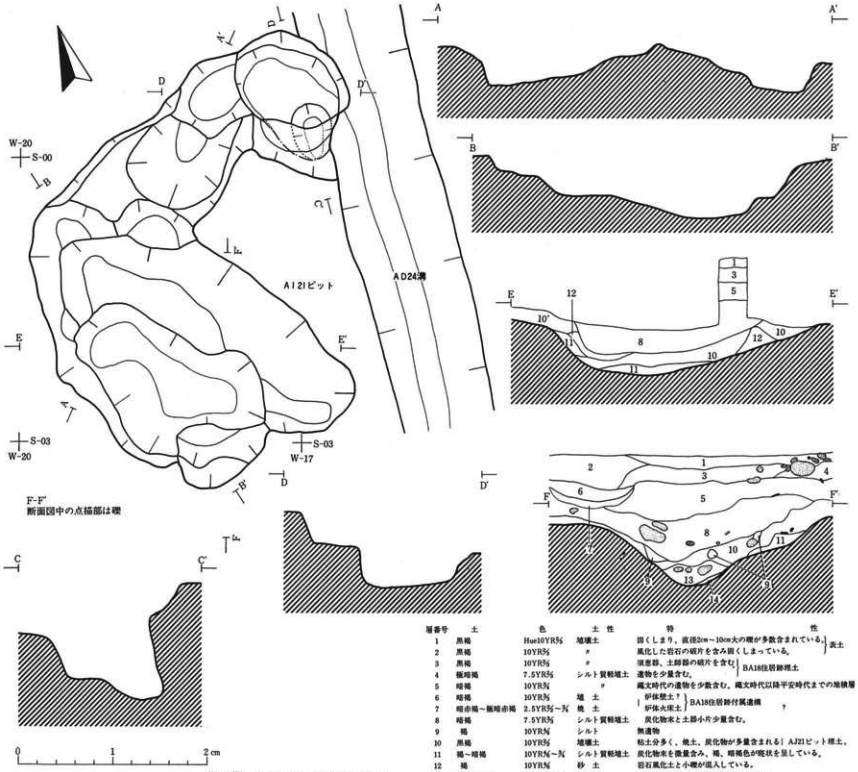
＜規模と全体状況＞縄文時代の遺物包含層は当初、調査区の西辺部で存在が確認されたが、二次に渡る調査の結果、第６図に示す様に調査区全域を含む周辺部一帯に広がっている事が判明した。

包含層の層厚はⅢ章でも述べたように、一般に調査区の南西部で厚く、周辺部で薄くなる傾向が見られた。また、遺物の出土数量も層厚に準じた形で、南西部で多く、その周辺部で少なくなる傾向が認められた。

＜遺物出土状況＞（写真２－１、３－２、４－５、６）包含層中の遺物は大半が縄文土器片で占められており、それに多数の礫やフレーク、コアなどの石材類ともに、石器類や土製品が若干伴なって出土している。包含層は幾つかの分層よりなるが調査の日程的制約により、細かな分層発掘調査を実施する事ができなかった。そのため各層別の遺物出土状況は充分観察されていない。ただ包含層全体の遺物出土状況については不充分ながらかなり詳しく調べる事ができた。その結果は第８図に示す通りである。図からも解る様に縄文土器片を主とする遺物や礫の方向は一定せ

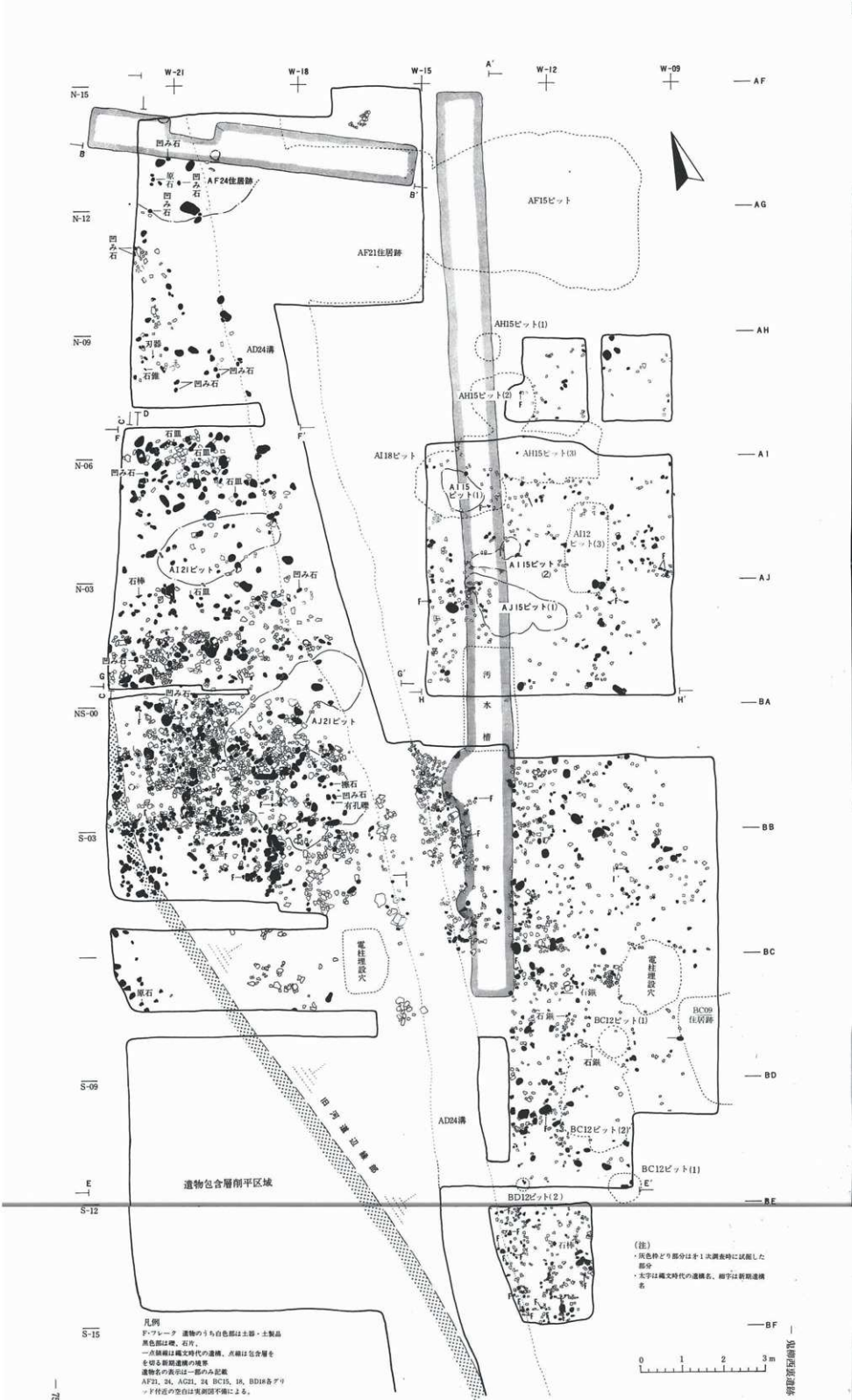


第６図　鬼柳西裏遺跡第１－２次調査区域内の縄文時代の遺構配置図

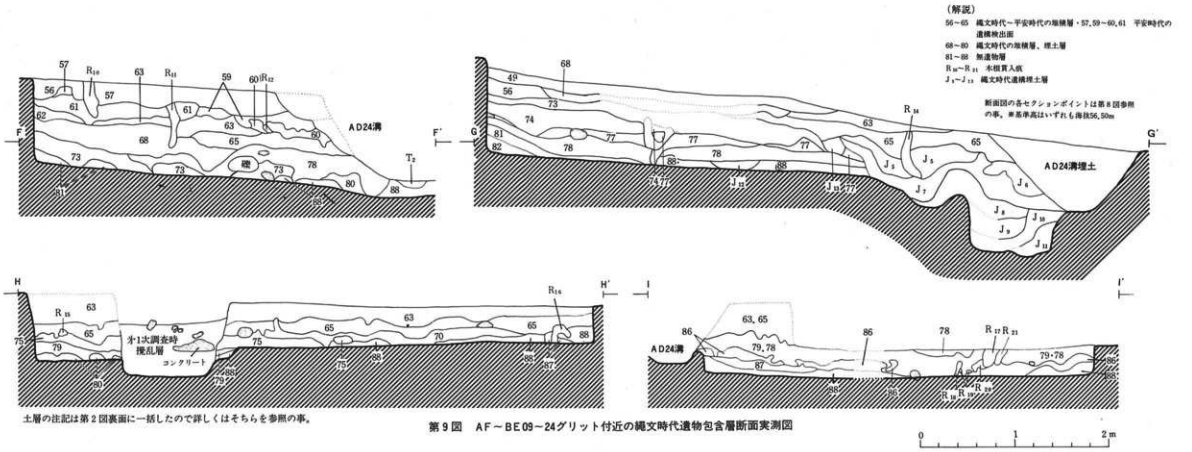


第７図　ＡＪ２１ピット平断面実測図

層番号	土	色	土性	特	性
1	黒褐	Hue10YR5/1	埴壌土	固くしまり、直径2cm～10cm大の礫が多数含まれている。	表土
2	黒褐	10YR5/1	〃	風化した岩石の破片を含み固くしまっている。	
3	黒褐	10YR5/1	〃	須恵器、土師器の破片を含む	BA18住居跡埋土
4	極暗褐	7.5YR5/3	シルト質埴壌土	遺物を少量含む。	
5	暗褐	10YR3/3	〃	縄文時代の遺物を少数含む。縄文時代以降平安時代までの堆積層	
6	暗褐	10YR3/3	埴　土	炉体壁土？	BA18住居跡付属遺構　？
7	暗赤褐～極暗赤褐	2.5YR3/2～3/4	埴　土	炉体火床土	
8	暗褐	7.5YR3/2	シルト質埴壌土	炭化物炭と土器小片少量含む。	
9	褐	10YR4/6	シルト	無遺物	
10	黒褐	10YR3/2	埴壌土	粘土分多く、焼土、炭化物が多量含まれる	AJ21ピット埋土。
11	褐～暗褐	10YR3/4～3/3	シルト質埴壌土	炭化物炭を微量含み、褐、暗褐色が斑状を呈している。	
12	褐	10YR4/6	砂　土	岩石風化土と小礫が混入している。	
13	暗褐～黒褐	10YR3/3～3/2	シルト	直径10cm未満の円礫ないし角礫を含む。	
14	暗褐	10YR3/3	〃	無遺物	



第8図　AF～BE－09～24グリッド付近の縄文時代遺物包含層内の遺物出土状況平面図



土層の注記は第2図裏面に一括したので詳しくはそちらを参照の事。

第9図　AF～BE09～24グリット付近の縄文時代遺物包含層断面実測図

層番号	土	色	土性		層区分
R_{10}～R_{21}	—		各種	木根貫入による腐植土層、変質土層	冬期木根痕跡土層
J_5	暗褐	7.5YR5/4	シルト	炭化物末少量と多数の縄文時代遺物を含む	縄文時代ピット埋土層
J_6	暗褐～褐	10YR3/3～5/4	シルト質軽埴土	炭化物末、焼土と縄文時代遺物を多く含む	〃
J_7	褐	10YR5/6	砂壌土	炭化物末と縄文時代遺物が少し含まれる	〃
J_8	暗褐	10YR3/4	シルト質軽埴土	炭化物末と縄文時代物末が少し含まれる	〃
J_9	褐	10YR5/6	シルト質埴土	スコリア状岩屑、縄文時代遺物が少し含まれる	〃
J_{10}	暗褐	10YR3/3	シルト質軽埴土	混入物はJ_8と同じである	〃
J_{11}	〃	10YR3/4	〃	炭化物を混入している	〃
J_{13}	〃	7.5YR3/4	〃	固く締まっている	〃
J_{14}	暗褐～褐	7.5YR5/4～5/6	シルト質壌土	暗褐色土と褐色土の斑状混合層	〃

ず、一見、無作為に投棄され、堆積した様相を示している。しかしＢＡ21グリッドやＡＩ21ピット周辺などではかなり意図的な遺物の集積拡散状況も認められ、包含層の形成に当って、自然的な堆積作用のほかに、しばしば人為的な営力が積極的に介入した事を示唆している。

＜出土遺物＞包含層中の出土遺物は総計30,664点に及ぶ。その内わけは第３表に示した通りである。表からも解る様に、出土遺物の大多数は縄文土器片である。次に多いのはフレークを中心とする石材類で、それに石器類が続く。石器類の総数は492点とそう多くないが、つまみつきのいわゆる石匙をはじめ、その他の不定形の加工フレークを中心とする刃器類、それに石鏃、石錐、磨製石斧、石皿、砥石、石製装飾品、打製あるいは磨製の円板状石製品、石製紡錘車、打製掘具、石棒、凹み石、その他の未製品類などがあり、種類は極めて豊富である。その中で、特に多く見られるのは刃器類と凹み石で、それに石鏃、円板状石製品、石皿などが続き、他はいずれもごくわずかである。土製品としては、土偶、土版、土製石皿模造品、環状土製品、それに、土器片を打ち欠き加工した円板状土製品が出土している。その中では円板状土製品が特に多い。他の土製品はいずれも２～３点以下である。

以上の包含層出土遺物のうち、土器類については第５～10図、石器類については第11～14図、土製品については第15図にそれぞれ代表例を図示したが、各種別毎の特徴については、(a)の項で述べた遺物の説明と併せて(c)で一括して述べる。

(3) 各遺構内および包含層出土の遺物（第11～22図、第２～３表、写真13～21）

各遺構および包含層中から出土した遺物は数が多い上に、整理も充分進んでいないので、全てについて詳細に述べる事ができない。そこで、現在までに知られた範囲で各出土遺物の特徴を種類別に見てゆく事にしたい。

＜土器類＞ 出土した土器片はほとんど風化の著るしい、修復不能の細片である。土器片の胎土中には多くの場合、砂がやや多量に混入しており、焼成は一般に不良である。色調は黄白、橙、鈍い橙、赤褐、黒褐、黒、浅黄橙、暗灰褐など各種あり、一定しない。

出土した土器類の中に、どの様な器種や器形が含まれているが、復元作業が充分に進展してないのでよく解らない。ただ、ある程度修復の進んだ個体の観察からすると、ほとんどの土器が平底と推定される。土器全体の大きさは底径2.5㎝、高さ５㎝未満の超小型から、底径20㎝、高さ50㎝以上の大型まで各種ある。器形としては、現在までのところ、大型深鉢ーA、中～小型深鉢ーB、注口付浅鉢ーC、台付鉢型土器ーD、胴張り直口のカメあるいは釣手付土器ーE、その他の小型容器類ーF、超小型容器類ーGなどの存在が確認されている。その他の器形については、あまりはっきりしないが、今後の整理過程で器形の種別の増える事はほぼ確実である。A～Gまでの各器形はそれぞれにさらに幾つかの形態、文様構成の違う種類を含んでいるが、その実態は、資料全体の詳細な観察を経ていないので、余りよく解らない。

現在のところ、50年度の出土資料の一部について、部位別、文様別の分類がなされているので、それらを中心に、包含層から出土した土器類の形態、文様別の特徴を見てゆく事にしたい。

（底部資料） 土器類の底部は観察された限りでは、全て平底であった。その大きさは先述した通り、超小型から大型まで各種ある。底部外面は無文の例が多いが、網代圧痕や木葉、笹葉圧痕

の見られる例もある。網代圧痕の場合、原体には平織りなどいくつかの種類が認められる。

また、底部と胴体部の接合法についても、いくつかの種類が認められた。しかし、技法別の出現頻度は現在のところよく解っていない。（第13図、写真９－５、６）

（口辺～胴体部資料）　口辺部資料と胴体部資料は土器全体の形態を知る上でも、文様の特徴を知る上でも密接に関連していると思われるので、ここでは一括して扱う。全体的な観察の結果、口辺～胴体部資料は形態・文様等の特徴により下記のⅠ～ⅩⅥの16群に大別された。（第10図～14図、第２表、写真５～７、８－１）

Ⅰ群　器形的にはＡ・Ｂの器種を主体とし、やや胴張りした口縁に直立ないしやや外傾する平らな口縁のつく例が多い。器壁外面に施される文様の構成は単純で、口辺部から胴体部にかけて、全体的に施されるか、口辺部にわずかの無文帯を残して、胴体部に施される例が多い。Ⅰ群の土器は施文上の特徴からさらに次の４類に細分される。

これらの土器類は伴出したⅡ群の土器類との関係から、それに伴なう、粗製土器類と考えられる。類例は県内の江刺市五十瀬神社前遺跡[(1)]のⅡ群３類や北上市八天遺跡[(2)]Ⅱ～Ⅲ群前半期の出土資料および宮城県松島町西ノ浜貝塚[(3)]第４層出土資料などの中に見る事ができる。時期的には大木10式期の後半を中心に、その前後の時期に位置付けられるであろう。

１類　斜縄文の施された土器類である。縄文の種類により、無節縄文**－a**、単節縄文**－b**、その他の縄文**－c**のグループに細分される。これらのグループはさらに原体の撚りの違いにより右撚りのグループ**－a_1**、**b_1**、**c_1**と左撚りのグループ**－a_2**、**b_2**、**c_2**の２者に細分される。

前記各種のうちでは、ｂ類が圧倒的に多く、その中ではb_2タイプの例が多い。ａ類はごくわずかで、ｃ類はほとんど見られない。なおｂタイプの中には、縦方向にならぶ結節の回転圧痕文を伴なう例も見られるが、その数はごくわずかである。

縄文原体の回転方向は縦・横のいずれかであるが、観察された限りでは、縦方向の例が多い。施された縄文の条の巾は３～４㎜が普通であるが、５㎜を超える粗大なものや、0.5㎜以下の微細なものも、ごくわずかではあるが見られる。この類は出土した土器類の中では最も普遍的なものの一つである。（第10図１～３、７、写真６－１）

２類　紐を巻きつけた棒状原体を縦回転させて、撚糸文の施された土器類である。１類同様、普遍的に見られる。撚糸文は、原体の撚りの違いにより、右撚りのグループ**－a**、左撚りのグループ**－a_2**に大別されるが、いずれも、ごく一般に見られる。なお、このグループに入る個体の中には、口辺部の部分に横方向の撚糸文の施されるタイプのものも見られる。（第10図４～６、写真５－１、６－１）

３類　１・２類と同様、胴体部に縄文が施されたり**－a**、撚糸文が施されたり**－b**する土器群であるが、口辺部が無文で胴体部との境界が隆線や沈線あるいは円形、横長、縦長など各種の刺突点列で区画されたり、あるいは刺突点列で埋められるグループである。このグループはさらに、口辺部～境界部に施される区画要素の違いにより、沈線のみが用いられるタイプ**－a_1**、**b_1**、沈線と点列の併用されるタイプ**－a_2**、**b_2**、点列のみ用いられるタイプ**－a_3**、**b_3**、隆線のみ用いられるタイプ**－a_4**、**b_4**　隆線と沈線の並用されるタイプ**－a_5**、**b_5**、などに細分する事も可能である。さ

らにb_5などでは、口辺部内面にC字状の隆線や口辺に平行する隆線一条の施される例が知られる。以上の3類の土器類は1・2類と比べるとかなり少ない様であるが、ごく一般的に見られる。（第10図12、14、15、第11図4～6、17、写真6－1）

4類　格子目状に紐を巻きつけた棒状原体の回転による、格子目状撚糸文の施された土器類である。その数はごく少数で、ほとんど細片である。（第10図8－9、写真6－1）

5類　縦方向の条痕文を有する土器類であるが、出土点数は極めて少ない。おそらくBに属する器形であろう。（第10図10－11、写真6－1）

Ⅱ群　口辺～胴体中部が沈線区画された、いくつかの文様帯と無文帯の組み合わせからなる入り組み文で装飾される土器類である。多くの場合、上記沈線区画の一部にはC字状ないし、釣針状の短かな隆線が併用され、時には、それらの隆線区画部に各種の線状点列文が施されている。このグループは文様帯を構成する地文の種類により、斜縄文を主とするもの—**1類**と撚糸文を主とするもの—**2類**に大別される。そして両者とも、しばしば、放射状ないし同心円状の各種刺突文が付随し、時には葉脈状の沈線文様帯も共伴する。

以上の土器類の器形としてはA・B・Eなどが推定される。その中にはⅠ群1類で見られる様な平縁、胴張りタイプの深鉢型土器の他に、図示した様な幾つかの変化が認められる。ただし、文様と器形との具体的な関係はまだよく解らない。

出土破片数は比較的多く、Ⅰ群1・2類に共伴してごく普通に見られる。類例は先の五十瀬神社前遺跡のⅡ群2類や八天遺跡のⅡ群3・4類および西ノ浜4層出土資料の一部、同じく宮城県鳴瀬町梨木囲貝塚[4]1群の一部などに見られ、様式的に大木10式の新期に相当すると思われる。（第10図17～24、第11図1～3・5・6・19、写真5－2・3・6－2・3）

Ⅲ群　胴体部の装飾はⅡ群と類似しているが、口辺部の器壁がやや内彎ないし外反し、その外面に口辺部文様帯の形成されるグループである。口辺部文様帯は屈曲部分にしばしば隆線が施されたり稜が形成され、胴体部と境される。その一部はさらに上にまくれ上がり、何ケ所かの部分で平縁ないし波状の口縁に取りつく。多くの場合、波状口縁は有孔で、立体化の著るしい例も見られる。隆線を横断する形で刻目が付けられたり、横長の刺突がなされたりする例も見られる。さらに多くの場合、この隆線に沿ったり、口縁部に沿って各種の点列文が施されている。器形としてはB・Eなどが推定される。特にEの器形では、しばしば、耳たぶ状の波状突起を伴なう注口が見られる。現在のところ整理があまり進んでないので詳細は不明であるが、さらにいくつかのグループに細分し得る。

類例は五十瀬神社前遺跡Ⅱ群2b～c類、八天遺跡Ⅱ群4類の一部、宮城県西ノ浜4層出土資料の一部及び梨木囲貝塚1群の一部などに見られ、様式的には大木10式の新期に相当しよう。（第11図7～18、第12図12～15・20、写真5－5・7－1・2）

Ⅳ群　ほとんど直立ないし、やや外傾した平らな口縁がごくわずかに起伏する波状口縁を有し、文様帯が主として、縦・横方向にめぐる沈線と隆線で区画される、いわゆる磨消縄文土器の一群である。地文はほとんど、単節の斜縄文で、隆線の末端部や屈曲部にはしばしば刻目が施され、一部に連鎖状文や円環文の施される場合もある。器形としてはA・Bなどが推定される。

類例は八天遺跡のⅡ群5類や花泉町貝鳥貝塚[5]第3次調査時のG類に見られ、V群とほぼ同時期に位置付けられよう。(第12図1～4・6・9)

V群　やや内彎する口辺部に、装飾性の強い波状突起が付き、口辺部から、胴体上部にかけて、彎曲しながら囲る隆線によって主に区画される、いわゆる磨消縄文土器の一群である。地文はほとんど単節の斜縄文であるが、この文様帯の内側を隆線に沿って沈線の周る場合もある。隆線の一部には2～3条を一単位とした刻目の施される例が多い。また口辺部の文様帯が、各種の刺突文で埋められたり、波状ないし、連続する渦巻文、山形文などで埋められる例も見られる。器形としてはほとんどBのうちの中型深鉢類が推定されるが、詳細はまだよく解らない。

類例は、八天遺跡Ⅱ群7類や貝鳥貝塚第3次調査時のH群などに見られ、やはり大木10式の新期に相当するものであろう。(第12図5・8・10・11・13・15)

Ⅵ群　大きく内彎する平らな口縁を有し、胴体部は無文で、胴部と口辺部との境界付近に一条の点列の周る土器群である。現在までのところ、朱塗りされた、Eタイプの土器1点分のみ確認されている。様式的にはⅣ群と同じものであろう。(第14図2、写真5－8)

Ⅶ群　やや太めの沈線で区画された長楕円形ないし、放物線状の縄文文様帯を有する磨消縄文土器の一群である。この土器群の沈線は一般に太く、無文帯も沈線部分もていねいにヘラミガキされている。縄文は大抵、単節の斜縄文である。

類例は五十瀬神社前遺跡Ⅰ群、八天遺跡Ⅱ群1類、貝鳥貝塚第3次調査時のD群、第4次調査時のⅠ群3類などに見られる。様式的には大木9式に相当する資料である。A・B・Dの各器が見られる。(第13図1、第4図1、写真5－4、2－3)

Ⅷ群　胴体部が、主として単節の斜縄文を地文とし、やや不定な雲形の沈線文で区画される、磨消縄文土器の一群である。出土点数は少ないが、類例は盛岡市繋Ⅲ[6]、石鳥谷町高畑[7]などの各遺跡で出土している。様式的には大木10式の古期に相当するものであろう。(第13図2、写真7－3)

Ⅸ群　口辺部は外反し、平縁で、胴体部には単節の斜縄文が施され、頸部に撚糸圧痕文が一条周る土器群である。口辺部にはさらに撚糸圧痕文が施されたり、口縁沿いに縄文が施される例もある。

類例は貝鳥貝塚第4次調査時のⅡ群5類の一部、大槌町崎山弁天貝塚[8]Ⅳ群6類の中に見られる。この種の土器群は仙台湾周辺の宮戸Ⅱa～Ⅱb式期、関東地方の加曽利B_1～B_2式期の土器群の中に共通して見出され、ほぼ縄文時代後期中葉頃に位置付けられよう。Ⅸ群自体の出土点数は極めて少なく、主として包含層の上層部より上の層中から出土している。(第13図10、写真8－1)

X群　平縁ないし波状に縁を有し、口縁部から、主として胴体上部にかけて、沈線区画された磨消縄文の施される土器の一群である。この土器群の磨消縄文は主として、口辺部に平行する巾の狭い、帯状文と三日月形の文様帯を連ねた各種の連孤文からなっている。器形はB・Dなどであろう。

出土点数や出土状況はⅨ群とほぼ同様である。類例は八天遺跡Ⅳ群1・2・4類、貝鳥貝塚第4次調査時のⅢ群1・5類、崎山弁天Ⅳ群4類、西ノ浜1～2層出土土器類の中に見る事ができ

る。様式的には、Ⅸ群と同じく、宮戸Ⅱa～Ⅱb、加曽利B_1～B_3式に併行するものである。（第12図16・21）

Ⅺ群　平縁ないし波状の口縁を持ち、口辺部が円管状刺突文や縄文の施された隆線、平行沈線あるいは、同心円状ないし孤状の沈線などで装飾される土器の一群である。出土状況、数量ともⅨ、Ⅹ群と同じである。

類例は滝沢村木賊川遺跡[9]ⅡAa～b類、盛岡市川目遺跡[10]第4類、岩手町どじの沢遺跡[11]2類などに見られ、様式的には青森県方面で十腰内Ⅰ式[12]と呼称されている縄文後期初頭の土器群に併行する土器群であろう。（第12図、17～19・22）

Ⅻ群　胴体部に縦方向の結節回転圧痕を伴なう単節斜縄文が施され、口辺～胴体上部に爪形の刺突文や刻目のある隆線や連鎖状隆線文が周る土器群である。発見された破片が少ないので、正確な事は不明であるが、出土層から見て、ほぼⅡ群と同時期のものであろう。（第10図13、16、写真6－1）

ⅩⅢ群　外反する口辺部に、小刻みに出入りを繰り返しながら周る平縁のついた土器群で、胴体部には格子目状の撚糸圧痕からなる網状文が施されている。ごく少数確認されている。類例は宮城県大木囲貝塚[13]その他で発見されており、縄文時代前期前半の大木3式に相当しよう。（第13図4、写真7－3）

ⅩⅣ群　胴体部には主として縄文が施され、波状口縁を有し、口辺部周辺を中心に、みみず膨れ状ないし、撚紐状の粘土紐による、平行線文・半円文・渦巻文などが加飾される土器群である。器壁は厚く、器形的にはほとんどAに含まれるであろう。

この群の土器は現在のところ、包含層出土品として確認されていないが、付近の後世盛土層中から若干出土しており、今後整理の進む中で、発見される可能性が大きい。類例は盛岡市大館町遺跡[14]Ⅲb群2類、大迫町天神ケ丘遺跡[15]4群、前沢町北館遺跡[16]2群3b類に見られ、様式的には大木7b式に相当しよう。（第13図6・7、写真7－3）

ⅩⅤ群　胴体部文様は縄文、時には網状文よりなり、頸部に押しつぶしのある粘土紐一条のめぐる土器群である。

包含層中からの出土点数はごくわずかであるが、類例は、大館町遺跡Ⅱ群10類、天神ケ丘6群北館遺跡2群3a類に見られ、やはり大木7b式に比定されよう。（第13図5、写真7－3）

ⅩⅥ群　比較的薄手に作られ、胎土中に砂の他に雲母が多く含まれ、しかも器壁外面が平行沈線や三角形状の沈線文で区画された、磨消縄文土器を含む精製土器の一群である。縄文原体は主として縦回転され、粒子は一般に細かい。現在までのところ、包含層の上層部ないし、その上を被う堆積層中から出土した1例のみが知られている。器形はE・Dなどと考えられる。

一関市谷起島[17]、草ケ沢[18]、江刺市沼の上[19]、力石[20]、矢巾町清水野[21]などの各遺跡で出土している弥生時代中期前半の土器類に近接する時期の土器群であろう。（第13図8・9、写真8－1）

ⅩⅦ群　比較的薄手の作りで、胴体上部がやや膨らみ、頸部がややくびれ、外傾する口辺部に平らな口縁のついた土器の一群である。文様としては胴体部に単節の斜縄文が施されるのみで、口辺部は無文である。出土数は多くない。上記ⅩⅥ群の土器ないし縄文時代晩期の土器群に伴な

う粗製土器と思われるが、詳細は不明である。(第13図14、写真８－１)

(超小型土器)　多数の大～小型土器片に混じって、器高10cm未満の超小型土器の破片が比較的多数出土している。これらの超小型土器の形態は大～小型土器に見られる各種のものがあるが、特に深鉢型の形態のものが多い。

器面に施された文様は大部分風化しているので不明であるが、単節斜縄文や磨消縄文・条痕文の施された例が知られる。文様や胎土の質、および出土層から、大部分がⅡ群土器に共伴するものと推定される。(第14図６～10、写真５－６)

(朱塗り土器)　その他、補足として朱塗り土器について述べる。朱塗り土器は全て破片であるが、包含層とＡＩ21、ＡＪ21両ピット埋土中や後世の盛土中から少数出土している。器形としてはＢ・Ｃ・Ｄ・Ｆなど各種あり、Ⅱ～Ⅶの各群と同様、縄文時代中期末の大木10式新期に相当するものと推定される。(第11図19、第14図２、第１表、写真５－７・８)

以上が50年度の発掘資料を中心にして見た、縄文時代の遺構と包含層の土器類の内容である。その具体的な種別については上記分類に含み切れない個体もあるので、なお今後の検討を要する。しかしながら、遺構と包含層中の土器類のほとんど大部分が縄文時代中期末の大木10式の新期に相当する土器類で占められるという事実関係はほぼ変わらないであろう。

＜石器類＞　土器類に共伴して、各種の石器が出土しているが、機能および技法別に大別して示すと下記の通りである。

Ⅰ群　獣類の捕獲やその他の動植物の採集捕獲あるいは調理や加工のために用いられた利器ないしは工具としての機能が推定される石器群である。

１類　硬質頁岩などの比較的緻密で硬質の岩石を素材とした打製の石器類である。

ex. 石鏃、石槍、いわゆる石匙その他の刃器類、篦状石器、石錐、その他の小型打製石器。

２類　１類より、軟質の粘板岩、凝灰岩、砂岩などを素材とした磨製石器類である。

ex. 磨製石斧、石製紡錘車、磨製円板状石製品。

３類　２類と同質の岩石を素材とした打製石器類である。

ex. 打製掘具、打製円板状石製品（磨製石斧未製品）

４類　２類より粗鬆な安山岩や凝灰岩、砂岩、溶岩などを素材とした敲打製石器類である。

ex. 石皿

５類　１類の原石、コアあるいは４類と同様の素材をそのままないし、わずかに加工して用いた石器類である。

ex. 凹み石類、ハンマーストーン、小型石錘、砥石。

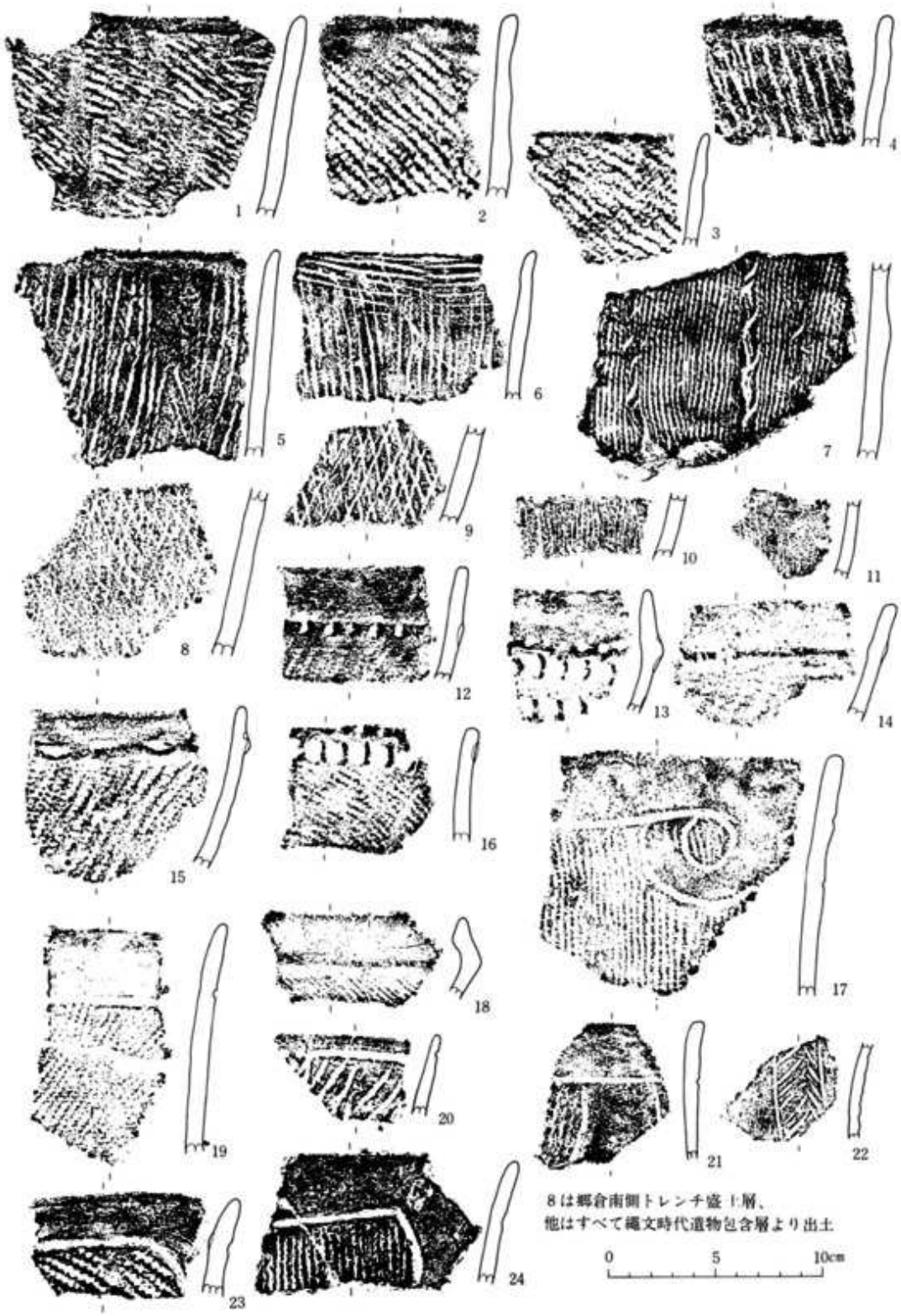
Ⅱ群　装飾、祭祀等に供せられ、直接的な生産には関連しないと思われる石器の一群である。

１類　Ⅰ群２類と同様の素材を用いた磨製石器類である。

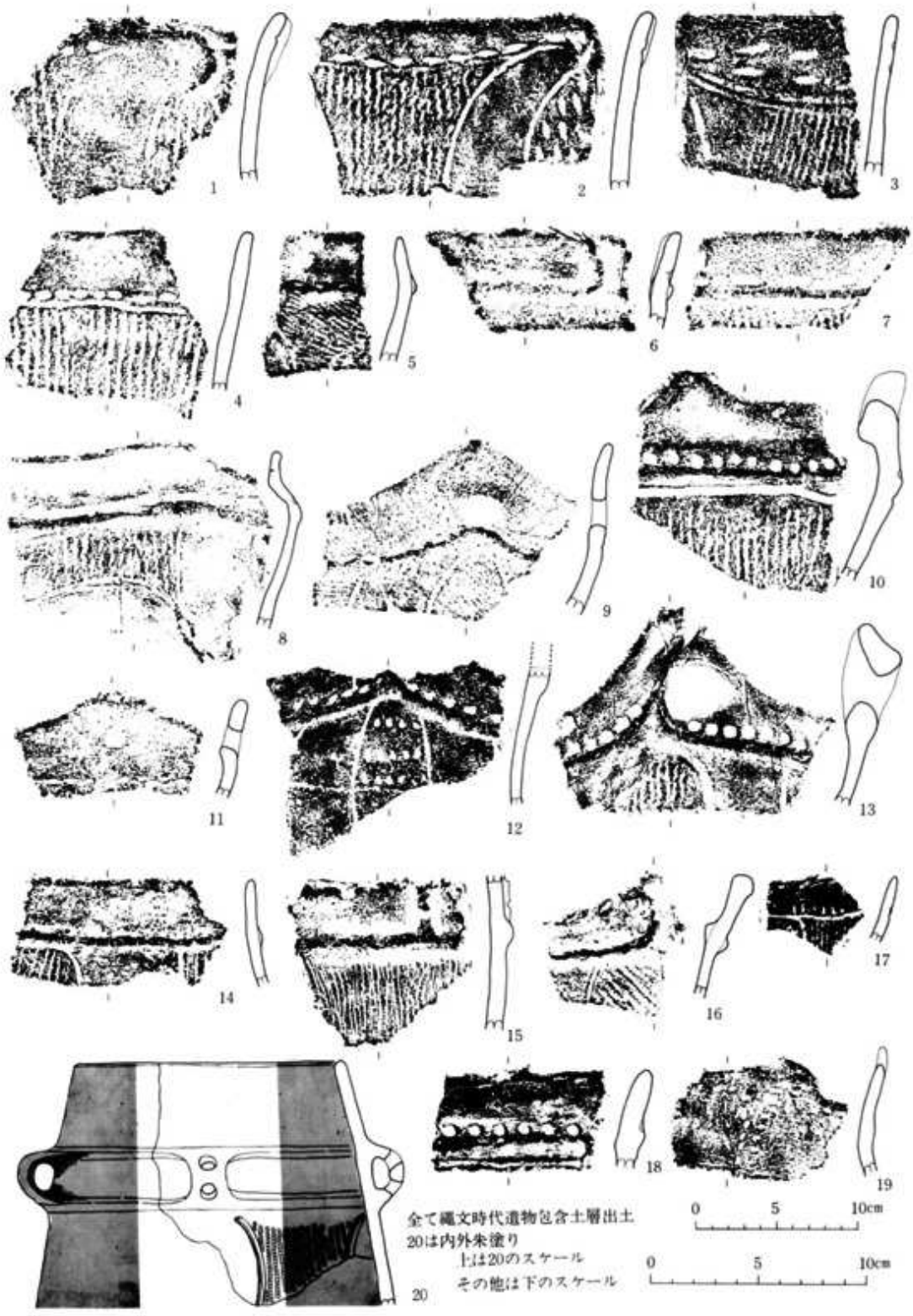
ex. 各種の磨製飾品（小型石棒、石剣、石刀）

２類　Ⅰ群５類と同様、自然礫をそのままの形状で、もしくはわずかに加工を加えて用いたと思われる石器類である。

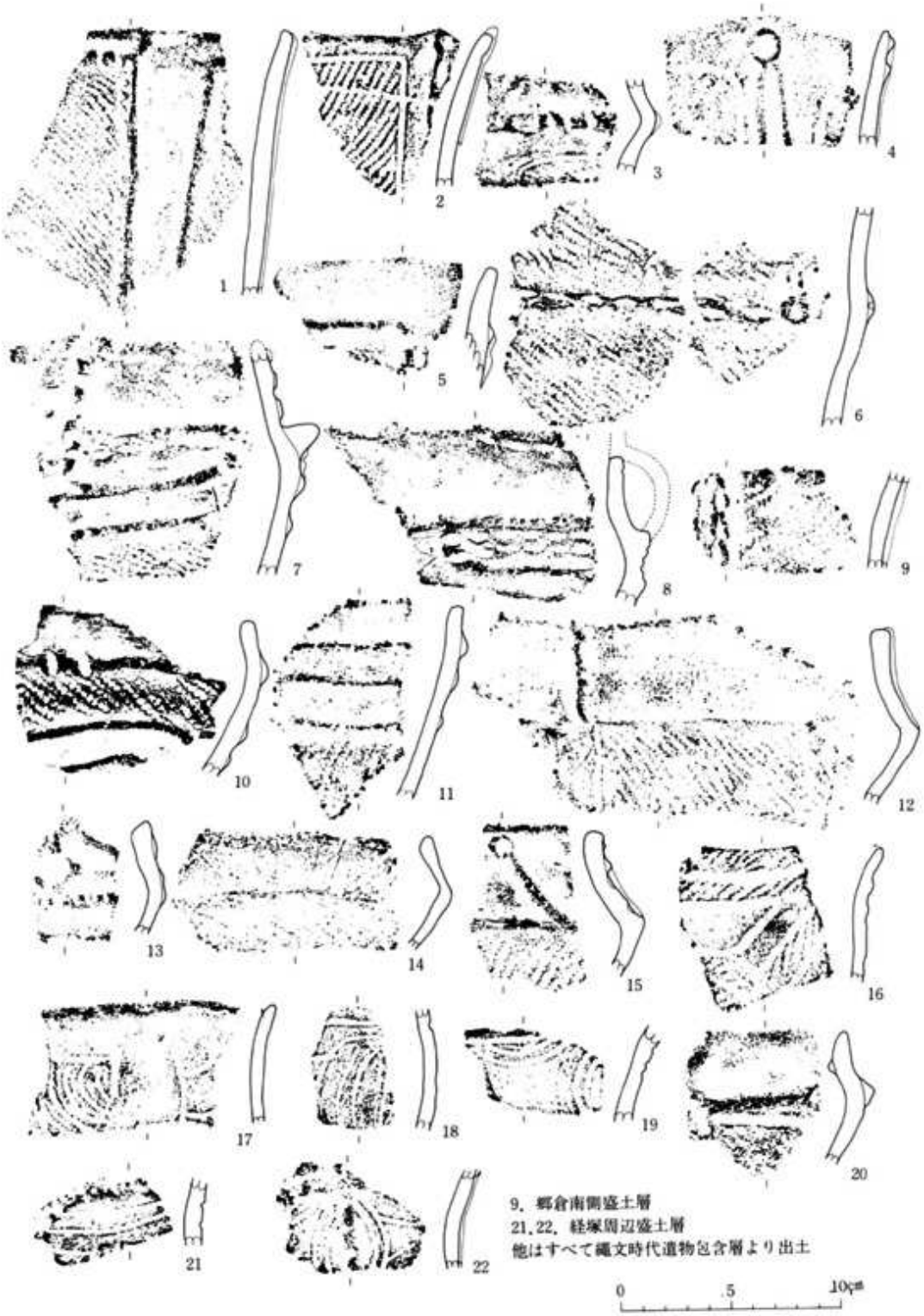
以上の様に類型分けされた各器種別の個体類は第３表に示す通りである。表からも解る様に全



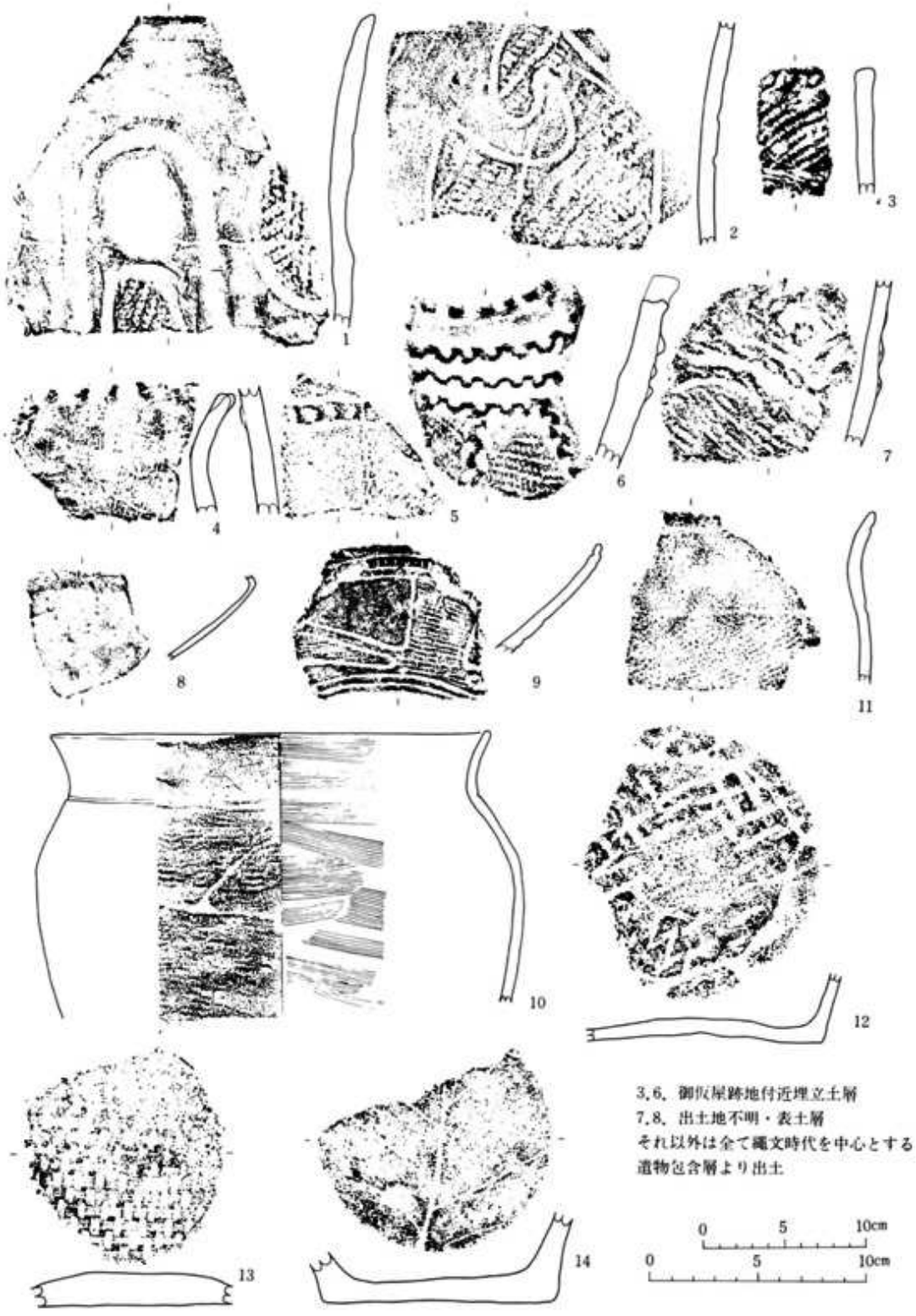
第10図　縄文時代遺物包含層その他の出土土器片拓影(1)



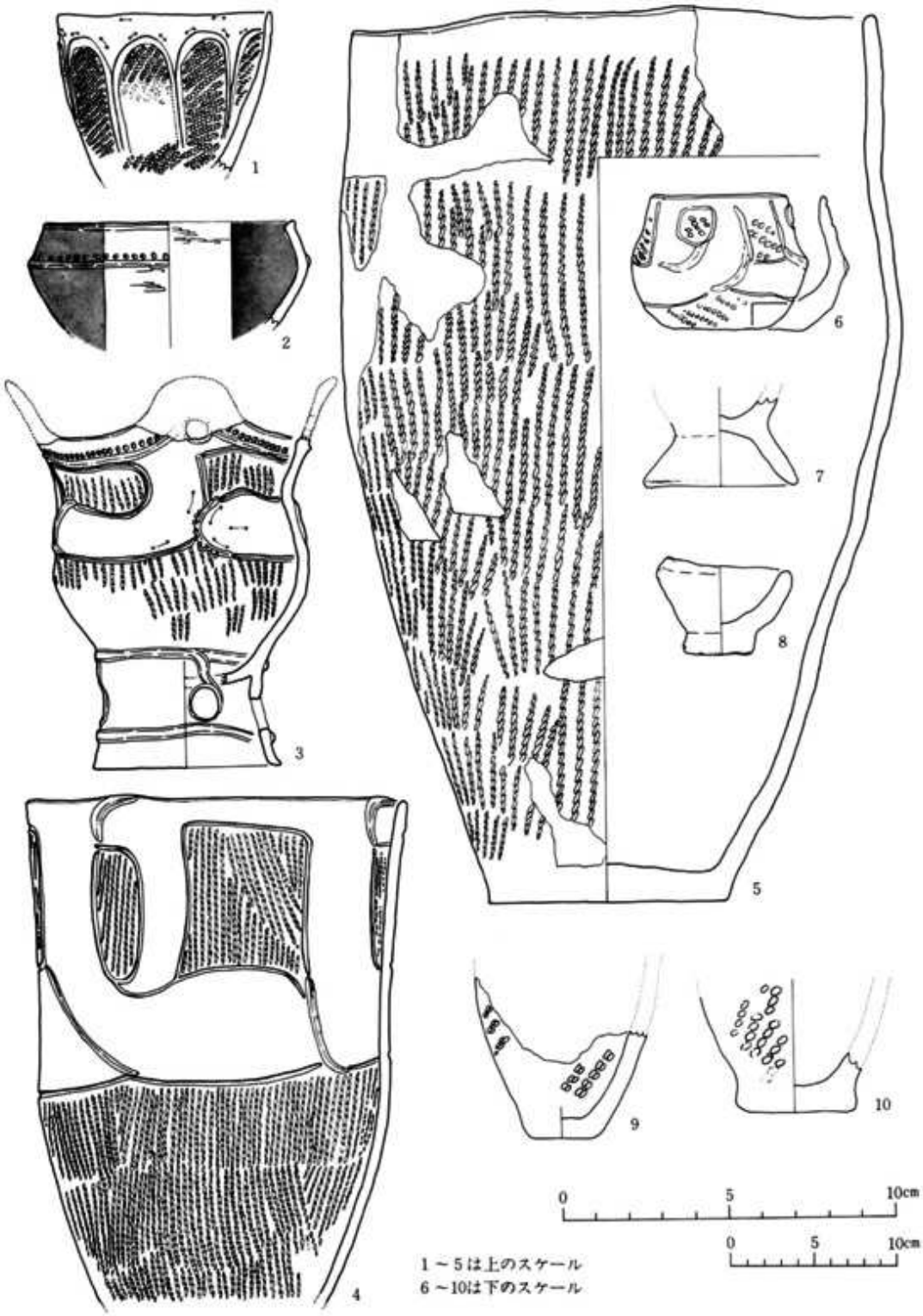
第11図　縄文時代遺物包含層その他の出土土器片拓影図(2)



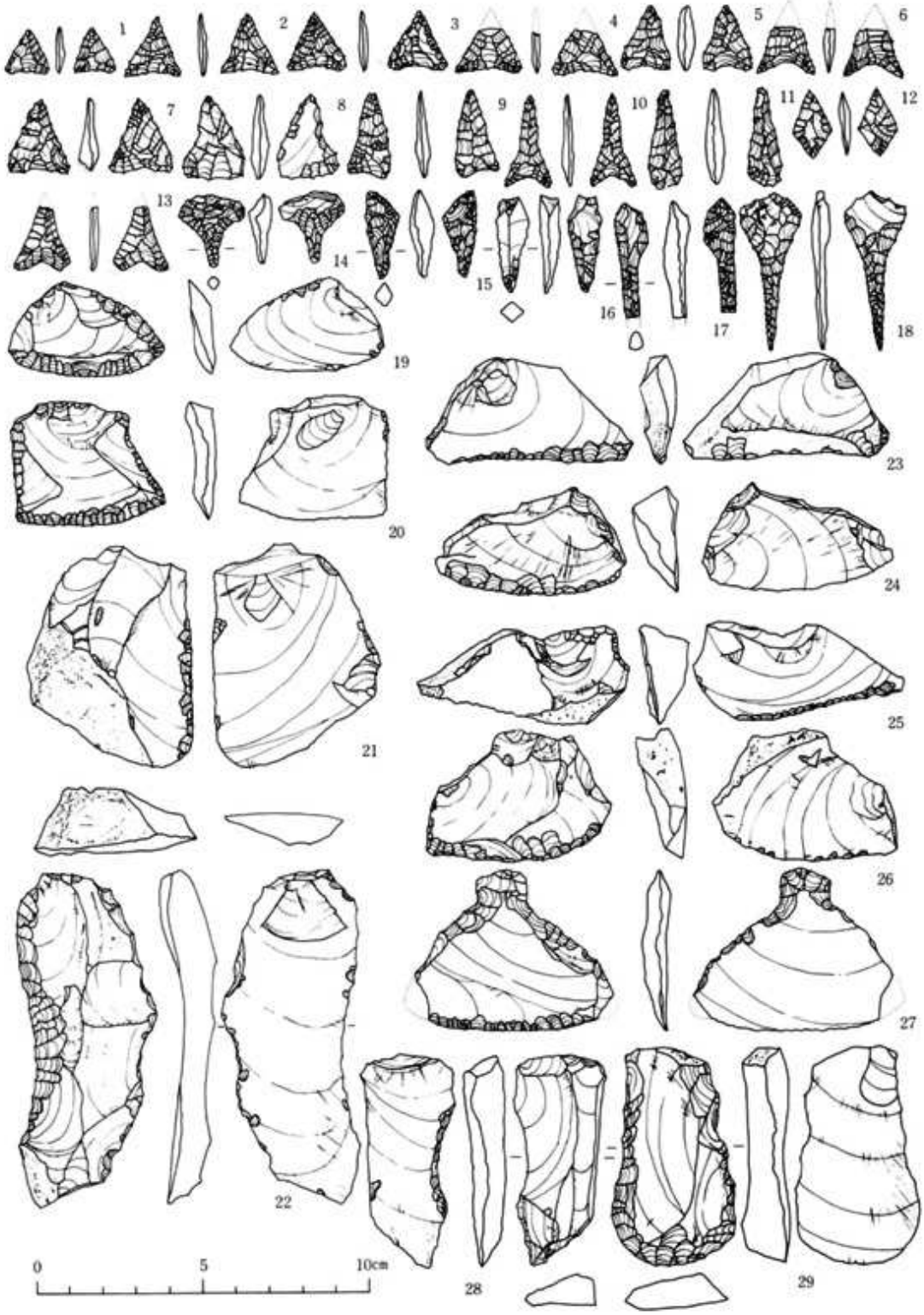
第12図　縄文時代遺物包含層その他の出土土器片拓影(3)



第13図　縄文時代遺物包含層その他の出土土器片拓影(4)



第14図　縄文時代遺物包含層出土の石器類実測図



第15図　縄文時代の遺物包含層その他の出土石器類実測図(1)

体の中で石鏃、刃器類、凹み石類、打製円板状石製品などの占める比率が他に比べて断然多い。いずれ、上記の各器種は形状の違いにより、さらに細分されるが、その具体的な様子を次に述べてみたい。

Ⅰ群1類の石器

石鏃　採集された石鏃は破片も含めて全部で45点あるが、全て打製である。形態は第15図11、12など一部のものを除いて、大部分が基部に抉りを有する三角形ないしそれに近い形の無茎鏃である。形態はさらに正三角形に近いものや、細身の三角形に近いものなど、幾つかの種類に分かれるが、長さ1.5～3.0cmの範囲内に収まる小型の製品が多い。材質は硬質頁岩が大半を占めるが、他にチャート、黒燿石、玉髄などの材質の製品も見られる。やや粗雑な作りのものもあるが、大抵の場合器厚が薄く、両面が比較的ていねいにチッピング加工されている。（第15図1～13、第1表、写真8－2）

石槍　石槍と思われる資料は合計3点出土しているが、いずれも破損品である。形は平面が笹の葉型で、断面が凸レンズ状をなす。全長は不明であるが、最大15～20cm、小さいもので10cm内外と思われる。器面の剥離調整は両面に施されているが、石鏃よりも大雑把である。材質は全て硬質頁岩類である。（第17図15・16、第1表、写真8－4）

刃器　掻器、削器およびそれらに近似する比較的小型の剥片石器類を一括して刃器とした。刃器は完形品、未製品および、破損品を合わせて計84点出土しているが、加工技法および形態の違いから、下記の各種類に分けられた。材質は大部分が頁岩類であるが、他に、流紋岩やチャートなども見られる。器体の大きさは一定しないが、5cm～8cm大の範囲内に含まれる個体が多い。材質は硬質頁岩類が主で、他にチャート、流紋岩、玉髄などが見られる。（第15図19～29、第1表、写真8－3）

a類　フレークの一部の辺をそのままか、わずかに加工しただけで使用しているものである。

b類　フレークの一部の辺に小剥離加工をし、刃部を特に形成しているものである。この場合、剥離は両面からなされる例もあるが、片面のみからなされる例も多い。形状は素材とする剥片の形状に大きく規制されるので一定しないが、大きく、次の3種に分類される。

b_1類　フレークの辺一部に抉りを有し、その部分に主な剥離痕を有するグループである。

b_2類　フレークの辺の一部を直線状ないし外彎する曲線状に剥離調整し、刃部の形成されたグループである。2類は刃部の数によって、さらに1ケ所のみのもの—b_2—1と、2ケ所以上のもの—b_2—2に大別する事が可能であるが、aのタイプが大部分を占める。

b_3類　やや縦長のフレークの短辺部分にやや肉厚の刃部の形成されたグループである剥離加工は普通、片面のみに行われている。いわゆるエンドスクレーパーの類である。

c類　フレークの両面ないし、片面の辺全体に調整剥離加工が行われ、刃部の形成されたグループである。形態的にさらに2種に大別される。

c_1類　縦長形態のグループ

c_2類　横長形態のグループ

上記分類は必ずしも、厳密ではなく、場合によっては、中間形態のものも考えられる。いずれ

両者はさらに、それぞれ、つまみの有無により、つまみを有するもの—c_1—1、c_2—1とつまみの無いもの—c_1—2、c_2—2の2者に細分される。前者はいわゆる石匙である。

石錐　石錐は8点出土している。石鏃と同様、器面全体が細かく剥離調整されている。全長は2.2～4.8cm大で、頭部に膨らみを有するもの—aと膨らみの無いもの—bの2者がある。材質はいずれも硬質頁岩である。(第15図14～18、第1表、写真8—2)

その他小型の打製石器類　石鏃の未製品以外にも、各種の小型打製石器類が合計21点出土している。いずれも用途不明で、中には未製品や試作品も含まれていると予想される、材質は硬質頁岩を主とし、他にチャートや玉髄、珪化木なども含まれている。

ヘラ状石器　平面が細長い台形をなし、その底辺部や側辺部に刃部の形成された肉厚の石器、いわゆる石ヘラが合計7点出土している。この石器の身部横断面は大体、蒲鉾型ないし凸レンズ状をなし、剥片加工は主として凸形の面全体に行われているが、調整は石鏃などと比べてかなり粗雑である。材質は全て硬質頁岩類である。(第16図4・5、第1表)

Ⅰ群2類の石器

磨製石斧　磨製石斧は合計10点出土しているが、第16図8に示した非実用的な超小型の製品を除いていずれも破損品である。その中には第23図5と同様叩き石として再利用された個体もある。形は平面が細長で、底辺部の外膨らみした台形状のものが多く、その底辺部に刃部が形態されている。刃の形態は全て両刃である。身部横断面はやや外膨らみした隅丸長方形をなし例が多い。材質としては、粘板岩、閃緑岩、凝灰岩、蛇紋岩などが見られる。(第16図6・7、第1表、写真8—4)

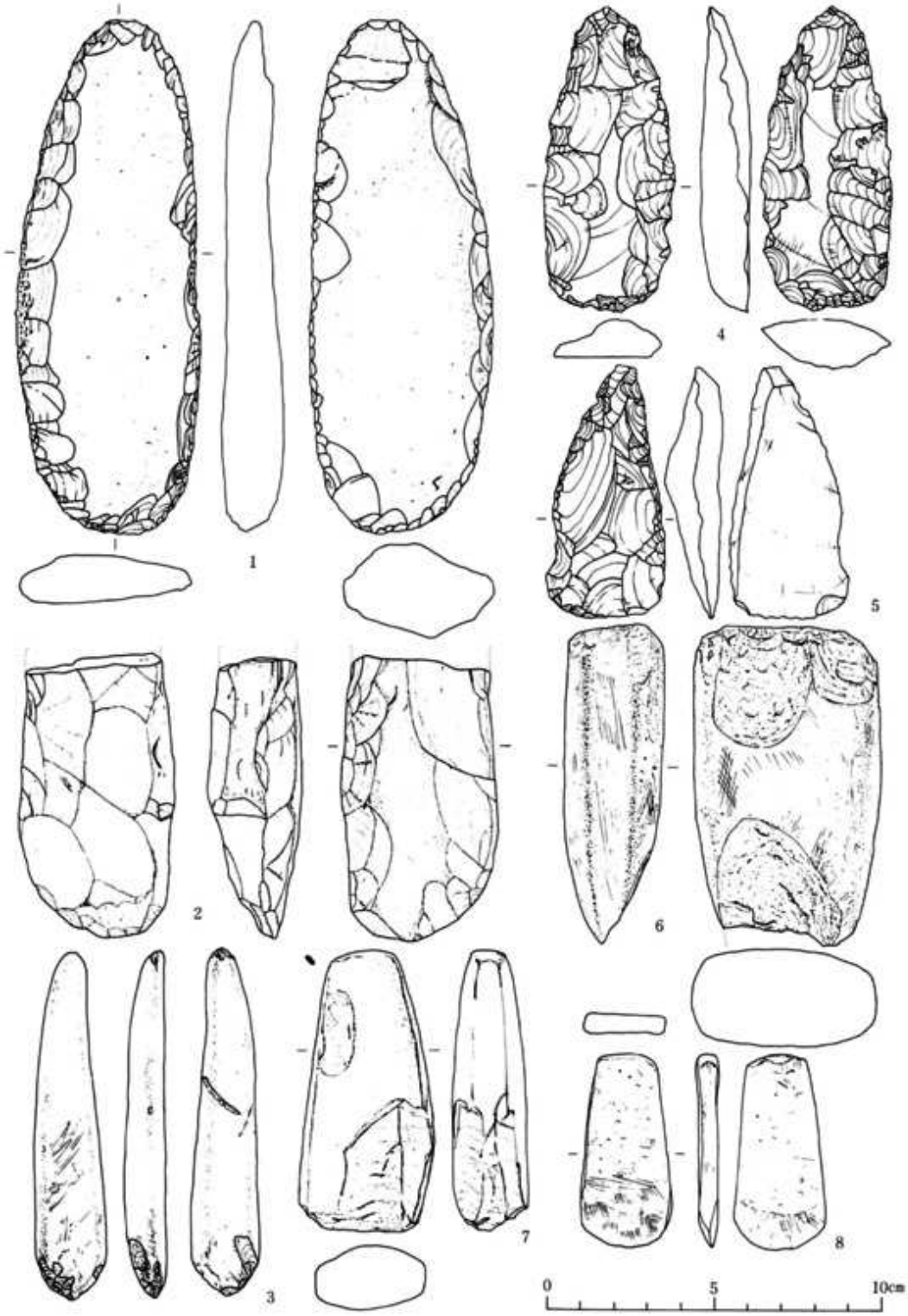
石製紡錘車　緑色凝灰岩製の紡錘車が1点出土している。この紡錘車は薄板状の素材を直径約8.9cmの円形に研磨整形し、中央部に孔を穿ったものである。器面のうち、片面は丁寧に磨かれた程度で、ほとんど素材の地肌を残している。(第17図14、第1表、写真9—2)

磨製円板状石製品　直形約5.2cm、厚さ1.7cmの磨製の円板状石製品が1点出土している。器面全体が磨かれているという点を除けば、形は打製の円板状石製品と同じで、共通の機能が想定される。砂岩製である。(第17図12、第1表、写真9—3)

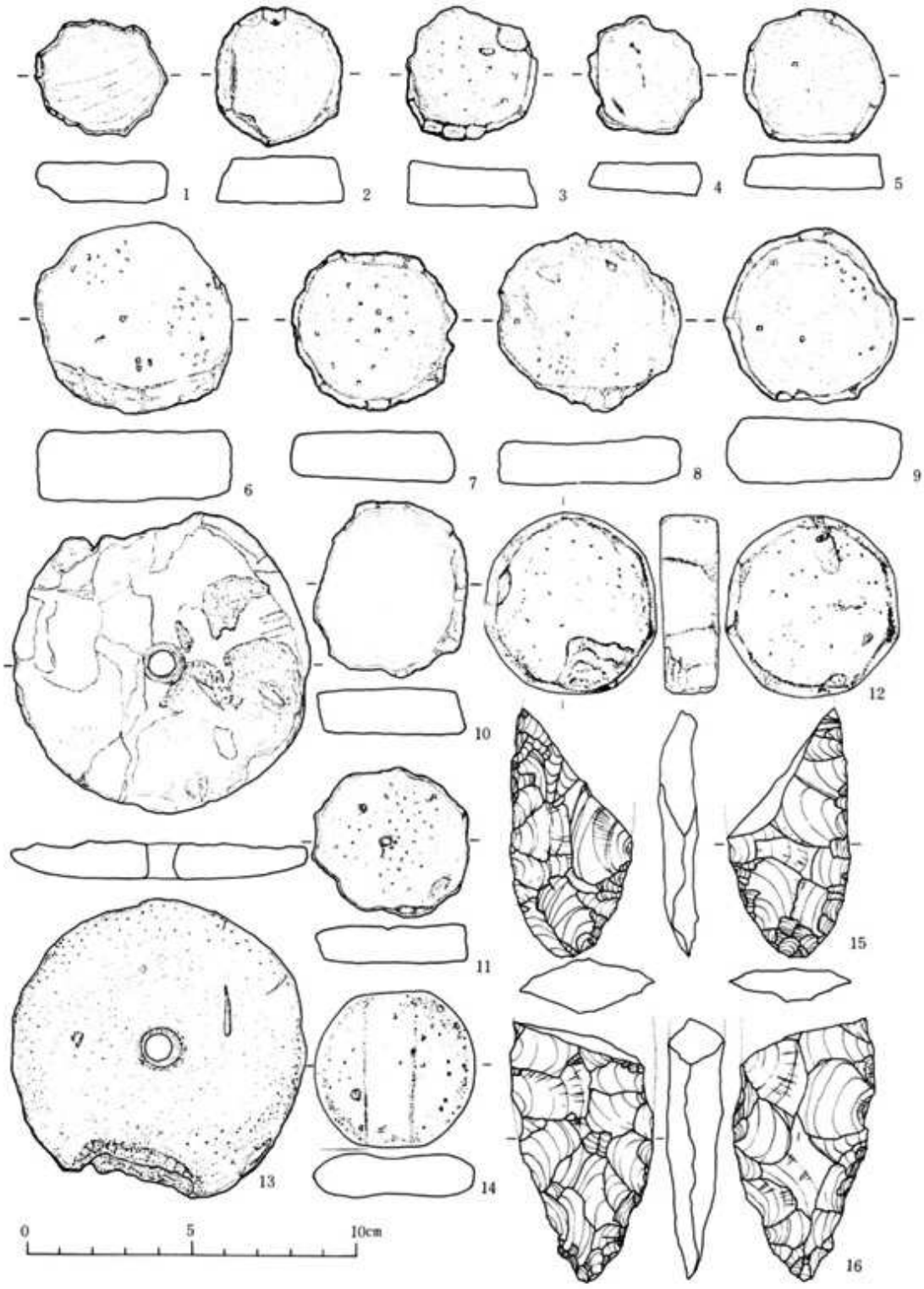
Ⅰ群3類の石器

打製掘具ないし磨製石斧の未製品　この分類に入る石器としては第16図1～3などに示す形状のものが合計5点出土している。ホルンフエルス、粘板岩、緑色凝灰岩などの扁平、縦長の礫を打撃調整したもので、形態的には石斧やヘラ状石器などに近い。この形状のままで使用した可能性も考えられるが、2の様に磨製石斧の未製品と推定される例もある。(第16図1～3、第1表)

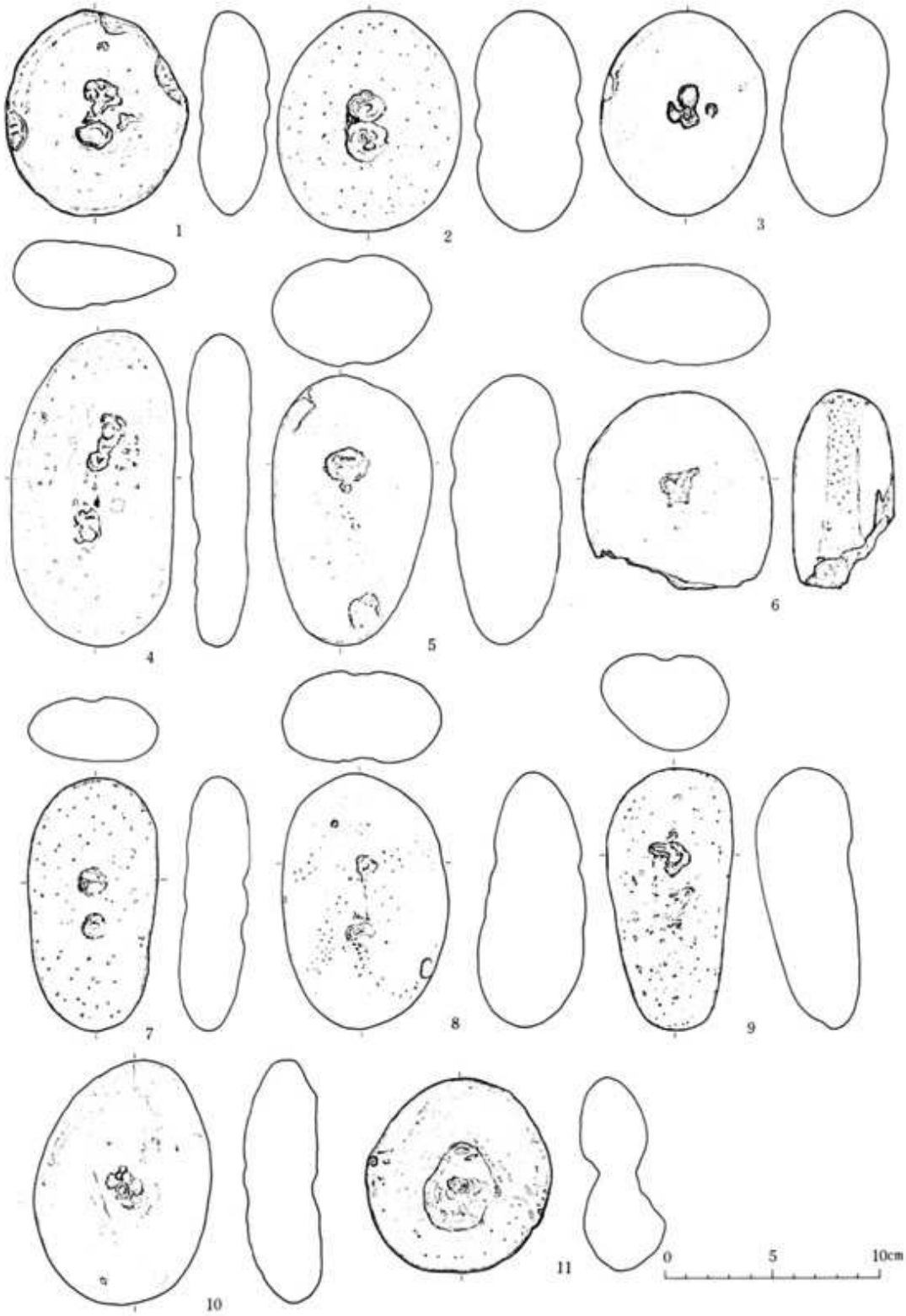
打製円板状石製品　打製の円板状石製品は未製品も含めて、合計31点出土している。この種の石製品はいずれも、扁平な自然礫の側面を粗く打ち欠いて、円板状に整形したものである。その直径は約3.8～6.0cm、厚さは1～2cm内外の各種あるが、大体、直径5cm、厚さ1.5cm程度のものが多い。材質はほとんど砂岩、安山岩、流紋岩、凝灰岩などで占められている。その機能についてはよく解らない。(第17図1～11、第1表、写真9—3)



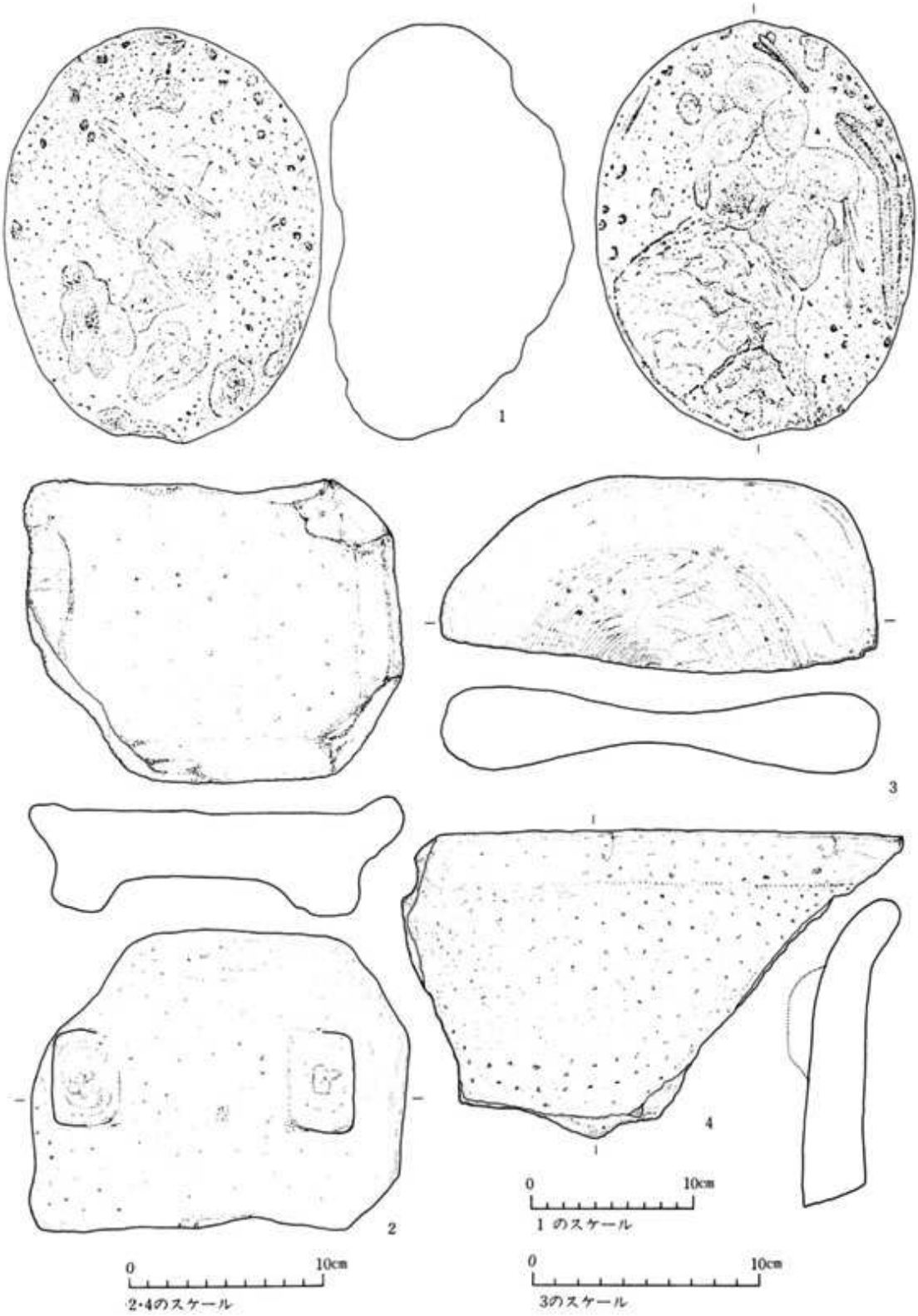
第16図　縄文時代遺物包含層その他の出土石器類実測図(2)



第17図　縄文時代の遺物包含層その他の出土石器類実測図(3)



第18図　縄文時代の遺物包含層その他の出土石器類実測図(4)



第19図　縄文時代の遺物包含層その他の出土石器類実測図(5)

Ⅰ群4類の石器

石皿　石皿は合計12点出土しているが、全て破片で全形の知られる資料はない。比較的形の残りの良い資料を第19・20図に図示した。これらの石皿はいずれも平面隅丸長方形をなした浅い平皿状の石皿で、底部には四角柱状の短い脚が付いたり、平行棒状の低平な突起が付いたりして、台をなしている。比較的大型の石器で、材質としては砂質ないし礫質の凝灰岩、安山岩質の溶岩類などが見られる。（第19図２～４、第１表、写真10－１）

Ⅰ群5類の石器

小型石錘　出土地不明であるが、包含層中から出土した資料の中に１点見られる。この石錘は直径５cm大の扁平な円礫の中央部に巾約１cmの浅い帯状の凹みの周るものである。石錘状の石製品としては、A区包含層からの出土品であるが、第23図９に掲げたよう例の様に狭い溝と辺縁部の切れ込みを有するものも見られる。しかし、近隣の滝の沢遺跡などで発見された様な、扁平な礫の両端部を打ち欠いただけのやや大形の粗製石錘は全く見られない。（第17図14、第１表、写真９－３）

砥石　溝ないし線状の擦痕を伴なう砥石と思われる第20図６など石製品が合計２点出土している。いずれも礫ないし転石をそのまま素材としたもので、材質としては　軟質の白色細粒凝灰岩や緑色凝灰岩、安山岩溶岩などが見られる。（第20図６、写真10－２）

凹み石　包含層中からは、土器片や石器、石材類とともに、多数の礫が出土している。この中には、石器としての機能の予想される形状のものが含まれているが、特に多いのは安山岩、砂岩、花崗岩、閃緑岩などの自然礫の表面に１～４ケ所の浅い凹みをつけた、いわゆる凹み石類で、包含層と遺構中から合計58点出土している。発見された凹み石は大部分が第20図１・２完形品であるが、形態上、次の様に大別された。なお凹みは礫の表裏に普通１ケ所ないし２ケ所づつ対で施されている例が多いが、片面のみに凹みを有する例も知られている。（第18・19図１、第１表、写真10－３・４）

a 類　平面長楕円ないし、やや歪んだ長楕円形の礫を素材とするものである。礫の長さは10～12cm前後であるが、厚さの違いにより、厚さ５～７cm前後の厚手のもの—$\mathbf{a}_1$と厚さ３～４cm前後の薄平のもの—$\mathbf{a}_2$の２者に分類できる。

b 類　a類と大体同じ大きさであるがa類で見られる形を全体的に一層歪めた不整楕円礫を素材とするもので、厚さの違いにより、a類の場合と同様、厚平のもの—$\mathbf{b}_1$と薄平のもの—$\mathbf{b}_2$の２者に分類される。

c 類　平面円形ないしややいびつな円形の礫を素材とするグループである。礫の直径は８～10cm前後で、厚さの違いにより、さらに厚さ4.0～5.5cm前後の厚いもの—$\mathbf{c}_1$と3.5～4cm前後の薄いもの—$\mathbf{c}_2$の２者に細分される。c_2の中には第18図９に示した様に、側面全体が擦り削り調整されたものが１点ではあるが見られる。

d 類　c類と大体同じ大きさであるが、それより一層形の歪みの大きいものである。出土品で見る限り、この類の中にはc_2に相当する薄平のタイプは見られない。

e 類　a類と大体同じ大きさであるが、平面が卵円形、撓形、葉形など各種あり、一定しない。

しかしb 類よりは形が整い、一般に細長で、厚さは2cm前後から4cm前後で、比較的薄い。

f 類　a、b類と同じくらいの大きさであるが、全体形状が著るしく不整で、細長い礫を素材としたものである。

g 類　以上の各グループに入らない大型凹み石を一括し、g類として、第19図、第20図に示した。第19図1はa類の全形を大規模にしたタイプのもので、凹みが多いばかりでなく溝状の擦痕も見られる。第20図2はラグビーボールの形をさらに長くした形の凹み石である。1は平面隅丸長四角形状の扁平な凹み石であるが、その一部に線状の擦痕が見られる。

叩き石・擦り石　凹み石以外にも、道具として利用されたと思われる平面円〜楕円形の球礫やコアが多数出土している。そのうちでも明らかに敲打痕や擦痕が見られるものを叩き石、擦石として一括した。この種の石器は、合計10点出土した。材質および機能上、下記のような2分類が可能であるが、そのうちのb 類に相当する個体は認定が難かしく、確実な例は今のところ見られないものの、礫の数としては凡そ、50点近く出土している。

a 類　敲打作業に使用された、いわゆる叩き石の類である。素材形態の違いにより、安山岩その他の自然礫を用いたもの—a_1と玉髄、石英などのコアを用いたもの—a_2の2者に細分される。数としてはa_1のタイプが多いほか凹み石や石斧破片を転用した例も見られる。

b 類　石皿などとセット用いられる、いわゆる擦り石の類である。

Ⅱ群1類の石器

石製装飾品類　装飾品と思われる磨製の板状石製品がＡＩ21、ＡＪ21両ピットと包含層の各所から合計8点発見されている。その主なものを第21図に示した。図からも解る様に、文様、形態ともに各種のものが知られる。全長7.8cm以下の比較的小型の製品が多い。材質は7を除き、全て緑色の細粒凝灰岩である。（第21図1〜6・8、第1表、写真9—2）

小型石棒ないし石剣・石刀類と思われる石製品　この種の石器には完形品がなく、いずれも小破片であるが、合計2点出土している。

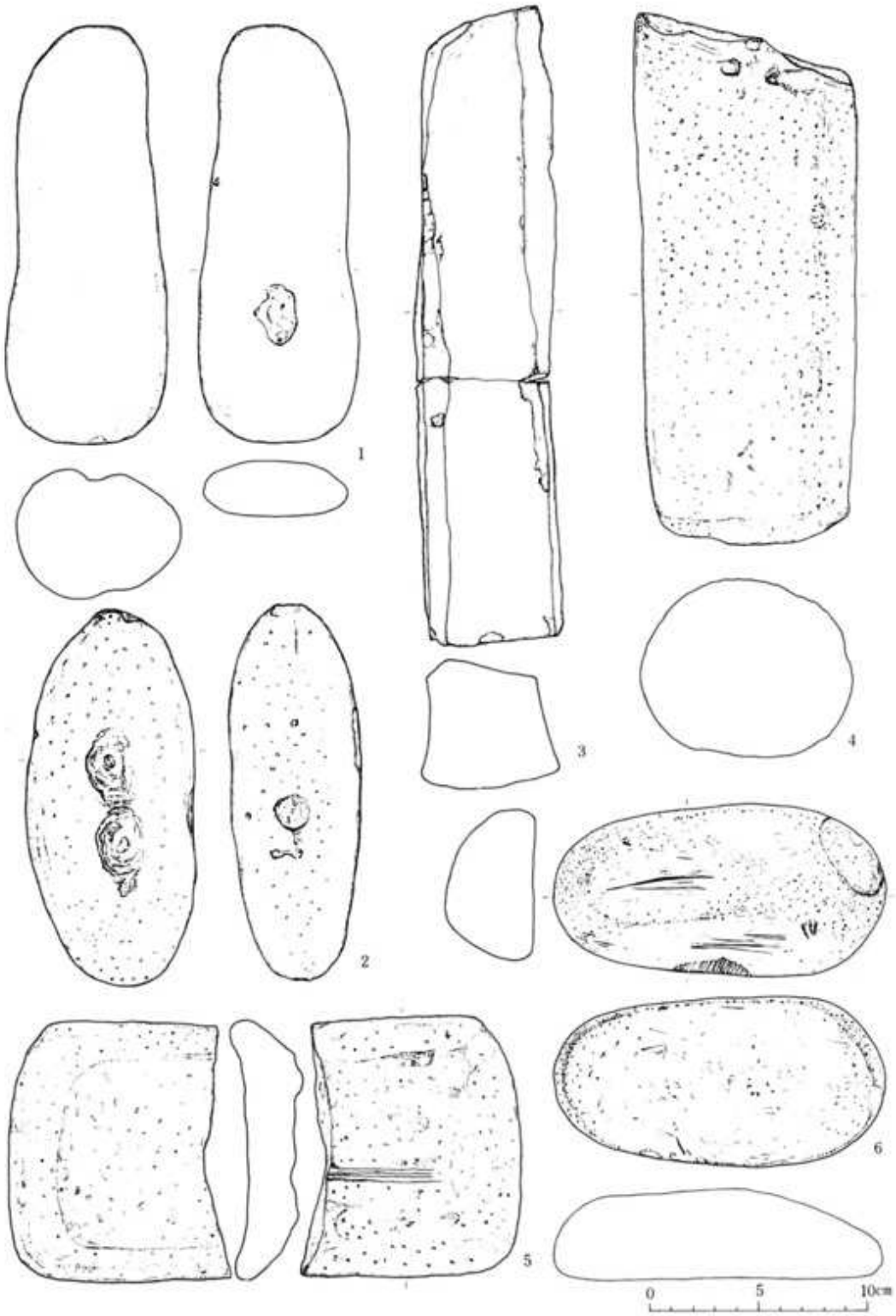
Ⅱ群2類の石器

有孔礫　ＡＪ21ピットおよび包含層中から出土した自然礫の中には第21図、7に掲げた様な自然有孔礫が合計4点出土している。単なる自然礫とも考えられるが、7の場合出土状況から見て、装飾品ないし、祭祀用品として利用された可能性も強いので、一応、石器として示した。（第21図7、第1表、写真9—2）

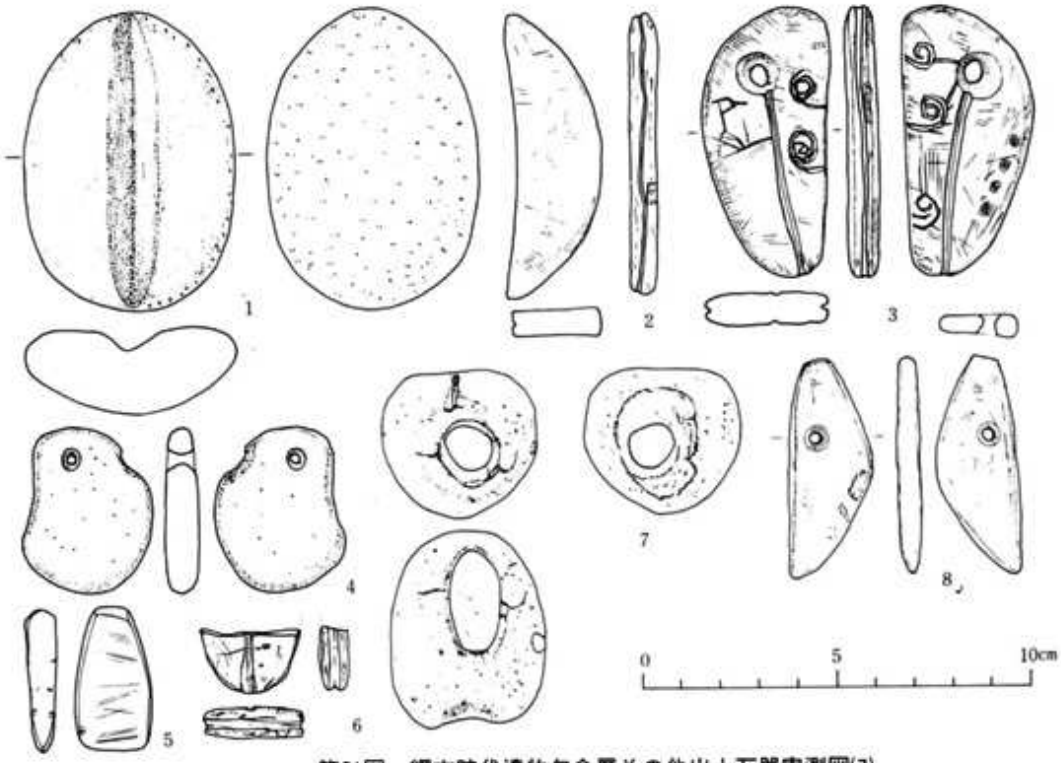
石棒　石棒と思われる石製品の破片が包含層中から4点出土している。そのうち、3点は安山岩の柱状素材を円柱状に敲打加工したものである。残りの1点は断面隅丸四角形の斜長石流紋岩の角柱である。（第20図3・4、第1表、写真10—2）

＜土製品＞

土偶　土偶は包含層中から合計5点発見されている。いずれも破片である。第22図5はそのうちの頭部破片である。刺突点と隆線によって面相が描かれ、後頭部には縦に2対の孔が穿けられている。同1・2・3は中くびれした板状の胴体部破片資料である。そのうち1は沈線と隆線によって、背腹の部分に樹枝状の体部文様が描かれている。2・3は、刺突点のみで背腹に文様が描



第20図　縄文時代の遺物包含層その他の出土石器類実測図(6)



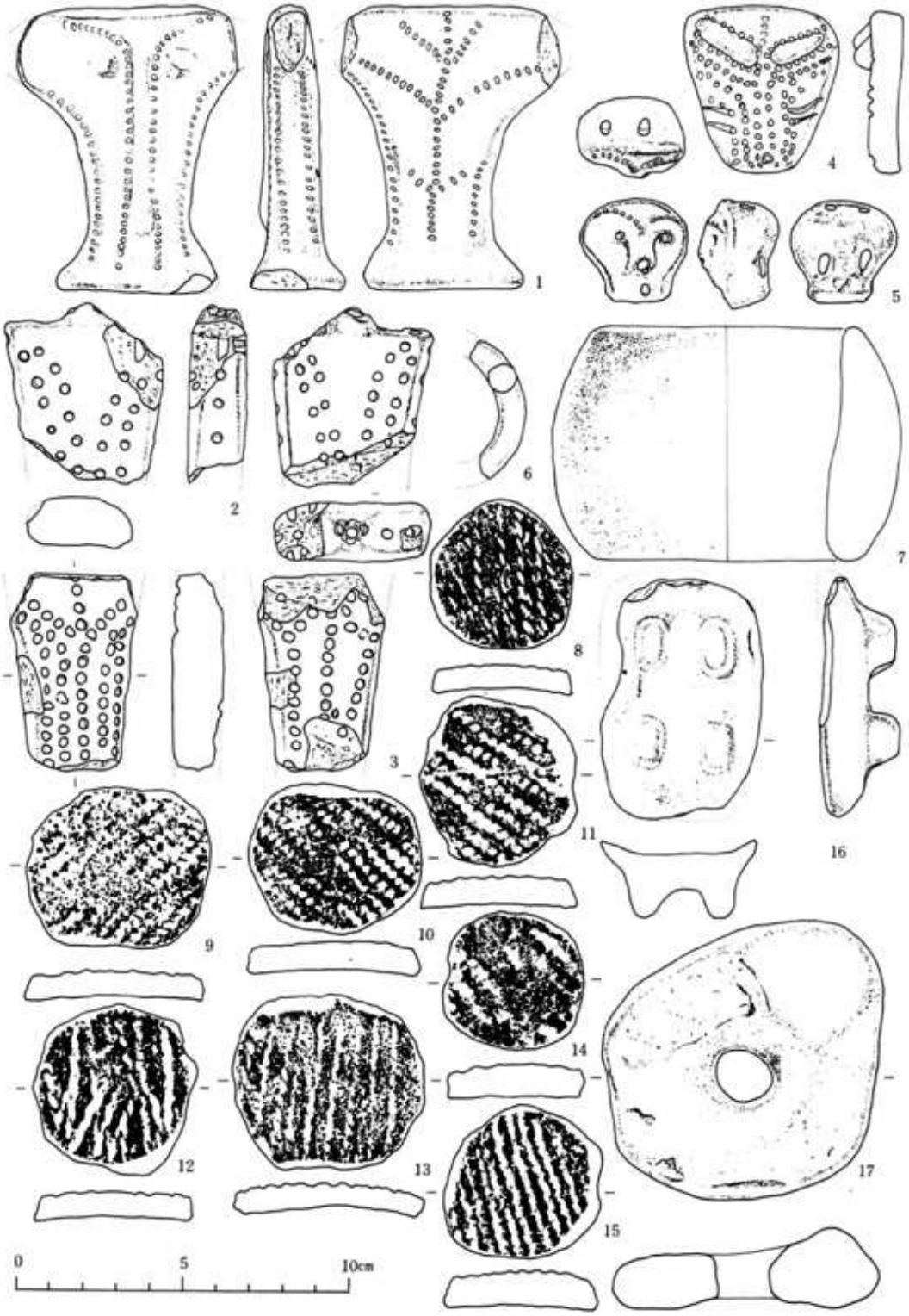
第21図　縄文時代遺物包含層その他出土石器実測図(7)

かれている。特に2では背腹ばかりでなく、脇や肩の部分にも刺突がなされ、胴体中央部を縦に孔が一つ穿けられている。

これらの土偶は、施文方法や文様に若干の違いが認められるものの、ほぼ近接した時期の所産と考えられる。類例は県内の五十瀬神社前遺跡や八天遺跡、それに都南村の湯沢遺跡などで見られ、時期的には大木10式の新期に相当するものであろう。（第22図1～3・5、第1表、写真9－4）

土版　平面が逆台形状の土版が1点出土している。その片面には沈線、刺突点、隆線によって、一種の顔面文様が描かれている。他の面は無文である。文様の特徴から見て、先の土偶とほぼ同時期と推定される。（第22図4、第1表、写真9－4）

土製石皿模造品　小型の石皿模造品が1点出土している。この模造品は平面隅丸長方形で、底部には4本2対の脚が付いている。胎土は赤褐色で、中には黒雲母、長石などが多く含まれており、質が他の土製品などとかなり異なる。他の地域、例えば北上川東岸部などから持ち込まれた可能性が大きい。出土層から見て、やはり土偶や土版と同時期のものと推定される。（第22図8、第1表、写



第22図　縄文時代遺物包含層出土の土製品実測図

第1表—1　土器類観察表

図版番号	写真番号	器種	出土区域	層位	最大長(cm)	最大巾(cm)	厚さ(cm)	保存状況	備考
14—1	5—3	小型鉢型土器	BC18グリッド	遺物包含層下部	残10.6	13.0	—	2/3	縄群
2	5—4	小型浅鉢型土器	BA21グリッド AJ21ピット	遺物包含層下部埋土層上部	残 9.6	16.8	—	1/5	縄群内外全面朱塗り
3	5—5	台付鉢型土器	BA18	遺物包含層下部	推23.6	推19.6	高台部11.4	3/4	Ⅱ群波状口縁、口縁部、台部に各4孔あり
4	5—2	深鉢型土器	BA18グリッド	〃	残30.8	23.0	—	2/3	Ⅱ群2類
5	5—1	〃	AJ21ピット	埋土層	54.0	33.6	14.4	2/3	Ⅰ群2類
6	5—6	ミニチュア・コップ型土器	郷倉南側トレンチ	遺物包含層下部	4.1	5.3	2.8	完形	（Ⅱ群1類）
7	〃	ミニチュア・台付土器	AJ21ピット	検出面付近	残 2.6	残 2.9	高台部4.7	1/3	高台部のみ残存
8	〃	ミニチュア・鉢型土器	郷倉南側トレンチ	遺物包含層上部	3.9	4.1	2.0	完形	無文手捏ね
9	〃	ミニチュア・深鉢型土器	〃	〃	残 4.9	残 4.9	1.9	1/4	（Ⅰ群1c類）復原縄文
10	〃	〃	〃	〃	残 3.4	残 4.9	4.6	1/4	（Ⅰ群1b類）

第1表—2　石器、土製品一覧表

図版番号	写真番号	器種	出土区域	層位	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	保存状況	備考
15—1	6—2	石鏃	郷倉南側トレンチ	遺物包含層下部	1.3	1.3	0.3	0.3	硬質頁岩	完形	抉り入り三角鏃、両面剥離調整
2	〃	〃	〃	〃	1.7	1.7	0.7	0.5	〃	〃	〃　、　〃
3	〃	〃	〃	〃	1.7	1.8	0.8	0.6	黒曜石	〃	〃　、　〃
4	〃	〃	〃	〃	1.2	2.0	0.0	0.6	めのう	先端部欠	〃　、　〃
5	〃	〃	〃	〃	1.9	1.5	1.5	1.2	凝灰質硬質頁岩	ほぼ完形	〃　、　〃
6	〃	〃	〃	〃	1.0	1.8	0.8	0.6	めのう	先端部欠	〃　、　〃
7	〃	〃	〃	〃	2.1	1.9	1.9	1.7	〃	完形	〃　、　〃
8	〃	〃	〃	〃	2.5	1.8	1.8	1.7	起質硬質凝灰岩	〃	〃　、　〃
9	〃	〃	〃	〃	2.5	1.4	0.4	0.9	輝緑凝灰岩	〃	〃　、　〃
10	〃	〃	〃	〃	2.5	1.4	0.4	0.5	凝灰質硬質頁岩	〃	〃　、　〃
11	〃	〃	〃	〃	3.0	1.0	1.0	1.2	玉髄	〃	流線形鏃、両面剥離調整
12	〃	〃	BB18	〃	2.1	1.1	0.1	0.5		〃	菱形鏃
13	〃	〃	BC18	〃	2.0	1.6	0.6	0.7	凝灰質硬質頁岩	先端部欠	抉り入り三角鏃
14	〃	石鏃	BC15グリッド	遺物包含層中部	2.2	2.0	2.0	2.1	起質硬質凝灰岩	完形	つまみあり
15	〃	〃	BA19	遺物包含層上部	2.6	1.0	1.0	1.5	起質硬質凝灰岩	〃	つまみなし
16	〃	〃	BC18～21グリッド	遺物包含層下部	3.0	1.0	1.0	1.4	〃	〃	〃
17	〃	〃	BA21グリッド	〃	3.5	1.0	1.0	1.9	凝灰質硬質頁岩	先端部欠	つまみあり
18	〃	〃	郷倉南側トレンチ	〃	4.8	1.8	1.8	2.4	〃	完形	〃
19	6—3	刃器	BB21グリッド	〃	4.7	2.8	2.8	10.0	硬質頁岩	〃	不整形フレーク、片面剥離加工
20	〃	〃	AJ21ピット	埋土層上部	3.6	4.5	0.8	13.0	珪質凝灰岩	〃	〃　、　〃
21	〃	〃	郷倉南側トレンチ	遺物包含層下部	6.1	5.0	1.6	50.0	硬質頁岩	〃	〃　、　〃
22	〃	〃	〃	〃	10.1	3.8	1.4	50.0	起質硬質凝灰岩	〃	〃　、　〃
23	〃	〃	祠堂、郷倉間トレンチ	二次堆積層	6.2	3.0	1.1	17.5	硬質頁岩	〃	〃　、　〃
24	〃	〃	出土地不明	遺物包含層下部	5.8	3.2	1.4	18.7	〃	〃	〃　、　〃
25	〃	〃	郷倉南側トレンチ	遺物包含層	6.3	2.9	0.7	14.0	珪質頁岩	一部欠	〃　、　〃
26	〃	〃	AJ21ピット	埋土層上部	5.4	4.0	1.3	19.0	〃	完形	〃　、　〃
27	〃	〃	AD～AE15～21	二次堆積層	4.9	5.6	0.7	13.5	硬質頁岩	一部欠	つまみ付きのいわゆる横型石錐
28	〃	〃	郷倉南側トレンチ	遺物包含層	6.3	2.7	1.2	26.0	珪質頁岩	完形	不整形フレークの片面に抉り込み刃部いわゆるエンドスクレーパー
29	〃	〃	〃	〃	6.6	3.8	1.5	35.0	硬質頁岩	〃	エンドスクレーパー
16—1	—	打製板状	AJ21ピット	埋土層	15.3	5.5	1.8	200	粘板岩	〃	不整楕円形の扁平礫の周辺部打ち欠き
2	—	ヘラ状石器	BB23グリッド	遺物包含層下部	9.1	3.9	1.5	50	硬質頁岩	〃	全面打ち欠き、横断面凸レンズ状
3	—	〃	AJ18～24	〃	7.5	3.5	1.6	30	〃	〃	〃　横断面カマボコ状
4	—	打製石斧	郷倉南側トレンチ	〃	9.4	5.6	2.9	280	粘板岩ホルンフェルス	2/3	縁の打ち欠き加工、自然面残る
5	—	磨製石斧	〃	遺物包含層中層	8.4	3.9	2.2	110	緑色細粒玄武岩	両端欠損	研磨痕あり
6	—	〃	AF～AH21～24グリッド	遺物包含層	5.8	2.7	0.7	10	粘板岩ホルンフェルス	刃部欠損	細長扁平礫の一端を少し打ち欠いている。
7	—	〃	〃	〃	8.4	4.6	2.8	160	粘板岩ホルンフェルス	完形	風化が著るしい
8	—	小型打製石斧	出土地不明	〃	10.5	2.0	1.2	40	緑色細粒凝灰岩	〃	小型で扁平、全面に研磨痕あり
17—1	9—3	打製円板状石製品	不明	〃	2.5	4.0	1.2	30	緑色砂質凝灰岩	〃	扁平な礫の側面全体を打ち欠いている
2	〃	〃	AJ21～24グリッド	〃	4.2	3.9	1.4	40	〃	〃	〃
3	〃	〃	BC～BD19グリッド	〃	4.1	3.8	1.3	35	〃	〃	〃
4	〃	〃	A区	遺物包含層上部	3.5	3.4	1.0	20	〃	〃	〃
5	〃	〃	AJ21ピット	埋土層上部	5.0	4.3	1.1	35	〃	〃	〃
6	〃	〃	BC12ピット	埋土層	5.7	6.0	2.1	100	〃	〃	〃
7	〃	〃	AI23グリッド	遺物包含層下部	4.8	5.0	1.5	60	〃	〃	〃
8	〃	〃	郷倉南側トレンチ	〃	5.2	5.6	1.4	55	プロピライト	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	5.3	5.3	2.0	80	〃	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	5.4	4.6	1.4	50	緑色砂質凝灰岩	〃	〃
11	〃	〃	BB18～24	二次堆積層	4.5	4.8	1.1	40	〃	〃	〃
12	〃	磨製円板状石製品	郷倉南側トレンチ	遺物包含層下部	5.5	5.2	1.8	80	緑色砂質凝灰岩	〃	扁平な礫の全面を円板状に磨いている
13	9—2	紡錘車	AJ21ピット	埋土層上部	8.9	8.9	1.1	100	緑色細粒凝灰岩	ほぼ完形	円板状の礫の片面、側部を磨き中央に穿孔

図版番号	写真番号	器種	出土区域	層位	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	保存状況	備考
17−14	9−3	小型石錘	A 区	遺物包含層	4.8	4.9	1.4	50	石英安山岩	完 形	円板状の礫の中央部を帯状に廻り回めている
15	8−4	石 槍	鬼倉南側トレンチ	遺物包含層下部	7.6	3.7	1.1	20	凝灰質硬質頁岩	1/3	全面打ち欠き。断面凸レンズ状
16	〃	〃	〃	〃	7.9	4.1	1.7	40	〃	〃	〃 〃
18−1	10−4	凹み石	B B18グリッド	〃	9.6	6.5	2.2	380	複輝石安山岩	側縁一部欠	扁平な円礫に凹み 4
2	〃	〃	A J21〜24	〃	10.2	8.5	5.0	660	〃	完 形	やや肉厚の円礫に凹み 4
3	〃	〃	不 明	〃	9.5	6.7	4.9	490	花崗閃緑岩	〃	〃 2
4	〃	〃	A J21グリッド	〃	14.6	7.5	3.1	480	緑色砂質凝灰岩	〃	不正楕円形の扁平礫に凹み 4
5	〃	〃	A J21ピット	埋土層	12.5	7.5	5.2	820	複輝石安山岩	ほぼ完形	やや肉厚の不正楕円礫に凹み 2
6	〃	〃	A I24グリッド	遺物包含層下部	19.2	8.8	4.7	530	〃	3/4	扁平な円礫に凹み 2，側部磨滅
7	〃	〃	A H21	〃	11.7	6.0	3.0	300	緑色砂質凝灰岩	完 形	扁平な楕円礫に凹み 4
8	〃	〃	B B18住居跡	埋土層	11.8	7.7	4.9	580	複輝石安山岩	〃	やや肉厚の楕円礫に凹み 4
9	〃	〃	鬼倉南側トレンチ	遺物包含層下部	12.2	5.9	4.5	460	〃	〃	肉厚で歪みの著しい不整楕円礫に凹み 2
10	〃	〃	B B18住居跡	埋土層	11.3	8.1	3.4	410	緑色砂質凝灰岩	ほ定形	楕円形の扁平礫凹み 2
11	〃	〃	A F〜A H21〜24グリッド	遺物包含層	9.0	8.6	3.8	270	複輝石安山岩	完 形	扁平な円礫に凹み 2
19−1	10−3	大型凹み石	B C15グリッド	遺物包含層下部	19.2	残 14.7	10.5	5,600	複輝石安山岩質溶岩	一 部 欠	凹穴内角の凹みとう歯くらいの圧潰あり
2	10−1	石 臼	A J21グリッド	〃	残 13.2	16.3	厚 5.2	900	緑色細粒凝灰岩	体部小片	平面隅，丸長方形，角柱状の台付
3	〃	〃	A J21〜24グリッド	〃	19.0	残 8.5	〃 3.1	850	石英安山岩質凝灰岩	体部 1/2	中央部の凹んだ扁平な自然礫利用
4	〃	〃	B A21グリッド	〃	残 22.0	残 13.5	〃 4.8	830	石英安山岩質細粒凝灰岩		平面隅丸長方形か，枕木状の台付
20−1	10−2	凹み石	A G18住居跡	埋土層	19.2	7.4	2.5	720	緑色砂質凝灰岩	完 形	扁平礫の一面に凹み 1つ
2	〃	〃	A 区	遺物包含層下部	17.3	7.7	6.0	910	〃	〃	長いラグビーボール形，表裏 4，側部 1 の凹み
3	〃	石 棒	B E12グリッド	〃	29.0	6.3	6.0	1,840	斜長石流紋岩	体部破片	断面不整四角形状
4	〃	〃	B A15	〃	24.2	10.3	8.1	2,950	石英質安山岩	〃	断面扁円形
5	10−1	石 臼	A 区	〃	残 9.3	12.0	厚 3.3	440	緑色細粒凝灰岩	1/2	平面隅丸長方形，2面の枕木状の台付
6	10−2	砥 石	B B15グリッド	〃	15.2	7.9	4.1	690	緑色細粒凝灰岩	完 形	コッペパン状の礫の 4 面に擦痕あり
21−1	9−2	有溝石製品	A J21ピット	埋土層上部	7.7	5.5	2.0	9.5	〃	〃	扁平な楕円礫の背面を磨き，一溝を穿つ
2	〃	有孔石製品	A I21グリッド	遺物包含層下部	7.3	2.2	0.8	17.0	〃	〃	三日月形の石板の側面円側に溝あり
3	〃	有孔装飾品	A I21ピット	埋土層下部	6.9	3.3	0.8	30.0	〃	〃	有溝，縄状文，点列文の施刻あり
4	〃	〃	A J21ピット	埋土層上部	4.2	4.3	0.9	17.0	〃	〃	扁平な自然礫に孔を穿っている
5	—	小型磨製石斧	B 区	遺物包含層下部	3.7	2.0	0.8		〃	〃	模造品か
6	9−2	有溝石製品	B A24グリッド	〃	1.6	2.6	0.8	4.0	〃	半 欠 ア	楕円形の石板の片面と側面に溝あり
7	〃	有孔自然礫	A J21ピット	埋土層上部	5.0	4.0	1.7	60.0	砂質凝灰岩	完 形	そのまま装飾品に転用されたらしい
8	〃	有孔装飾品	B A24グリッド	遺物包含層下部	5.5	2.1	0.6	10.0	緑色細粒凝灰岩	〃	芋形の石板に孔を穿っている
22−1	9−4	土 偶	鬼倉南側トレンチ	遺物包含層	残 8.6	残 6.6	2.8	100	—	頭頂一部欠	背腹に樹枝状点列文，胸腹部に乳房，臍あり
2	〃	〃	〃	遺物包含層	残 5.3	4.7	1.7	40	—	胴体部上半	背腹側面間〜肩上面点列，体中央部〜孔上下貫通
3	〃	〃	〃	〃	残 6.9	3.2	1.5	30	—	胴体部中央	背腹に点列文あり
4	〃	土 版	〃	遺物包含層下部	5.0	4.7	1.5	18	—	完 形	点列，沈線，隆線からなる幾何文様
5	〃	土 偶	〃	遺物包含層	残 3.1	2.2	2.3	18	—	頭部のみ	後頭部に上下に貫ぬく孔あり
6	〃	環状土製品	B B21グリッド	遺物包含層	残 3.9	0.9	0.9	0.5	—	1/4	粘土紐の環体
7	9−1	〃	B D15グリッド	〃	7.0	推 10.5	2.0	40	—	1/4	帯状の環体
8	〃	石錘模造品	B B18グリッド	遺物包含層下部	残 7.2	4.7	2.4	45	—	辺縁部欠	粘土中に雲母，長石多し
9	〃	有孔土製品	鬼倉南側トレンチ	〃	8.2	8.3	2.4	40	—	完 形	土器の口縁部破片を転用している
10	9−4	円板状土製品	B B23グリッド	〃	4.5	4.2	0.6	16	—	ほぼ完形	土器片加工，撚糸文
11	〃	〃	鬼倉南側トレンチ	〃	4.8	5.5	0.8	26	—	〃	〃 ，右上かり単節斜縄文
12	〃	〃	〃	〃	4.4	5.2	0.8	28	—	〃	〃 ，左上かり 〃
13	〃	〃	〃	〃	5.0	4.7	0.8	23	—	〃	〃 〃 〃
14	〃	〃	B A18グリッド	〃	5.1	4.9	0.7	42	—	〃	〃 ，撚糸文
15	〃	〃	鬼倉南側トレンチ	〃	5.3	5.8	0.8	30	—	〃	〃 ， 〃
16	〃	〃	B B15〜18グリッド	〃	4.1	4.2	1.0	22	—	〃	〃 ，左上がり無節斜縄文
17	〃	〃	A F24グリッド	〃	4.6	4.7	1.1	27	—	〃	〃 ，撚糸文

図版番号	写真番号	器種	出土区域	層位	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	保存状況	備考
23−1	8−4	石 器	AD24溝(BA18グリッド付近)	埋土層下部	7.7	7.7	6.7	370	砂質凝灰岩	完 形	自然礫の軟質部を穿っている。
2	〃	磨製玉造器	A D24溝	埋土層下部	4.2	1.5	1.0	10	粘板岩	先端部のみ	用途不明
3	9−2	磨製石板	A D〜A E18グリッド	表 土	5.3	2.6	0.9	15	緑色細粒凝灰岩	完 形	扁平な楕円礫の 4 面を磨っている
4	8−4	磨製石斧	A G18住居跡	埋 土	7.4	2.9	1.3	39	〃	頭 部 欠	小型石斧
5	〃	〃	鬼倉南側トレンチ	盛土層上部	9.9	5.9	2.9	210	砂 岩	刃 部 欠	敲打具として転用されている
6	〃	〃	経塚北側	ゴミ捨の層	6.4	4.2	2.5	100	閃緑岩	頭 部 欠	
7	9−2	有孔装飾品	鬼倉南側トレンチ	盛土層	2.1	2.1	0.5	3	緑色細粒凝灰岩	完 形	円板の中央部に孔あり
8	—	打製円板状石製品	鬼倉付近	盛土層上部	5.2	5.6	1.1	40	流紋岩	〃	未製品か？
9	9−2	岩偶か石錘	鬼倉南側トレンチ	〃	残 3.8	4.2	1.0	16	砂質凝灰岩	1/2	扁平な礫の両面に擦痕，溝あり
10	—	石 鏃	A D24溝，(BC21グリッド)	埋 土	1.7	1.2	0.3	0.5	玉 髄	完 形	抉り入り三角鏃
11	—	〃	B F03グリッド	表 土	1.6	1.3	0.2	0.4	鉄石英	〃	〃
12	8−4	石 槍	鬼倉経塚，BG50グリッド	埋立土層	残 8.4	4.2	1.6	57	硬質頁岩	1/2	両面打ち欠き加工
13	〃	刃 器	鬼倉南側トレンチ	表土	7.2	5.4	1.2	50	〃	1/2	片面チッピングによる刃部形成
14	9−1	環状土製品	X F16溝（鬼倉遺構）	埋土層上部	5.5	推 7.7	1.6	75	—	1/3	帯状の環体

真9－1）

環状土製品　第22図6・7に掲げた様な大小の環状土製品の破片が2点、包含層中から出土している。6は最大の太さが約0.8cm横断面が隅丸台形状の環体からなる直径約4.8cmの小型環状土製品である。7は巾約7.0cm、厚さ約1.0cmの帯状の環体からなる、最大径約10.4cmの比較的大型の土製品である。胎土の色調は6は黒色、7は橙色を呈し、質は土器類と同じで脆い。類例は県内では大迫町立石[23]を始めとした縄文時代後期初頭の遺跡で見られるが、当遺跡の場合、出土層から見て中期末に含められる可能性が大きい。（第22図6・7、第1表、写真9－1・4）

円板状土製品　主として土器の胴体部破片を円形に打撃加工した、板状の土製品が多数出土している。大きさは直径3.5～6cm大の各種あるが概して直径3.5cm大の小型品と直径6cm大の大型品が多い。大部分が粗製土器を素材としているが、出土層などから見て、大部分が縄文時代中期末の土器類に伴なうものと推定される。類例は五十瀬神社前遺跡、八天遺跡やその他各地の縄文時代中期～晩期の遺跡でしばしば見られる。（第22図11～17、第1表、写真9－4）

＜石材類＞　包含層中からは前記各遺物に共伴して、コア48点、フレーク3,536点、合計3,584点の石材類が出土している。この点数は包含層の調査面積から見るとかなり膨大である。

材質別に見ると硬質頁岩類、チャート、玉髄、鉄石英、黒燿石、流紋岩、珪化木、鉄蛋白石、石英、珪質細粒凝灰岩、松脂岩などのⅠ群1類の石器に関連した石材が圧倒的に多い。その他に粘板岩、安山岩溶岩、緑色凝灰岩などⅠ群2～4類などの原料石が少数出土している。コアなどで観察する限り、石片類の大部分は付近の川原で採集された礫が素材にされたらしく、多くの破片に礫の自然面が残されている。（第2表）

＜埋れ木＞　石片類に混って、装飾品などの原料にされたと思われる埋れ木の小片が2点出土している。（第2表）

＜骨片＞　ＡＪ21ピット西側の埋土上層部からは朱塗り土器片などに混って、大型獣類ないし人の骨と思われる骨の細片が4片出土している。正式な種属名については、現在のところ不明である。（第2表）

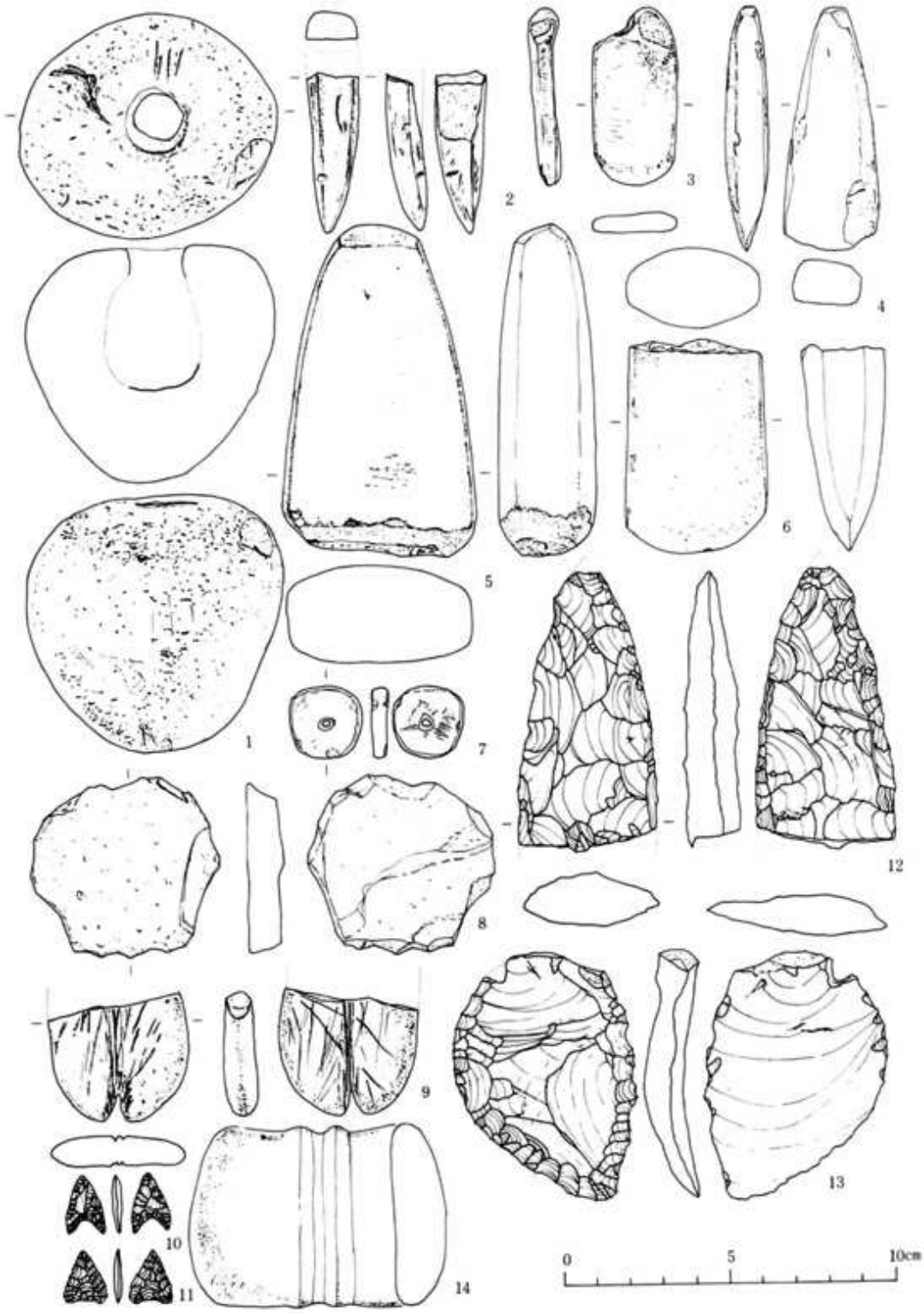
＜木炭＞　包含層中には木炭の細片が比較的多数混入していた。やや大きな破片は2～3ケ所で見られたが、樹種などは現在のところ不明である。

(4)　縄文時代の遺構・包含層以外からの出土遺物

前述した遺構や包含層以外の新期の堆積層や各遺構埋土、盛土整地層中からも縄文時代の遺物が多く発見されている。その内容は土器片の一部に第13図3に示した様な縄文時代前期初頭の土器片が見られる以外、包含層の場合と大体同じである。これらの遺物は、いずれも、上記の各土層中に偶然紛れ込んだもので、遺構や土層の時期関係を直接示すものではない。しかし、前記包含層の時期や遺跡の性格を知る上で、補足的な意味合いを持つと思われる。紙巾の都合で石器類と土製品の一部のみを図示した。（第23図1～14、表1・2表、写真8－4）

(5)　まとめ

以上、現在までの整理の結果をもとに、鬼柳西裏遺跡に於ける縄文時代の遺構と遺物包含層および出土遺物の内容について述べて来たわけであるが、次に上記の事実をもとに2～3のまとめ



第23図　新期遺構および二次堆積層出土石器・土製品類実測図

をしてみたい。

(a) 各遺構、包含層の所属時期

調査区域内から発見された住居跡1、ピット4の各遺構とそれらの遺構を被う遺物包含層中の出土遺物は、大部分、縄文時代中期末の大木10式の新期に相当するⅠ～Ⅴ群の土器片である。縄文時代の土器類としては、包含層の内外から、他に縄文時代前期前葉、中期前葉、後期前～中葉、晩期の土器片が発見されているが、いずれも僅少である。また、弥生時代中期前葉の土器片も発見されているが、これも、痕跡程度である。他の伴出遺物については、一部を除いて、遺物そのものから時期を特定する事は困難であるが、全体的な出土状況から見て、土器類と同様の傾向にあると推定される。

層と遺物の関係が充分に確認されていないので、一概に断定はできないが、以上の結果から上記各遺構の所属時期と包含層の主要形成時期を大体、縄文時代中期末の大木10式期新期に相当する時期に求める事ができよう。

(b) 各遺構と包含層の性格

以上の様に考えた場合、各遺構と包含層の性格付けが問題になるが、その位置や立地などの状況から見て、当時、調査区付近に営まれていた集落に伴なうものと考えられる。この場合、集落の中心部分は、地形や包含層の分布範囲から見て、丘陵の東側裾部の緩斜面一帯、つまり御仮屋跡地の西側部分から、調査区西方の東北本線用地にまたがる部分一帯に展開していたと推定される。従って、調査区の部分はその東半ないし東辺部という事になろう。

以上の様な集落跡を想定した場合、包含層の性格としては、他の集落跡で見られる様に、廃棄物処理施設などの可能性が考えられる。また、発見された遺構のうちＡＩ21、ＡＪ21の両ピットについては出土遺物の中に石製装飾品や朱塗り土器など、他の生活遺物とは著るしく性格を異にする遺物が見られる事から、埋葬ないし、祭祀に関連した施設としての性格が予想される。他の3ピットの性格はあまりよく解らない。

(c) 中期末以外の縄文時代各期および弥生時代中期前葉に於ける遺跡の性格

(a)の項でも述べた様に調査区内からは縄文時代中期末以外の各時期の遺物がわずかながら出土している。これらの遺物に関連した遺構は現在までのところ全く発見されていない。しかしながら、これらの遺物が他から、後世に運び込まれたものではなく、各時期に当遺跡付近を生活の舞台としていた人間達が各々残々したものである事はほぼ確実である。その様に見て来た場合、各期に於ける当遺跡の性格としては集落跡と考える事もできるが、むしろ、集落の周辺部に散らばるキャンプ地、つまり採集や狩猟あるいは漁撈などのための一時的な居住地として利用された場所である可能性が強い。

(d) 縄文時代の微地形について

調査区付近をある時期に川が南流していたという事については既にⅢ章で述べたが、この川は縄文時代中期末にはほとんど埋没し、現在の微高地の原形が既に形成されていたらしい。遺物包含層は丘陵の東側裾部からこの旧河道部分一帯に広がっているが、その東半部は褐色のシルト質軽埴土などの水性堆積層で被われている。同じ状況は、江刺市の五十瀬神社前遺跡の場合にも認め

られているが、いずれも、河川洪水によって、遺跡付近一帯が度々冠水した事実を示している。当遺跡ではこの種の水性堆積層がさらに平安時代の遺構を被っており、洪水の危険がかなり新しい時代まで続いていた事を物語っている。集落立地の条件に関わる問題として興味が持たれる。

その他、御仮屋跡地付近の調査によって次の様な事が知られた。つまり、かつて、御仮屋の北半部付近に丘陵裾部から東に開口する浅い谷が走っていたらしい。この谷の形成時期は不明であるが、ともかく、御仮屋は、この谷の一部を埋め立てて整地した上に築かれている。埋め立てに使った土石は御仮屋西方の丘陵裾部から運び込まれたらしい。そこには、縄文時代の遺構が存在したらしく、埋め立て土層の中からは須恵器、土師器などの平安時代遺物に混って、縄文時代の土器や石器、石材が多数出土している。いずれ、この谷が縄文時代に既にあったのか否かという事実関係は調査時には確認できなかったが、湧水との関連から集落のあり方を考える上で、今後検討を要する課題であると云えよう。

(e) 包含層から出土した石器類の特徴

調査面積が狭いにもかかわらず、包含層中からは各種の石器が多数出土している。中でも、特にⅠ群1類の石鏃、刃器類、3類の円板状石製品、5類の凹み石の点数が多く、2類の磨製石斧4類の石皿などがそれに次いでいる。他の石器の数はいずれも僅少である。これらの石器類は大部分、縄文時代中期末に属するが、器種組成上の上記傾向を当期特有の文化的な一般特徴と見なすべきか、地域的特徴と見なすべきか、今のところ対照資料が乏しいため、よく解らない。ただ、資料的には不備であるが、全体的な器種組成の傾向は、時期的にも、地理的にも近接する五十瀬神社前、八天などの例とかなりよく似ている。それは各器種の共伴関係ばかりでなく、個々の石器の特徴にも見られる。例えば、五十瀬神社前遺跡では、当遺跡と同様に多数の刃器類が出土しているが、その中で最も一般的なのは、やはり、当遺跡同様に、簡略化された無柄の刃器である。石鏃の形も、比較的小型で、基部に抉りを有する三角鏃が大部分を占める。凹み石、石皿、石錐なども量が少なく、詳細な比較はできないが、形態的には、大体同じと云えよう。

ただ、当遺跡で多く見られる円板状の石製品が、五十瀬神社前や八天遺跡ではほとんど見られない。この円板状石製品の打製のものが縄文時代中期中葉頃から晩期中葉にかけて出現するが、県内でも縄文時代中期中葉の紫波町西田[24]、中期末の湯沢、繋Ⅲ、後期前～中葉の紫波町墳館[25]、滝沢村卯遠坂、晩期の衣川村東裏[26]、北上市九年橋[27]、水沢市里槍[28]、大迫町小田[29]、などの各遺跡で発見されている。墳館からは磨製のものも出土しているが、他の遺跡では磨製のものがほとんど見られない。この様に円板状石製品の主流は打製のものでほとんど占められるが、出現頻度から見ると、縄文時代中期末と晩期中葉頃にそれぞれ多用されるらしい[30]。特に後者では一般的である。それに比べて、前者の場合には湯沢遺跡や当遺跡の様に出土点数の多い遺跡もあるが、一方で、五十瀬神社前遺跡などの様にほとんど出土しない例もあり、一定しない。これは一体何を意味するものであろうか。用途の問題とも関連して、今後の研究に期待される面が大きいと云えよう。

(f) その他

今回の報告では、整理期間の都合により、包含層内の「土器、石器類をはじめとする各器種毎の組成率」、「土器類に於ける器形と文様の対応関係とその変化」、「石器、石材類に於ける材質別

組成率と原料の産地同定」あるいは「加工技法の復元」などといった、幾つかの重要な問題について、詳細に触れる事ができなかった。これらの問題は、縄文時代中期末を中心とした時期に当地方で暮らしていた人々の生活の実態を復元、究明する上でいずれも解決すべき重要課題である。もちろん、当時の人々の生活実態を解明するためには、上記の課題のみでなく、さらにいくつかの課題の解決が必要である。しかしながら各遺跡に於けるデータ分析の成果はわずかでも、各種成果の集積によって、より詳細な人間生活の把握が可能になって来る事も事実であるし、それだけに、先に掲げた幾つかの重要課題の再検討が今後ますます必要になってくるであろう。

なお、既に出した現地説明会資料や略報[31]の中で包含層中の主要土器片の所属年代を縄文時代後期初頭の門前式[32]等に相当させているが、それはまちがいなので訂正をしたい。未整理の資料の中には、文様上、門前式と云われる土器群に類似するものも確かにあるが、それはごく少数で、観察の結果大部分の土器片の所属時期は縄文時代中期末に位置付けられる事が明らかになった。

注記（文献中、各教育委員会、埋蔵文化財センター発行のものについては著者名を省略した。）

（1）岩手県教育委員会　1979　「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅰ
（2）北上市教育委員会　1979　「八天遺跡」
（3）宮城県教育委員会　1968　「西の浜貝塚緊急発掘調査概報」
（4）宮城教育大学歴史学研究史学研究会　1968　「仙台湾周辺の考古学的研究」
（5）花泉町教育委員会　1971　「貝鳥貝塚」
（6）岩手県埋蔵文化財センター　1972　「繋第Ⅲ遺跡現地説明会資料」1・2
（7）岩手県教育委員会　1980　「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅱ
（8）大槌町教育委員会　1964　「崎山弁天遺跡」
（9）岩手県教育委員会　1979　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅰ
（10）草間俊一　1954　岩手県川目遺跡調査概報　「岩手大学学芸学部研究年報」第7巻第1部
草間俊一　1955　岩手県川目遺跡調査概報（第二報）「岩手大学学芸学部研究年報」
第9巻第1部　以上の二文献はいずれも岩手大学学芸学部学会
（11）草間俊一　1966　岩手町大森・どじの沢遺跡　「岩手大学教養学部報告」№1　岩手大学教養部学会
（12）十腰内遺跡調査団　1969　「十腰内—青森県弘前市十腰内縄文式遺跡」
（13）七ケ浜町教育委員会　1979　「大木囲貝塚—昭和52年度環境整備調査報告」
（14）岩手大学考古学研究会　1978　「大館町遺跡」　盛岡市教育委員会
（15）大迫町教育委員会　1974　「天神ケ丘遺跡」
（16）岩手県教育委員会　1980　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅴ
（17）一関市教育委員会　1977　「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」
（18）一関市教育委員会　1980　「草ケ沢遺跡第一次発掘調査報告書」（予定）
（19）江刺市教育委員会　1973　「沼ノ上遺跡調査報告書」
岩手県埋蔵文化財センター　1978　「江刺市　沼の上遺跡」
（20）岩手県埋蔵文化財センター　1979　「主要地方道一関、北上線関連遺跡発掘調査報告書」
（21）矢巾町煙山地内に所在。出土遺物は岩手大学、都南村郷土資料館等に保管されている。
（22）岩手県埋蔵文化財センター　1978　「都南村湯沢遺跡」
（23）大迫町教育委員会　1978　「立石遺跡発掘調査概報」
（24）岩手県教育委員会　1979　「昭和52年度東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
（25）岩手県教育委員会　1980　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅲ
（26）岩手県教育委員会　1980　「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅵ
（27）北上市教育委員会　1976～1978　「九年橋遺跡調査報告書」第2～4次
（28）水沢市佐倉河所在。出土資料は水沢市立図書館、東北大文学部等に保管されている。
（29）大迫町教育委員会　1979　「小田遺跡発掘調査報告書」
（30）打製の板状石製品の出土遺跡、時期等に関しては斉藤淳、本堂寿一、相原康二、狩野敏男、三浦謙一、石川長喜、熊谷常正、鈴木優子各氏の教示を得た。
（31）岩手県教育委員会　1975　「西野・鬼柳西裏遺跡発掘調査中間説明会資料」
1976　「昭和50年度東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」Ⅰ
1977　「昭和51年度東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
（32）吉田義昭　1960　「門前貝塚」　盛岡市公民館
陸前高田市教育委員会　1974　「門前貝塚発掘調査概要」

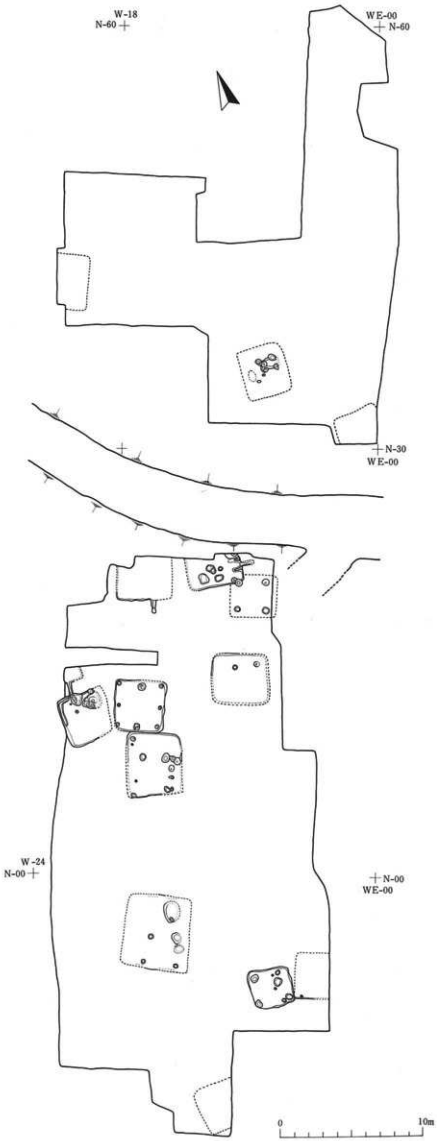
第2表　鬼柳西裏遺跡出土縄文時代遺物集計表

資料区分	出土遺構名	土器類 口辺部	土器類 胴体部	土器類 底(脚)部	土器類 総計	その他 土製品	その他 石器類	その他 石材類	その他 総計
遺構内出土資料	AI21 ピット	24 (1) [1]	144	11	179 (1) [1]		1		180
	AJ15 ピット		16		16				16
	AJ21 ピット	179 (1)	1,188	67	1,434 (1)		11	144	1,589
	小計	203	1,348	78	1,629	0	12	144	1,785
包含層内出土資料	X E 06～18		23	2	25		1	22	48
	X I 03～09	1	44	4	49			1	50
	X H 06～18	4	115	1	120		2	20	142
	AC・AD 15～18		11		11		1	26	38
	A D 15～21	2	69	3	74		20	61	155
	AD・AE 15～24	29	387	16	432		10	55	497
	AD～AF 15～24	1	122	6	129		7	90	226
	A E 15～21	22	290	9	321		3	27	351
	A F 15～24	37	635	20	692		8	22	722
	AF～AI 15～24	77	916	52	1,045		62	63	1,170
	A G 15～24	20	341	41	402		4	13	419
	A H 15～24	43	231	32	306		17	112	435
	A I 12～24	15	1,208	52	1,375		38	144	1,557
	AI・AJ 12～24	7	106	3	116		6	44	166
	A J 12～24	416	4,005 (1)	225	4,646 (1)	1	90	546	5,283
	A 区	4	78	5	87		2		89
	B A 12～24	362 (1) [1]	5,634	304	6,300 (1) [1]	2	27	672	7,001
	BA・BB 12～18	21	120	8	149		1		150
	B B 09～24	127	1,569	66	1,762	2	19	136	1,919
	BB・BC 09～15	1	3	1	5			10	15
	BB・BD 12～24							2	2
	B C 09～2	241	3,019	153	3,413		34	406	3,853
	BC・BD 12～21	11	212	6	229		16	162	407
	B D 12～24	51	951	46	1,048	1	12	188	1,249
	BD・BF 12～15		20	1	21				21
	B E 12～15	11	523	15	549		3	103	655
	B 区		31		31				31
	郷倉南側トレンチ	426	3,325	415 (1)	4,166 (1)	26	106	488	4,786
	郷倉南・経塚間トレンチ						3	171	174
	小計	2,029	23,988	1,486	27,503	32	492	3,584	3,161
新期遺構内出土資料	XC03 ピット		1		1				1
	XC06 溝		11		11				11
	XF18 溝(堀状遺構)	1	22	3	26	1	9	136	172
	XE03 ピット		4		4				4
	XF06 ピット		8	1	9			2	11
	XF21 住居跡	1	21		22				22
	XH15 住居跡	1	10		11				11
	AC15 住居跡	5	41	3	49				49
	AD09 ピット		1		1				1
	AD18 石組		31		31				31
	AD24 溝	160	1,828	125	2113		25	3	2,141
	AE12 住居跡	4	61	2	67		1		68
	AF15 ピット		12		12				12
	AF21 ピット						1		1
	AF21 住居跡		21	3	24				24

資料区分	出土遺構名	出土類 口辺部	出土類 胴体部	出土類 底(脚)部	出土類 合計	その他 土製品	その他 石器類	その他 石材類	その他 総計
新期遺構内出土資料	AF24 住居跡		10		10		3		13
	AG15 溝							1	1
	AG18 住居跡	7	150	6	163		2	33	198
	AG24 住居跡	1	89	6	96				96
	AH12 ピット		2		2		1		3
	AH15 ピット	1	18		19			2	21
	AI12 ピット						2		2
	BA03 ピット	1	11		12		1		13
	BA18 住居跡	30	372	35	437		8	12	457
	BB03 住居跡		14		14				14
	BB06 住居跡						1		1
	BB09 住居跡	1	56	1	58				58
	BB18 溝						4	21	25
	BC06 住居跡		0		10				10
	BC12 ピット	2	71	6	79		1		80
	BC18 溝	3	32		35				35
	御板屋跡地	3	115	5	123		8	40	171
	経塚・経塚周辺	5	249	18	272		17	84	373
	盛土地区(経塚周辺除き)	72 (1)	1,011	66	1,149 (1)		18	67	1,234
	小計	298	4,282	280	4,860	1	102	401	5,364
二次堆積層および出土層不明	X 区	7 [2]	80	5	92 [2]		1		93
	AC・AD 12～18		1		1			6	7
	A D 09～12		1		1		3	4	8
	AD・AE 15～24	2	50		52			39	91
	A F 03～50		1		1			1	2
	A H 18		3		3				3
	A I 06						1	1	2
	AI・AJ 18～24	3	22	3	28		2	87	117
	A J 21～ 4	4	93	5	102		2	16	120
	B A 18	3	45	4	52				52
	B B 06						2		2
	B B 15～24	30	193	8	231		3	212	446
	BB・BC 12～15		20	1	21			9	30
	B C 15～24	14	236	16	266		2	41	309
	B C 18～24	2			2				2
	B D 03～09						2		2
	B D 15～18	2	62		64			38	102
	BD～BF 12～15	2	13		15			45	60
	B F 03						3		3
	B G 15		9		9				9
	B 区出土地不明	1		1	2			17	19
	C D 15		8		8				8
	C D 15～18		11		11				11
	C H 15～18	1	6	1	8				8
	C I 21		1		1				1
	C J 15～18		1		1				1
	東側トレンチ	14	154	13	181	1	2		184
	出土遺構不明	30	406	18	454		61	143	658
	小計	115	1,416	75	1,606	1	84	659	2,350
総計		2,645	31,034	1,919	35,598	34	690	4,788	41,110

□ AF24、AI12～24、BA・BB12～18、郷倉南側トレンチの各遺構から有孔礫計4点が出土している。
□ AF～AI15～24の遺構から埋れ木2点が出土している。
□ AJ21ピットの遺構から骨片4点が出土している。

○ 完形土器は口辺部と合計に□で示す。
○ 朱塗土器は口辺部～底(脚)部と合計に〔 〕で示す。
○ 土器片の個体数は明らかに接合する資料については片数にかかわらず1点として扱った。
○ 個体数は1980年3月現在の点数である。
○ 円板状土製品、約50点、球磨40点は本集計表には加えられていない



第24図　平安時代遺構配置図

〔2〕　平安時代

本遺跡における平安時代の遺構は、褐色シルト粘質土の上面またはシルト質軽埴土の地山面での検出が一般的である。しかし前言の基本層位図で述べたとおり、遺跡全体の層序は極めて複雑化している。その要因として、

①遺跡が高位段丘に接続する残丘崖線下に位置し段丘崖の土砂の崩落が多かったこと。

②遺跡付近は北上川、和賀川、本郷川等の合流点に近接し、過去再三にわたり洪水に見舞われた結果土砂の移動を余儀なくしたこと。

③近世以降の土木工事による削平、撹乱、盛土等々が頻繁に行われたこと。

の三点があげられる。この結果、平安時代以後の遺構の大半は何らかの形で破壊を受けていた。したがって遺跡全体の遺存状態は極めて悪く、特に平安時代の遺構は著しい。

1　竪穴住居跡と出土遺物

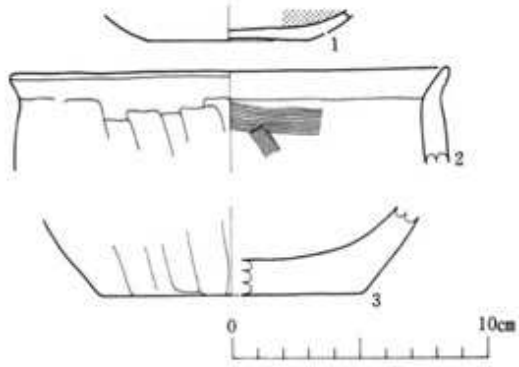
50年、51年の二次に亘る調査で発見された住居跡は、総数で18棟を数える。本遺跡は北からX区、A区、B区、C区の四区分を行い調査を進めた。住居跡の密集するものはA区でC区は稀薄である。しかしその大半は後世の土木工事、住宅建設等によって破壊を受けその全容を知り得るものは極めて少なかった。したがって遺存状態の良好な遺構を重点に記述し他はできるだけ要点のみにとどめる。なお不足分は第4表の住居跡一覧表を参照されたい。

XF24住居跡

XF21グリッド付近で発見された遺構で、西側は東北本線の路線敷に潜っていた。検出面は褐色シルト質の地山面で床面と想定される面に若干の土器片、焼土、木炭粒を検出した。しかし壁かまど、柱穴等は検出できず、平面プランは不明である。

〔出土遺物〕（第25図）住居跡に伴う遺物は全て破片で実測可能土器片は数点のみである。なおこれらの　出土位置は、西側路線敷付近の焼土散布範囲に集中していたものである。

坏はA類とC類だけで特にCⅡ類の出土が高い。甕、壺類はA類でほとんどを占めわずかにB、C類が1、2点みられただけである。1はAⅡb類の坏で底部付近の破片である。底部切離し技法は回転糸切りによる。内面はヘラミガキ調整で黒色処理を施こし、胎土は軟質で黄褐色を呈している。2は甕の口縁部破片でAIb$_1$に含まれる。口縁部の形状がわずかに「く」の字状に外反している。外面はたて方向のヘラケズリ調整、内面は横方向のケズリ調整がみられるが、焼成はあまく脆弱である。3はAIb$_1$類の底部破片と思われる。底部は平底で底部付近に粗い縦方向のヘラケズリ調整が認められる。内面は指ナデ及びヘラ状工具によるナデ調整がみられる。色調は黄褐色であるが一部赤褐色に変色した部分もみられ二次加熱を受けている。



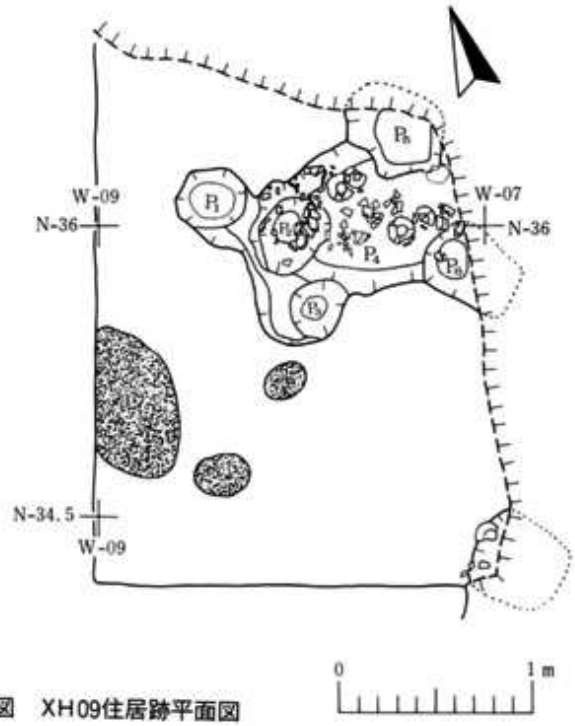
第25図　XF24住居跡出土土器実測図

以上破片も含めた観察から出土土器の特色は坏類ではCⅡ類が大部分を占め、B類

を欠きＣＩ類の出土が若干あった。

ＸＨ09住居跡（第26図・図版11）

本住居跡はＸＨ09グリッド付近で検出されたもので、ほとんど地山シルト面まで削平を受け、耕作土の薄層を剥いだ時点で土器片の出土をみた。遺構はP_1～P_7までのピットを検出し、このうちピット４が最っとも大きく土器片の大半を出土している。ピット４以外は全て小形で同規模である。またこれらは、ピット７を除きピット４と切り合う形で検出された。したがって本遺構はピットと土器片の出土状況から推測し住居跡と確認されたものである。



第26図　ＸＨ09住居跡平面図

〔出土遺物〕（第27図・図版16）

遺物はピット２、４、７から集中的に出土した。出土土器は完形、復元可能土器と多数の破片である。破片の構成は第７表に示すとおりである。坏類はＡ類及びＣⅡ類でＢ類は全っく含んでいない。一方甕類は数点にとどまりまたＢ類の破片が２点だけみられる。

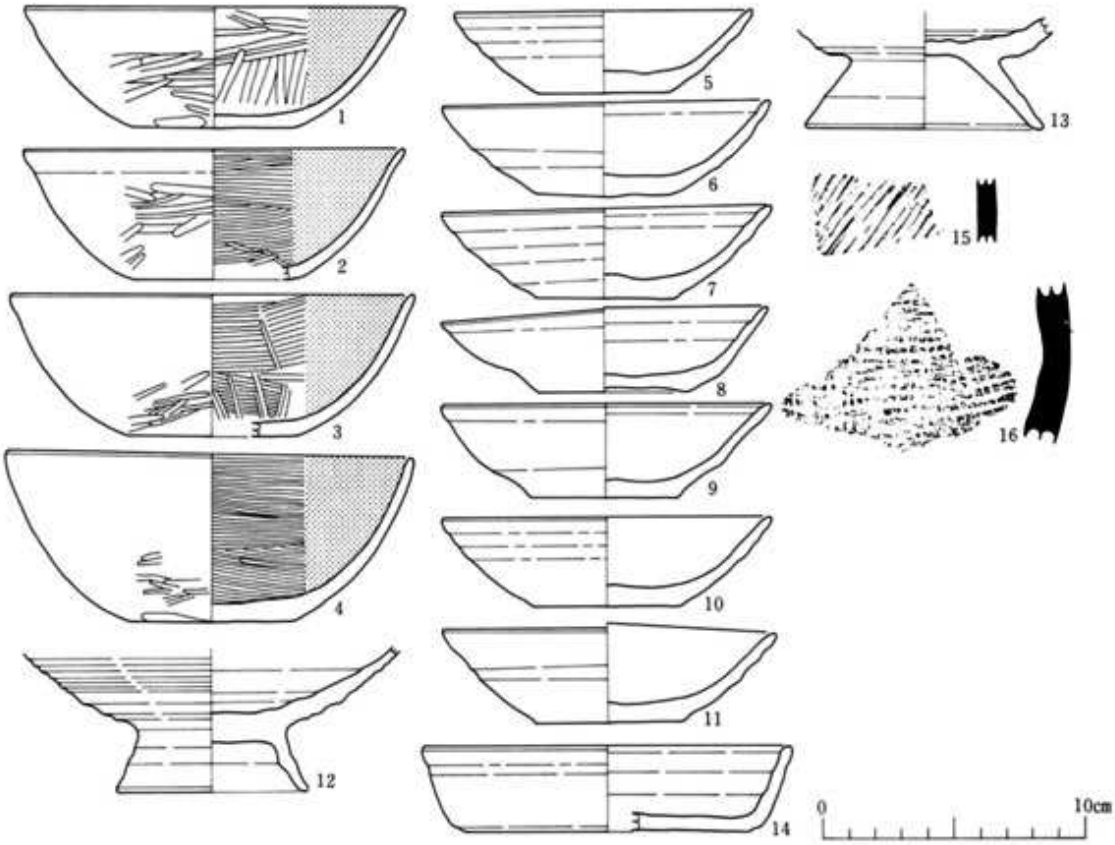
坏１～４、AIb類ロクロ成形の坏で底部切り離し後全面にわたる手持ちヘラケズリ調整を行っている。

器形はいずれもふくらみをもって外傾し口縁部は外反せず丸くおさまる。調整は体部内外面ともヘラミガキが全面に行われ、その後内面に黒色処理を施こしている。５～11はＣ類に含まれいずれも軟質のＣⅡ類である。これらは黄褐色の色調を呈した中形の坏類でロクロ成形によるものである。底部は回転糸切り技法による切り離しで、器内外面とも調整はなく黒色処理も行われない。一般に均整のとれた器形を示すが中には、８のように体部に歪みをもつものも含まれる。また12、13は高台付坏で高台は直線的に「ハ」の字状に開き特に13は脚高の極めて高い作りになっており、坏部は浅形で外方に大きく開く。体内外面ともロクロによる痕跡だけで調整は認められない。体部外面には成形時のロクロによる凹凸が顕著にみられる。14は盤状の土器で、ロクロ成形である。底部全面及び底部と体部の陵に回転ヘラケズリの調整が行われている。なお本遺跡内出土の土器に類例は見当らない。

甕　甕はＡ、Ｂ類で５点の破片を出土しているが細片のため実測を断念した。したがってその形状等も定かとは云えない。

ＸＪ03住居跡

本住居跡は地山シルト面に焼土及び木炭粒子の検出をもって住居跡と確認した。出土地点が道路北側に接し攪乱を受けていたことから土器等の出土はなく砥石１個だけであった。なお住居跡



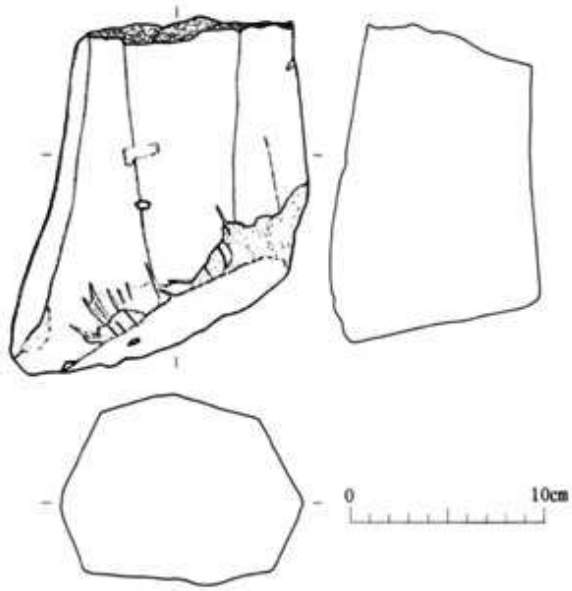
第27図　XH09住居跡出土土器実測図

のプランは不明であり、ピット、柱穴等の遺構確認はできなかった。

〔出土遺物〕（第28図）　第28図の砥石１点だけである。最大長は約17.5㎝、最大巾約14㎝の大形製品である。使用面は８面で断面形は８角形を呈している。なお一端は欠損し約半分が残存したものと思われる。各面とも中央部に向け内側に反りをみせることから大分使い込まれた砥石と伺える。

ＡＣ15住居跡（第29図・図版11）

本住居跡はＢＡ50から北へ21～23ｍ、西へ９～14ｍの範囲内で検出された。遺構の北端を土盛による道路



第28図　XJ03住居跡出土砥石実測図

がほぼ東西方向に伸びていた。道路は現地表面から東側で0.5 m、西側で1 m内外の上り勾配となっている。遺構の検出は盛土下から南へ約⅔ほどで北側⅓は路線外に伸び未調査に終った。

〔遺構確認面〕 道路基盤が盛土となり旧地表面も攪乱を受け検出面は判然としなかった。かまど遺構の検出面が地山黄褐色シルト質土であることから一応これをもって検出面ととらえた。

〔平面形〕 北壁部分の確認はできないが検出遺構部分の推計から南北約3 m、東西3.5 m内外の隅丸長方形プランをもつ住居跡と想定した。

〔壁、床面〕 住居跡は地山面を掘り込んで壁とし、残存壁高は東側18cm前後、南側で20cm内外を計測した。また、貼床の痕跡はなく床面は概ね平担である。

〔柱穴〕 柱穴と想定されるものはP_7の1個だけである。上端径は約20cm、下端16cm、深さ22cm内外を測る。

〔ピット〕 床面中央付近から南寄りに10個を数えるが、このうちP_6、P_8は埋土の観察から新しいピットで住居跡に伴ったものではない。P_9はかまど北側の袖に接っする長径80cm、深さ30cmほどで土器片の出土状況から貯蔵穴状の土壙と考えられる。

〔かまど〕 東壁南寄りに煙道を伴って検出され、煙出し部は攪乱により消滅していた。かまどの袖は左右とも残存し、地山シルトの上に褐色ないし暗褐色のシルトで構築している。なお袖の補強材として長径30cm大の川原石を芯として利用していた。燃焼部は40×80cm内外の楕円形状の浅い皿状の落ち込みとなっている。燃焼部の周辺には多量の土器片が散在し、また、底部は赤褐色を呈しよく焼けていた。煙道は東壁端からほぼ垂直に屋外に伸び全長約1 mを測る。煙道は燃焼部から緩く立ち上がり断面形はU字状となるが煙出しの落ち込みは不明である。

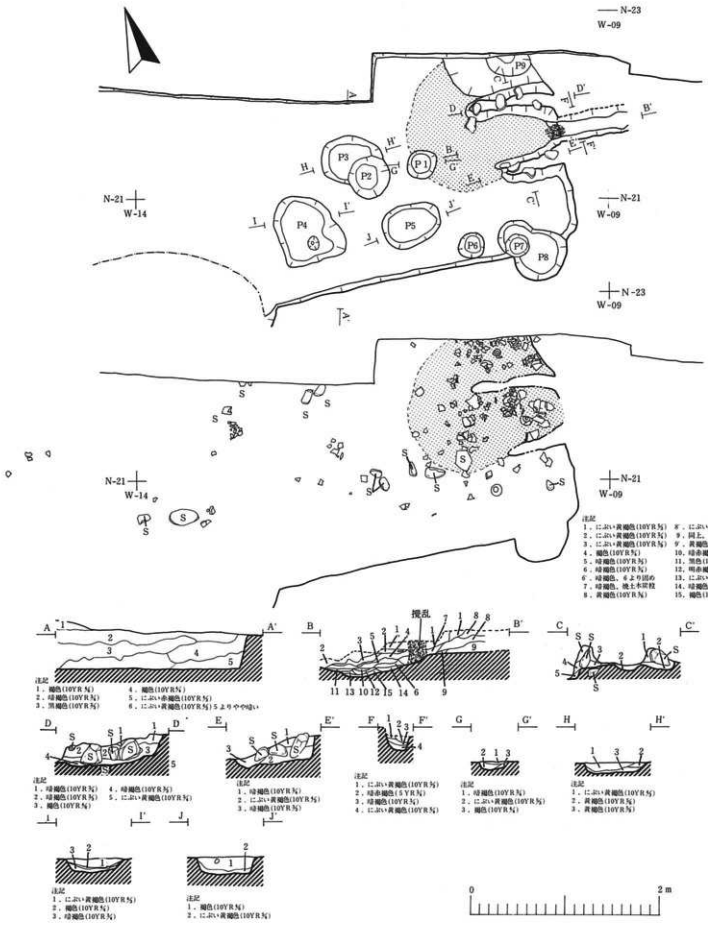
〔出土遺物〕（第30～32図・図版17）

出土遺物はかまど付近とP_9を中心に集中的に出土している。なお遺物のほとんどは床面直上及びピット内である。出土破片の類別では坏はC類、甕はA類が比較的多く、また坏、甕全体でのB類土器の出土が極めて少ない。以下実測可能土器をもとに述べる。

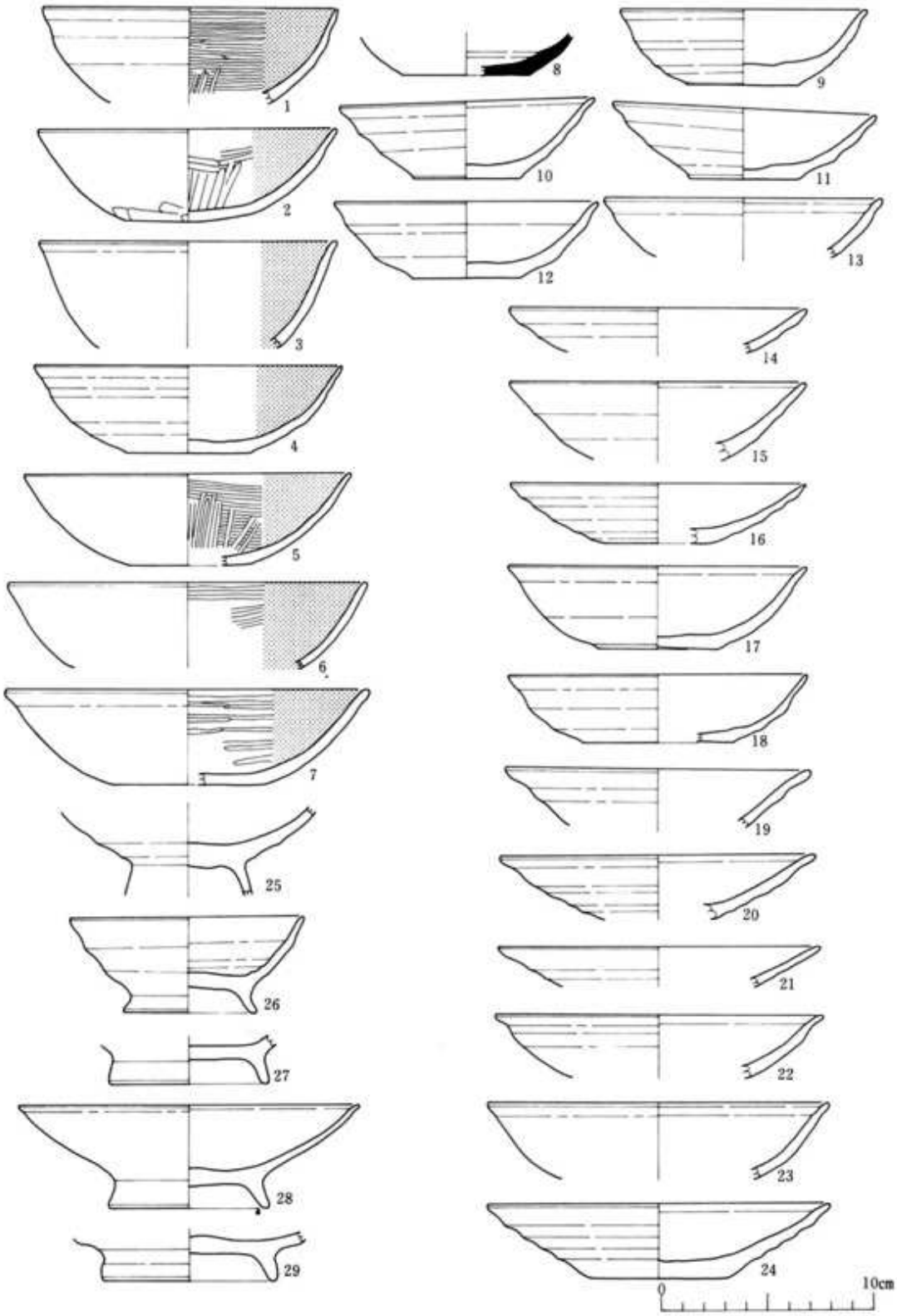
坏　A類（1～6）は総数で7個体を数えるが2個体を除き他は復元までに至らず残存部位をもとに実測した。7個体の内訳はAI類が2個、AII類が5個である。A類はロクロ成形され底部に糸切痕を残すものと、手持ちヘラケズりの二次調整のなされたものに大別される。また内面はヘラミガキ調整後黒色処理の行われているのが普通である。器形では体部がふくらみをもって立ち上がり口縁部が直線的に終るものが一般的で中には3のように心もち外反気味のものも含まれる。胎土は茶褐色から灰褐色まで巾がある。

B類、8は埋土第一層出土の底部付近の破片である。いわゆるB類の典形的なものである。成形にロクロを用い、底部は回転糸切りの切り離しで色調はくすべ色を呈している。また底部から体部にかけ2条づつの十文字状の火襷きが残る。

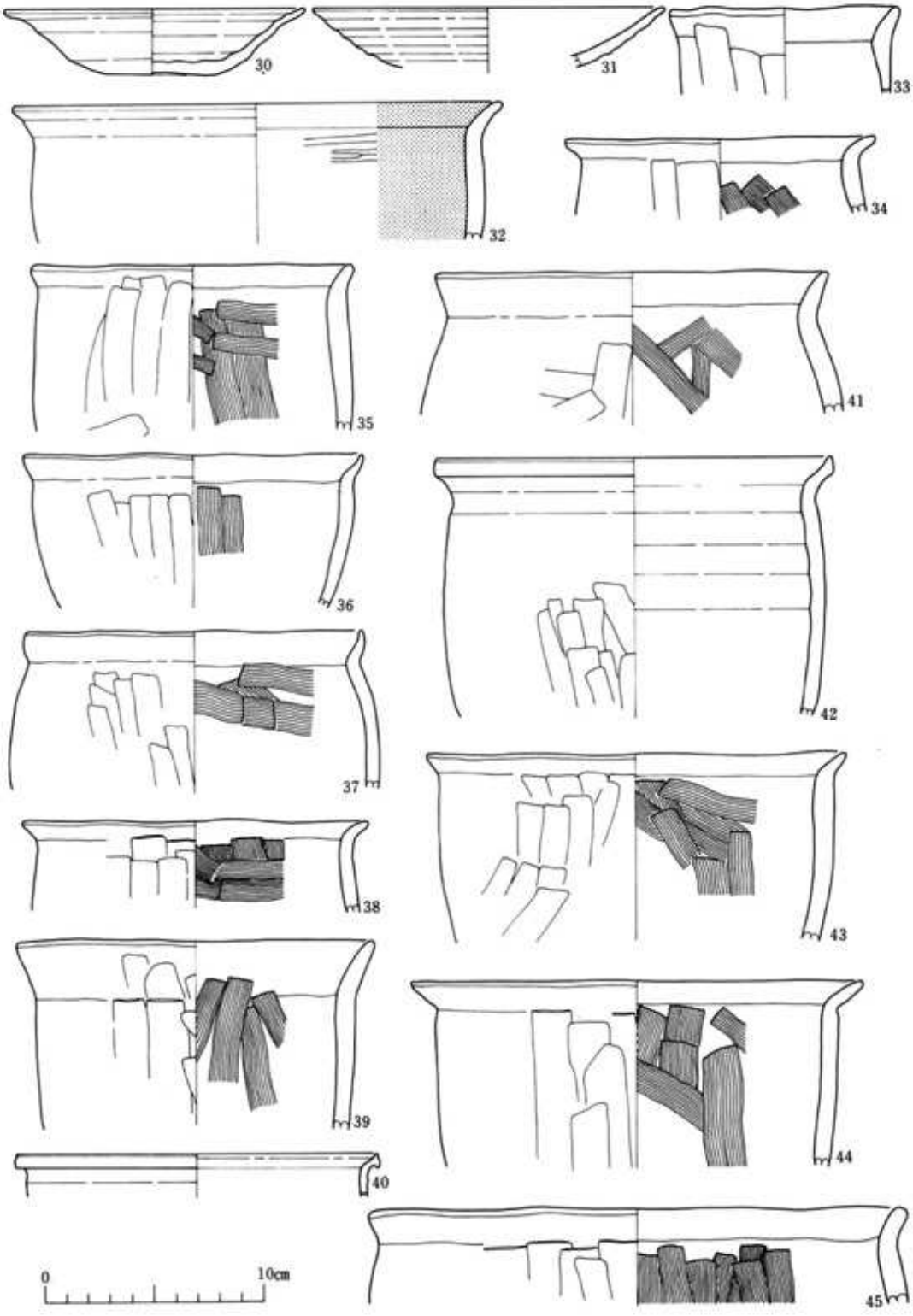
C類、9～19、21～24、30がこれに含まれいわゆる赤焼土器の一群である。本類は胎土が赤褐色乃至黄褐色を呈し、成形にロクロを用い、底部は回転糸切り無調整である。また内外面とも再調整のないのが特色とされる。9～13、17、23は器形、胎土に共通性がみられ同一工房製作の可能性が強い。30は本類の中でやゝ器形を異にするもので、体部の立ち上がりがやゝふくらみをも



第29図　AC15住居跡平断面図及び遺物出土状況図



第30図　AC 15住居跡出土土器実測図



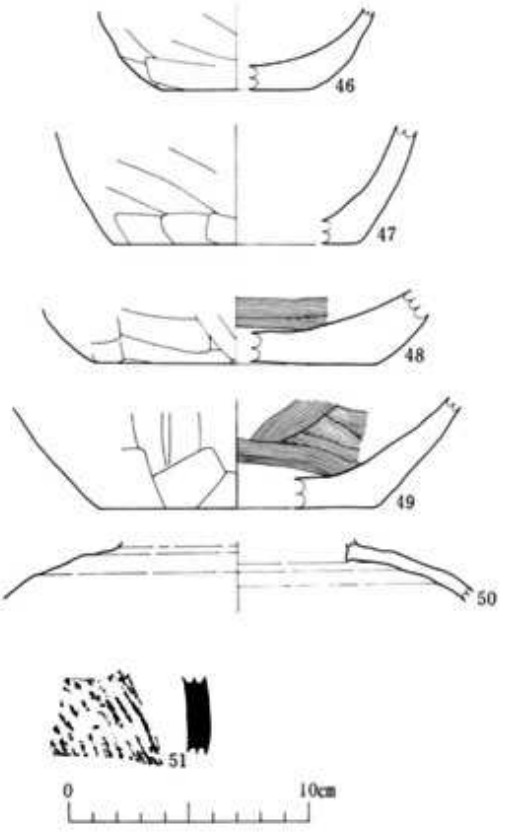
第31図　AC 15住居跡出土土器実測図

ち口縁部が大きく外反し、器高が低く皿に近い。

高台付坏

C類　12は小形の高台付坏で高台部が低く、坏部は椀形で深い、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部の外反はみられない。また内外面の調整はなく坏部の外面にロクロによる回転糸切痕を残している。24、28、31は器形に類似性がみられいずれも大形である。28は高台付坏の全容を伺える資料である。体部外面にロクロ痕の凹凸を残し、体部の形状はほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反する。

甕　甕は総数で18点出土し、うち小形甕は10点、大形甕は8点である。これらは全てA類に含まれるものである。



第32図　AC15住居跡出土土器実測図

AⅠ類　ロクロ未使用で小形甕と中形甕に大別される。33、35、39、41、43、45は口縁部が短かく外反度の緩やかな器形に特色がある。外面は縦方向の粗いケズリ調整を内面にはヘラナデまたは指ナデの調整がみられる。焼成は概して軟質で胎土には爽雑物をあまり含まない。また色調は灰褐色を呈している。34、38は口縁部の外反度が強く口唇部が丸くおさまるのを特色とする。調整、焼成は前記の一群のものに類似する。44は口縁部がやゝ長く「く」の字状に強く屈曲している。体部外面の調整は縦方向を基本とするナデ調整である。46〜49はいずれも底部破片で全て平底である。また底部付近にヘラケズリ調整の顕著にみられるのが特色となっている。

AⅡ類　40、42は成形にロクロを使用し、口縁部が「く」の字状に強く外反、さらに口唇部が上方または上下方向に挽き出されている。胴部は外面中央から底部にかけて縦方向のヘラケズリ調整がみられるが内面はロクロ痕のみである。50は本遺構で最も特徴的な土器であり、床面直上から破片で3点出土している。胎土は極めて緻密で焼成もよく堅緻である。色調は白色陶土に近似し爽雑物は含まない。破片の観察から短頸壺[注1)]と思われる。口縁部の径は10cm内外と推測され肩部の強く張ったやゝ平型の器形を呈するものと思われる。灰釉の可能性も考えられるがここでは明言を避けたい。なお窯業地は美濃の可能性が強い。

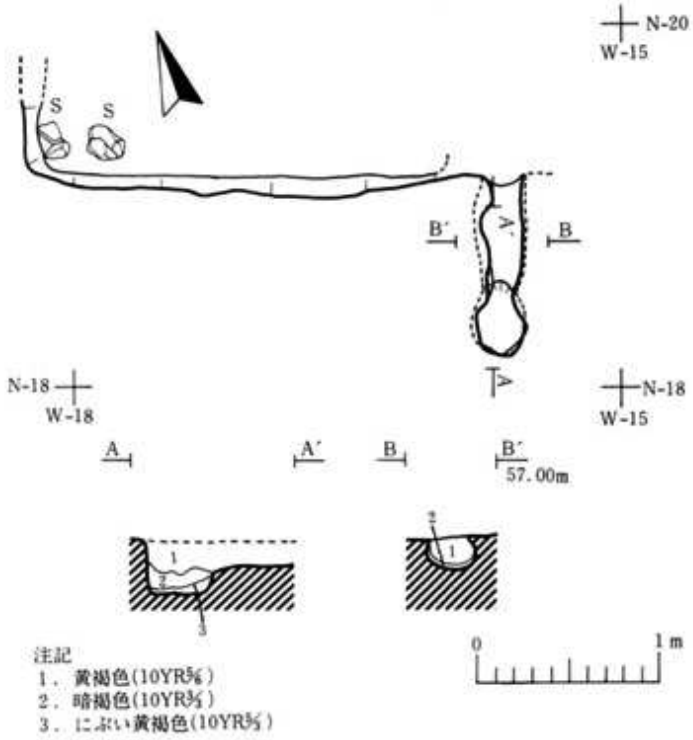
B類　いわゆる須恵器であるが大甕の胴部破片9点が出土している。51はその拓影図で外面の調整に平行叩き目がみられ、これらは夫々交錯している。内面はナデ調整が主体となっている。この他に長頸瓶の破片と思われるものも出土している。

ＡＤ21住居跡（第33図）

ＢＡ50から北18ｍ～20ｍ、西15～18ｍの範囲内で地山褐色シルト上面で検出された遺構である。

〔遺構の確認〕経塚の東側に急傾斜する石敷遺構の下層に検出されたもので、検出面は暗褐色（10ＹＲ¾）のシルト質粘土の上面である。

〔平面形〕住居跡埋没後再三にわたる攪乱を受け遺存状態は極めて悪く、煙道と西壁の一部を残すだけであった。プランは西壁コーナーの状況から隅丸方形を呈していたものと想定される。



第33図　ＡＤ21住居跡平断面図

〔壁、床面〕壁の下端は攪乱のため全容は不明であるが、一部残存する西壁で約30cm内外を計測できた。またかまど付近では20cm内外である。床面は攪乱により破壊され構築方法等は全くわからない。

〔かまど〕南側壁からほぼ垂直方向に煙道がのび、壁端からの計測で全長約1.9ｍを測る。一方かまど部分は完全に破壊され、燃焼部、袖等はその痕跡すら認められなかった。煙道は「くり抜き式」で壁端からほぼ水平にのび、煙出し部で約10cmの落ち込みが認められた。なお煙道、煙出し部の周辺で若干の焼土の散乱が認められた。

〔出土遺物〕遺物の出土はなかった。

ＡＤ12住居跡（第34図）

ＡＣ15住居跡の南東隅に接して発見された。遺構確認は地山シルト面に４個の主柱穴と焼土、木炭粒子の検出をもってした。本住居跡は壁、床面の全てを削平され、地山面に若干の焼土及び木炭粒子を遺存し且つ東側深掘セクション面に住居跡付帯の煙道の痕跡を認めるだけであった。したがってプラン、構築方法、ピット類、かまど等の検出はできなかった。

〔柱穴〕４個の柱穴の間尺は約２ｍ内外を測り、ほぼ正方形状を呈している。柱穴の断面はＵ字形でP_4の１個だけが深さ15cmと浅い。柱穴規模から本住居跡は一辺３ｍ内外の規模と推定される。

〔かまど〕住居跡の東側に深掘りをかけた際、本住居跡の煙道の一部がセクションに現われたが

その構造、規模など破壊が著しく不明である。

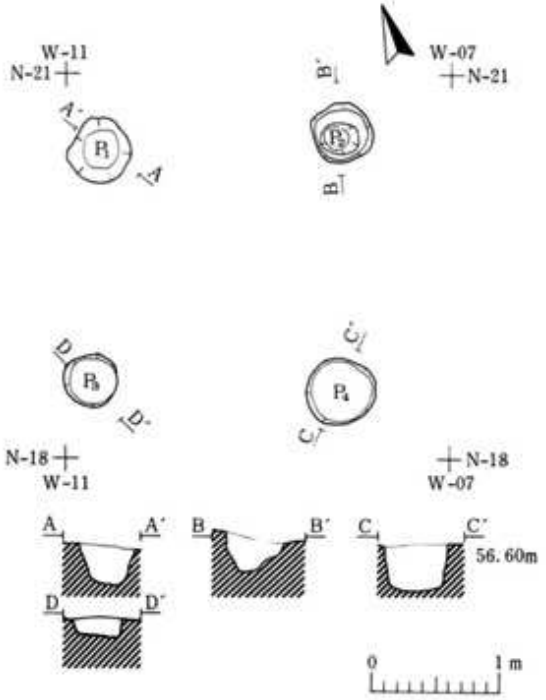
〔出土遺物〕 表土内遺物として若干の土器片を採取したが住居跡に確実に伴う遺物は発見できなかった。埋土内の遺物はおそらく攪乱、削平の時点で既に消滅したものと思われる。

ＡＥ12（Ⅱ期）住居跡（第35図・図版12）

本住居跡は、ＡＥ12(Ⅰ)期住居跡にのるものでⅠ期住の埋没がある程度進行したあと構築されたものである。

〔遺構の確認〕 遺構は周辺の小ピット群の検出中に住居跡の壁を検出し住居跡と確認した。壁の落ち込みは地山褐色シルト面に炭化物、焼土の混入物のあることをもって埋土と想定した。

〔保存状態〕 遺構周辺は中世から近現代に及ぶ大小様々のピットが掘り込まれていた。そのため、住居跡の南西隅がＡＦ15ピットに大きく抉りとられまた北東隅もP_{10}によっ攪乱を受けていた。



第34図　ＡＤ12住居跡平断面図

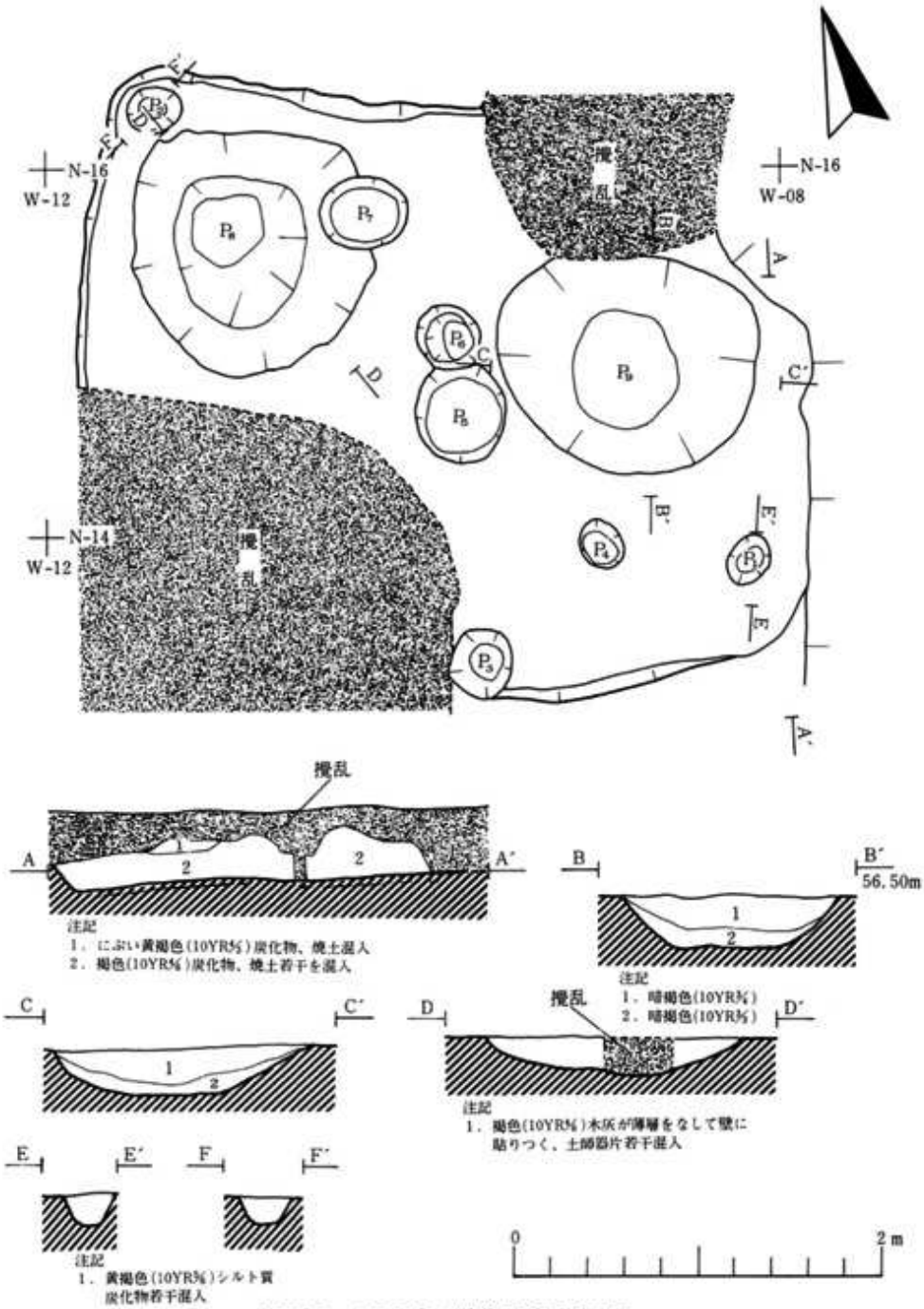
〔重複、増改築〕 ＡＥ12(Ⅰ)期住居跡の直上に構築され、ほぼ同規模とみられる。本住居跡はⅠ期住居跡の埋土上面を床面として利用したものと考えられる。なお増改築の痕跡は認められない。

〔平面形〕 平面形は隅丸長方形を呈し東西方向に長軸をもつ。残存する壁からの計測で南北 3.2 m、東西約 4 mを測る。

〔堆積土〕 埋土の上層は攪乱を受け残存層相は 2 層から成る。1 層はにぶい黄褐色土で炭化物、焼土を混入している。第 2 層は層厚20㎝内外を測り褐色（10ＹＲ⅝）シルトである。遺物は 1、2 層とも認められる。

〔壁、床面〕 北側の壁を残す、他はほとんど攪乱と削平を受けていた。残存する北側の壁高は10㎝内外を測るが壁の上面は削平されたものと思われる。床面は概ね平担で固くしまっていたが貼床と想定されるまでには至らない。

〔柱穴〕 住居跡に伴ったピット類は 4 個を数える。このうち柱穴と想定されるものはP_1とP_2の 2 個で、形状、深さとも類似している。両ピットとも埋土内に若干の炭化物を混入していた。柱穴は住居跡のコーナー付近に位置している。P_8とP_9は大形で長軸で約 1.4 mを測る。断面は浅いレンズ状を呈し、埋土はP_8は単層の褐色土でＡ類土器の破片をわずか混入していた。P_9は 2 層から構成され 1 層は暗褐色のシルト質で若干の焼土を混入し 2 層にはこれら遺物の混入がみられない。いずれもレンズ状の層相をみせ自然堆積によったものと考えられる。



第35図　AE12(II期)住居跡平断面図

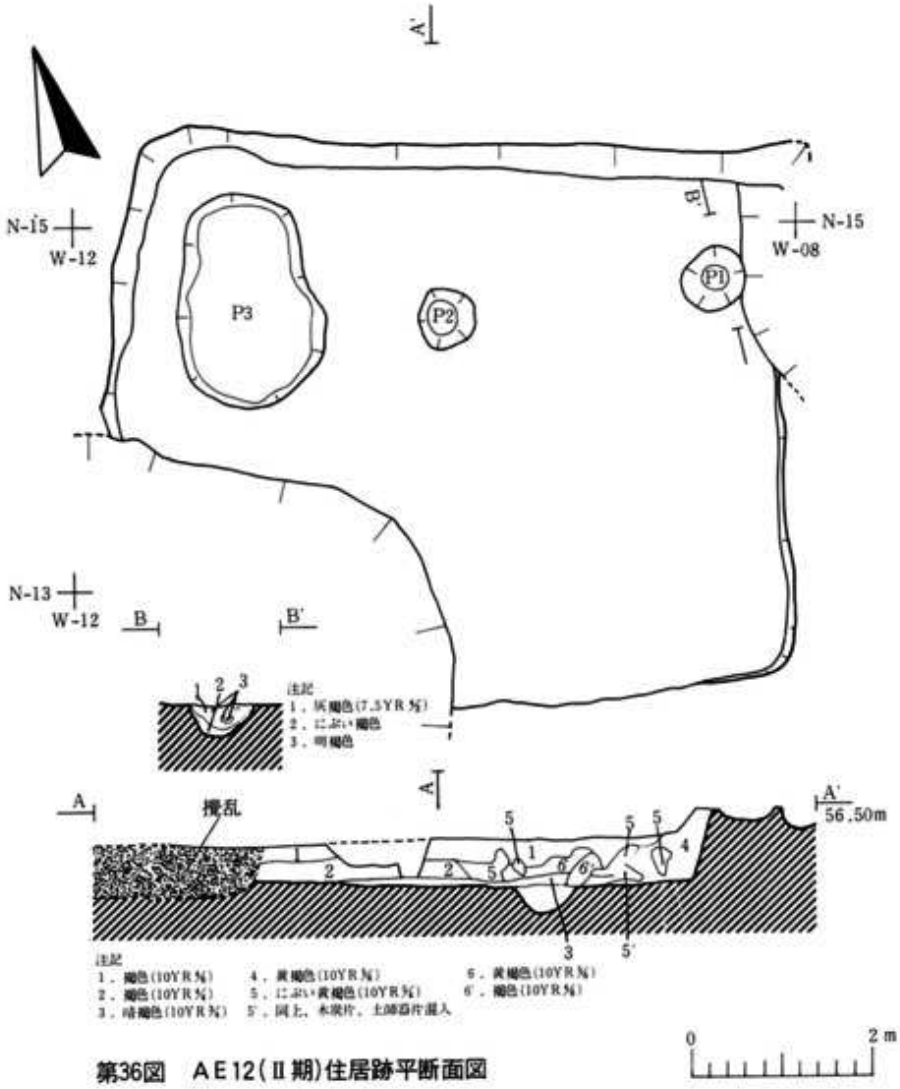
〔かまど〕床面に燃焼部、袖などの付帯施設は認められなかったが、東側の深掘セクションに焼土の塊りを検出し、煙道の一部と判断した。したがってかまどは東壁に付帯するものと想定される。

〔出土遺物〕出土遺物はＡ類土器の破片が若干出土したのみである。実測に耐えるものは見当らず全て細片だけである。

ＡＥ12(Ⅰ)期住居跡（第36図・図版11）

本住居跡はＡＥ12(Ⅱ)期住居跡の床面下、約25cmのところに検出された。

〔平面形〕南北約３ｍ、東西約3.5ｍの規模をもつ隅丸長方形プランを呈した住居跡である。



第36図　ＡＥ12(Ⅱ期)住居跡平断面図

〔**保存状態**〕住居跡の南西隅及び東壁部分にⅢ期住居跡と同じ攪乱を受け床面の約¼を消滅し、遺存状態は良好とは云えない。

〔**重複関係**〕本住居跡の埋土第1層上面にＡＥ12Ⅲ期住居跡がほぼ重なる状態で重複している。したがって埋土第1層に喰い込んでⅡ期住居のピット8、9が掘り込まれていた。

〔**堆積土**〕住居内の埋土の堆積層は基本的に4層から構成される。

1層　褐色土で層厚10cm内外を測る。

2層　1層に似るがやゝ黒味を増す。層厚も前者に類似する。

3層　床面直上にのるもので暗褐色土をベースとし、厚さ5cm内外の薄層である。

4層　壁の崩落土とみられ黄褐色シルトで壁際になだれ込んでいる。

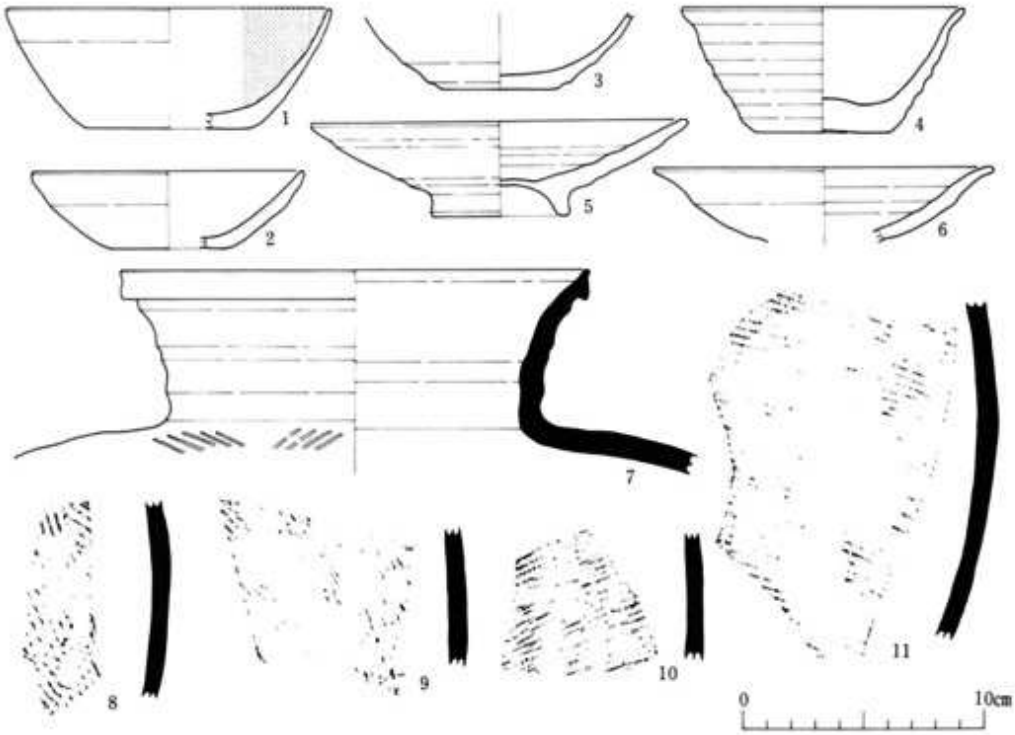
その他塊状のものが北側部分に不規則に入り込んでいる。また埋土内の混入遺物は1層に木炭粒子の混入を認め、3層、5層の2層に木炭片とＡ類土器の破片の混入があった。

〔**壁、床**〕壁は北側で約40cmを測り傾斜角は強い。他は10cm内外を残すだけである。床面は平坦である。

〔**ピット、柱穴**〕ピット3個を検出した。このうち2個は柱穴の可能性をもつが位置的に疑問を残す。また焼土遺構の下からP_3の大形ピットを検出した。しかし断面が皿状を呈し浅く、性格は不明である。

〔**かまど**〕不明

〔**焼土遺構**〕住居跡北西隅の床面上に長軸1.5m強の不定形焼土の広がりを検出した。層厚6cm



第37図　ＡＥ12(Ⅰ期)住居跡出土土器実測図

内外を測り褐色ないし赤褐色の色調をおびていた。

〔出土遺物〕（第37図）住居跡北西隅ないし南東隅方向の対角線上にA、B類の坏、高台付坏、甕、壺などの破片を出土した。遺物の総量は極めて少なく、また完形品は見当らない。

坏　1は底部から体部の一部を残存、ロクロ成形で底部の切り離しは磨滅により不明である。体部外面への調整はなく、内面はヘラミガキの後黒色処理を行っている。体部は丸みをもって立ち上がるが、口縁部の外反はみられない。2～4はCⅡa_2類に含まれるいわゆる土師質土器である。4は器厚が厚く、器形面で他と異なる。即ち、体部は直線的に立ち上がり、口縁でやゝ外反する。また体部外面にロクロ調整による凹凸が極めて顕著に残されている。5、6は、C類の高台付坏で高台部が坏部に比べ小さい。坏部は浅形で外方へ大きく開く、両者とも粗製土器で胎土、焼成に脆弱さがみられる。

甕　本遺構からA類、B類、C類の各類のものが出土した。しかし実測に耐えられるものは7の1点だけである。器種は大形の広口甕の口縁部破片である。器形は肩の強く張った土器で外面の調整は肩部付近に数条づつの平行叩き目痕が観察される。口縁部は外彎しながらわずかに外傾する。口唇部は上下方向に換き出され巾1cmほどの縁帯が一周する。内面の調整はわずかにハケ目とあて板の痕跡がみられるだけである。なお自然釉が口縁部から肩部にかかるが剥落が著しい。8～11はB類の甕の胴部付近の破片で全て平行叩き目痕だけである。

ＡＥ24住居跡（第38図・図版12）

本住居跡はＢＡ50から北へ13～14ｍ、西へ20～22ｍの範囲内に煙道の一部と壁の一部を検出したものである。検出面は現地表面から約2.0ｍほど下層の黄褐色シルト質の軽埴土である。住居跡の上層は盛土層で且つ撹乱をうけていた。盛土層の下層に撹乱による縄文土器の包含層が潜り層位の逆転現象をみせる復雑な層相を呈していた。

かまどは燃焼部の一部を残すだけで袖の発見はできなかった。燃焼部はレンズ状に掘りくぼめられ埋土は4層に分層された。2層は草木灰の薄層でその下に暗褐色のシルト質焼土が厚さ4～6cmで堆積していた。また煙道は南壁から南へほぼ垂直にのび全長約90cmを残していた。煙出し部はＡＦ24住居跡の北壁部分に重複し消滅していた。煙道は上端で25cm、下端は約10cm内外を測り燃焼部から上り勾配となっていた。

住居跡に伴う遺物は甕A類、B類の細片各1点でその他の遺物は発見できなかった。

ＡＦ21住居跡（第39図）

ＢＡ50から北へ9～14ｍ、西へ15～19ｍの範囲内に検出された住居跡で検出面は地山シルト面である。

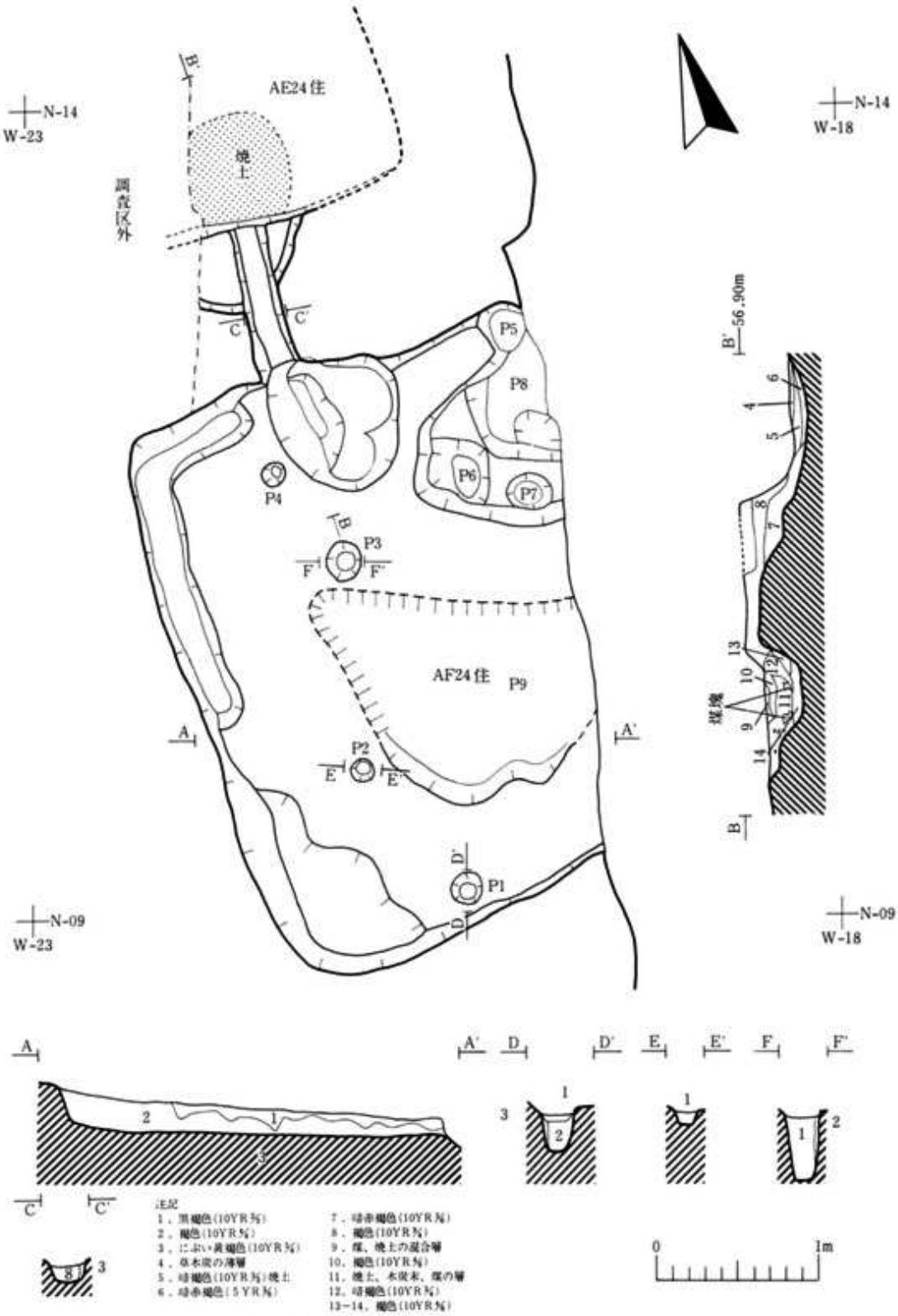
〔平面形〕南北3.8ｍ、東西3.6ｍの隅丸長方形である。西壁部分はＡＤ24南北溝に切られ原形を一部損っている。

〔重複関係〕ない。

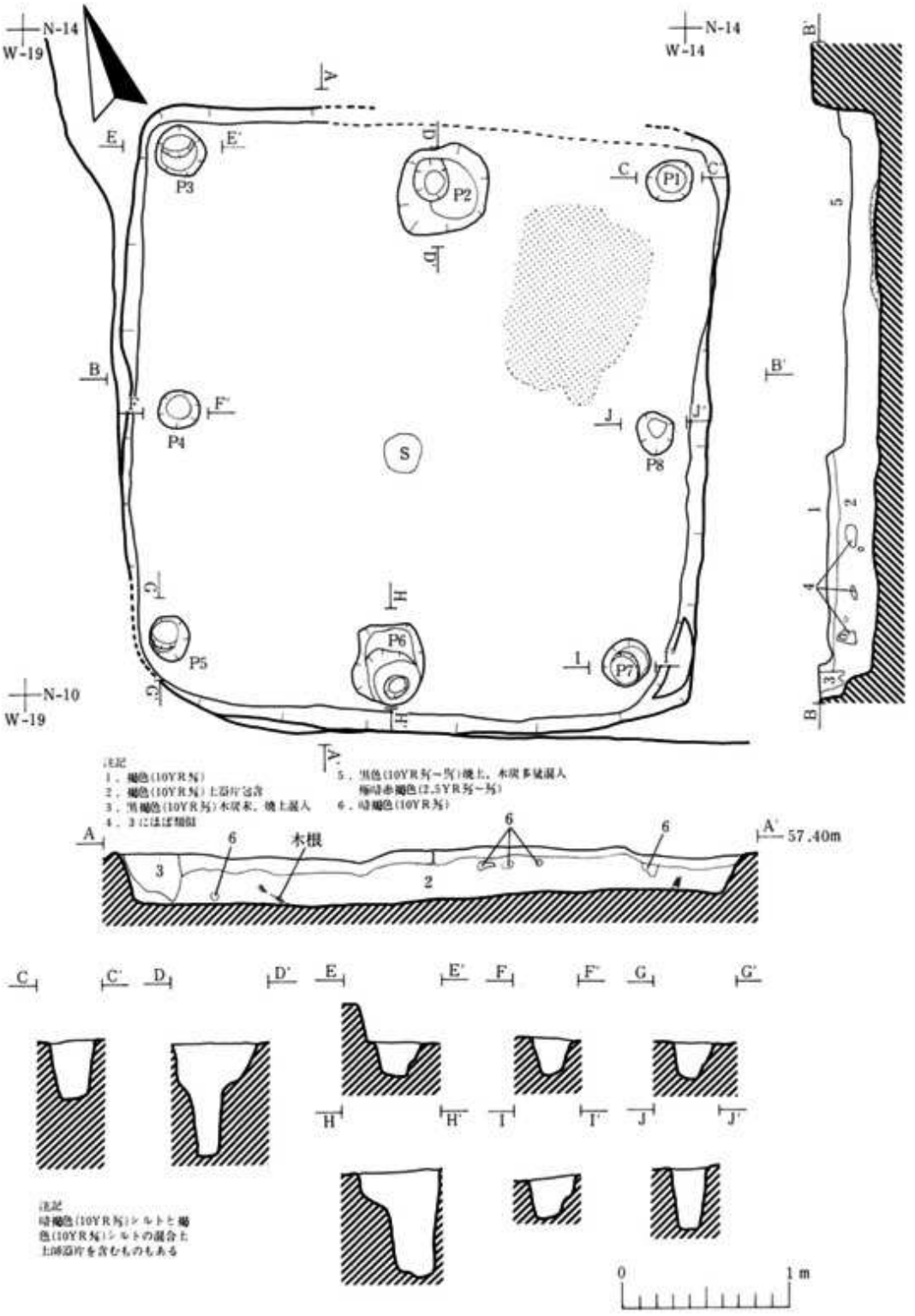
〔堆積土〕埋土の堆積は基本的に2層に分層される。

1層　褐色（10ＹＲ⅝）シルト

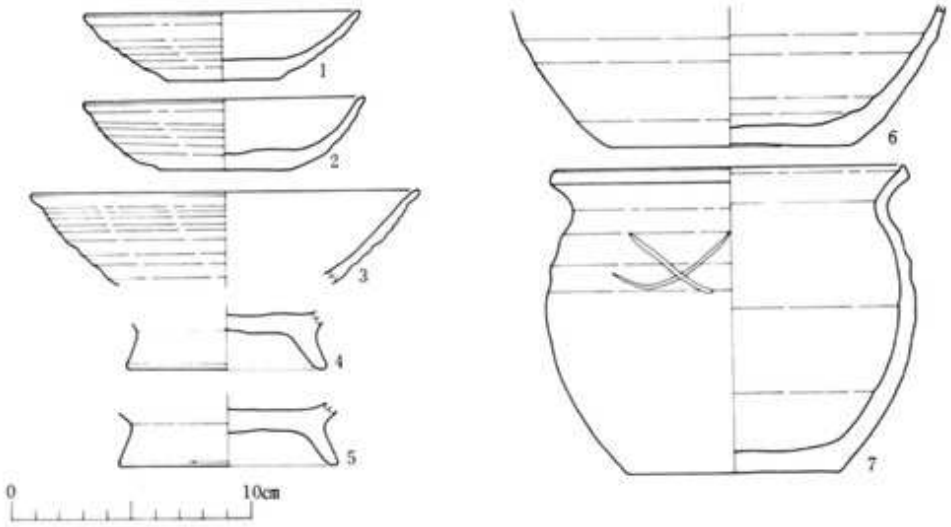
2層　褐色（10ＹＲ⅝）土で、褐色味がやゝ弱く、A、B類の土器片を少数混入する。また本



第38図　ＡＥ、ＡＦ24住居跡平断面図



第39図　AF21住居跡平断面図



第40図　AF24住居跡出土土器実測図

層中に暗褐色（10ＹＲ⅔）シルトを塊状に包含している。

〔壁、床〕残存部分での壁高は約30cm内外で特に東壁、南壁の遺存状態は良好であった。床面は北側にわずかに傾斜していた。

〔ピット〕ピットは総数で８個を検出し、いずれも柱穴と思われる。このうちP_2、P_6は棟柱とみられ、P_4、P_8は補助柱穴と推測される。P_2、P_6はいずれも掘り方をもち床面から60～70cm掘り込まれ他の柱穴に比べ深い。なお８個の柱穴を伴った遺構は本遺跡内で本遺構が唯一のものである。

〔かまど〕かまど、煙道などの付帯施設は検出できなかった。

〔埋土〕埋土は２層から構成され自然堆積の層相をみせている。第１層は褐色（10ＹＲ⅘）シルトと暗褐色（10ＹＲ⅔）シルトの斑状混合を呈し前者の混合比が高い。第２層も１層に近似するがやゝ褐色味の色調が弱い。本層中にＡ、Ｂ類土器の破片若干が混入されていた。また埋土土層中に黒褐色土、木炭末、焼土末を微量含んでいた。一方床面直上に長径約１ｍに及ぶ焼土が最大層厚４cm弱で広がっていた。

〔遺物出土状況〕住居跡のほぼ中央部から経25cm大の球形に近い川原石１個が出土した。またほぼ同位置から床面に貼りつく形で布片？が出土した。他は土器片若干の出土だけである。

ＡＦ24住居跡（第38図・図版12）

本住居跡はＢＡ50から北へ９～12ｍ、西へ19～22ｍの範囲内に検出された遺構である。東側はＡＤ24溝に切られ全体の約⅓弱が破壊されていた。

〔遺構の確認〕ＡＥ24住居跡の煙道を追跡するなかで本住居跡の北壁を検出した。

〔平面形〕南北約3.6ｍ、東西2.7ｍ内外の隅丸長方形プランを呈していた。

〔重複関係〕ＡＥ24住居跡の煙道が南に伸び、本住居跡によって煙出し部が破壊されている。

〔堆積土〕東西断面では２層からなり１層は黒褐色（10ＹＲ⅔）土で粘土粒及び木炭粒、さらに小石を混入している。２層はやゝ厚く層厚10～17cmほどである。色調は褐色（10ＹＲ¼）でＡ類

土器の破片及び縄文土器片をわずかに含んでいた。なお堆積土は西に厚く東に薄い傾向をみせている。

〔柱穴〕ピットは総数で9個を検出した。このうち1、3、7が住居跡に伴った柱穴と想定される。1と3はともに柱あたりを残し、測方に人為的な埋め土がみられる。8は埋土内に木炭末、A類土器片を混入し貯蔵穴の可能性が考えられる。他のピットについては性格は不明である。

〔壁、床〕残存する壁高は北西隅で約20cm、南壁付近で10cm内外を測り、北側ほど遺存状態は良好であった。貼床は周溝、ピット9及び南西隅の凹地部にみられ褐色シルト質土で固く叩きこまれていた。

〔周溝〕北壁のかまど左袖部分から西壁中央付近にかけて検出されたもので上端巾約30cm、下端巾約10cmを測り深さは10cm内外でやゝ浅い。

〔かまど、煙道〕検出はできなかった。

〔遺物の出土状況〕（第40図）

遺物は埋土第2層の褐色（10YR⅘）土にA類土器片、縄文土器の細片などを包含していた。また床面直上からAIc類の坏破片と甕A類、壺B類の出土がみられた。これらの遺物は住居跡西壁に偏在し、中央部から東側部分には程んどみられない。以下第40図の実測図をもとに記述する。

坏　1～3はC類のものでいずれもロクロ成形により内外面の調整のないものである。3は底部を欠損しているが高台付の可能性も伺える。4～5は高台付坏の高台部で脚部が「ハ」の字状に開脚し、高台の低い共通性をみせている。

甕　6、7いずれも小形甕で6は底部から体部下半部を残存する。7は全体の約⅓強を欠損する。両者は胎土、焼成、器形等に類似性があり同一時期に製作されたものと思われる。成形は巻き上げ技法によるが、口縁部付近ではロクロを使用している。最大径を胴部中央付近にもち、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が上方に換き出されている。胎土は径1～2mmの細砂を多量に含んでいる。また内外面に煮汁状のカーボンを多く付着している。7は肩部付近に長さ5cmほどのヘラ書きで×印が印されていた。なお底部は平底であり内外面への調整痕はほとんどみられない。

AG18（Ⅱ期）住居跡（第41図・図版12）

本住居跡はAG18（Ⅰ期）住居跡にのり、床面はⅠ期住居跡の埋土を利用していた。住居跡の上面は削平と攪乱を受け破壊が著しく遺存状態は良好と云えない。また西壁の約⅓はAD24溝に切られ東側はピット47、48、49に夫々切られていた。

〔平面形〕南北長は5.1mを測るが東西は測定不能であった。コーナーの形状は全て遺存せずやはり不明である。南北長からの推測で比較的大形の住居跡と考えられる。

〔重複関係〕AG18（Ⅰ期）住居跡の直上に構築され（Ⅰ期）住居跡の西壁を拡張している。さらに埋土の観察をもってすると。AG18（Ⅰ期）住居跡の2層直上を本住居跡の床面としている。

〔堆積土〕大きく2層からなり、第1層は厚さ5cm内外と薄く、2層は15cm内外である。1層は暗褐色土が主体で大小の礫、焼土、木炭末、土器片（A類、B類、縄文土器）及びチップを包含、2層は、暗褐色で粒子が一般に細かく、やゝ粘性にとんでいる。埋土内には炭、焼土末、A

類土器片などを多量に混入していた。

〔壁、床面〕 残存する壁は南北のみで両者とも上部は削平され10cm弱を残すだけであった。壁の立ち立がりは約50°で緩やかである。床面は西に高く、東に低い自然地形に沿い、わずかな傾きをみせている。なお東西での比高差は10cm内外を測る。

〔柱穴〕 床面上に5個のピットを検出、うち2～5が主柱穴である。埋土は3層に分層され、自然堆積の層相をみせる。5は貯蔵穴様のピットと想定される。共伴遺物にA類土器の破片若干があり、埋土内には焼土、木炭の粒子を混入していた。

〔かまど〕 かまど、煙道などの検出はできなかった。ただ床面中央部に不定形の焼土、木炭末の広がり4ケ所を検出した。

〔遺物出土状況〕 遺物は土器片が主体で他に若干の石器片がみられた。土器片はA類、B類、C類全てを網羅し器種は坏類、甕類、壺類、皿など割合多岐にわたっている。

〔出土遺物〕（第42図・図版19）遺物は埋土第2層内に多く包含されていたが、床面直上からも多数の出土をみた。

坏　1～4はCⅠ類でいわゆる須恵系の土器である。これらは焼成がよく硬質である。製作にロクロを用い、底部は回転糸切り手法による。器内外面の調整、黒色処理などは一切認められない。胎土は黄白色を呈している。なお器形上に特色があり、底部付近が内彎気味に立ち上がり体部中央辺で外彎に転じ大きく外傾、口縁部で再度外反する。したがって体部下半に丸味をおびたふくらみが本土器を特徴づけている。

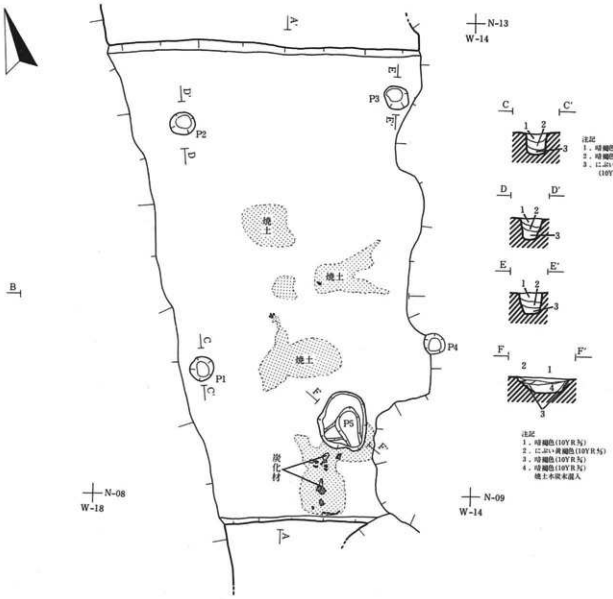
甕　全てA類土器である。16だけが巻き上げ技法によるロクロ未使用のものである。他はいずれも口縁部に共通性がみられ、体部から口縁部へゆるやかに「く」の字状に外反し、また口縁部が極端に短かい。調整は外面に縦または斜方向の粗いヘラケズリがみられ、内面はナデが一般的で、底部は平底である。胎土、焼成は良好とは云えず砂質に富んでいる。12は形態に特色があり、胴部から口縁部が屈曲をみせ逆「ハ」の字状にかつ直線的に外傾する。また肩部付近に巻き上げの痕跡が残る。焼成は還元焔とみられ灰白色で軟質である。16は成形にロクロを用い、底部に回転糸切り痕を残している。なお胴部全面にロクロ回転による凹凸が顕著にみられる。18～21はBⅡ類に含まれる甕の拓影図である。20を除いた他はいずれも平行叩き目かそれの交叉したものであり20は格子目の叩きで成形している。以上4点は甕の胴部破片と思われる。

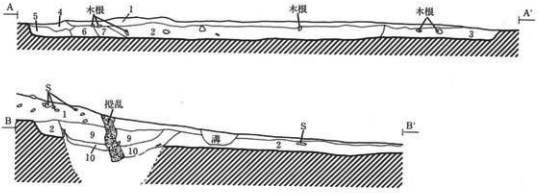
AG18（Ⅰ期）住居跡（第43図・図版12）

本住居跡はAF21住居跡の南壁に接っして検出された遺構で検出面は第2層シルト質粘土の上面である。

〔平面形〕 東西3.8m、南北4.5mの隅丸長方形プランである。西壁の南半分はAD24溝に切られ、南東コーナー付近はピット48、49によって切られている。

〔堆積土〕 最上層はAG18（Ⅱ期）住居跡の構築の際に除去され堆積土は約½を残すだけである。残存する堆積土は2層に分層され上層は暗褐色（10YR⅔）で焼土粒、炭、土器片を混入、下層は黒褐色（10YR⅔）で炭、土器片を包含していた。下層内にレンズ状の木炭の薄層が検出されている。堆積は層相の観察から自然堆積と考えられる。

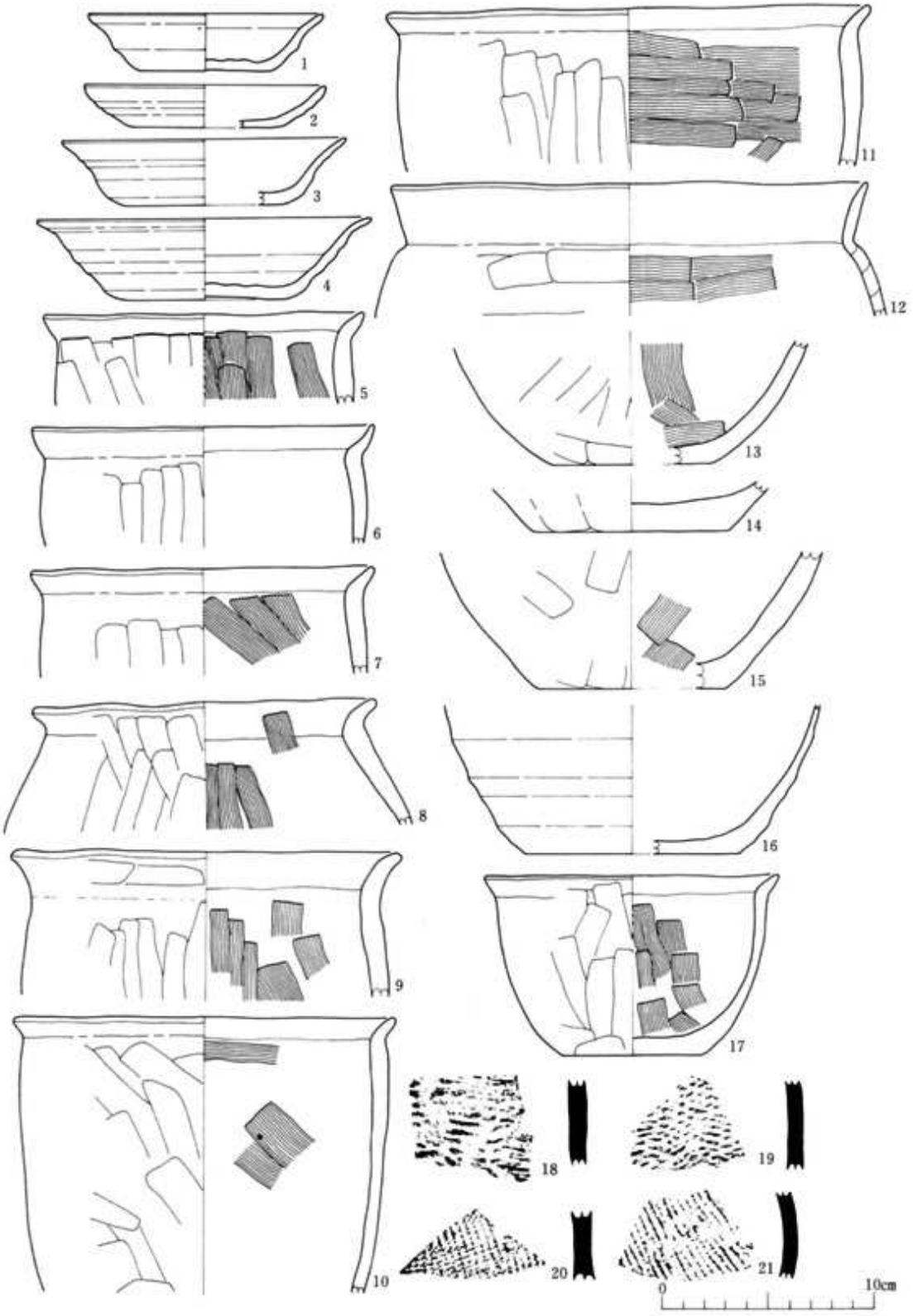




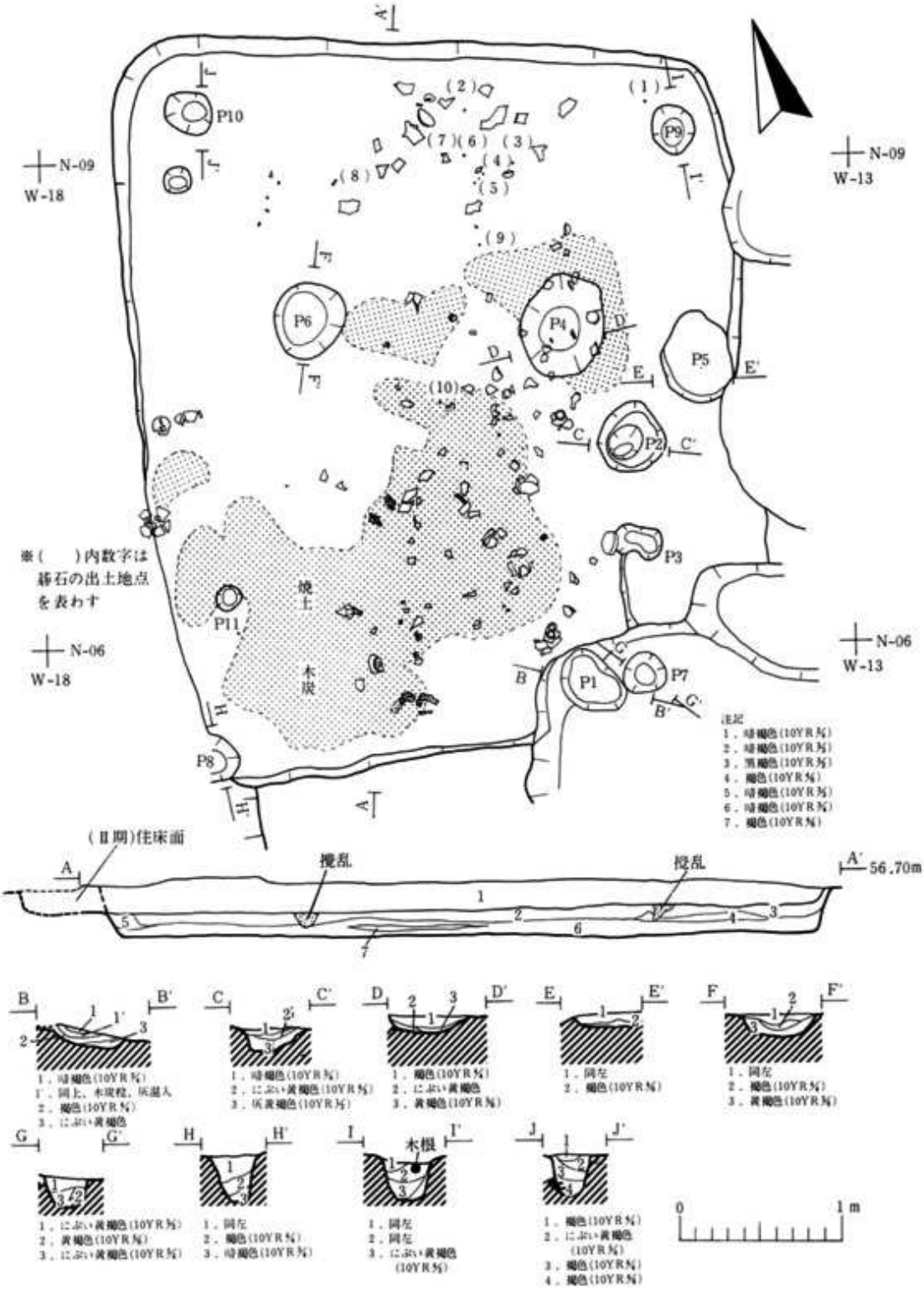
注記
1．暗褐色(10YR 3/4) 大小の礫混入。焼土粒、本炭末混入。土器(縄文、土師、須恵)片、石器片混入
2．暗褐色(10YR 3/4)層。焼土粒は1層よりやや多く土師器片多量に混入
3．暗褐色(10YR 3/4)焼土、本炭末若干混入。土器片、小礫混入
4．暗色(10YR 3/4)粒子細かく、本炭末混入
5．にぶい黄褐色(10YR 5/4)本炭末混入
6．暗褐色(10YR 3/4)焼土、本炭末多量に混入
7．にぶい黄褐色(10YR 5/4)酸化鉄の斑模様が入る
8．黒褐色(10YR 3/4) 粒子細く粘性に乏しい、土器片、炭混入
9．暗褐色(10YR 3/4)小礫、土器片混入
10．暗褐色(10YR 3/4)焼土多く点在、土器片本炭末を混入

0 2m

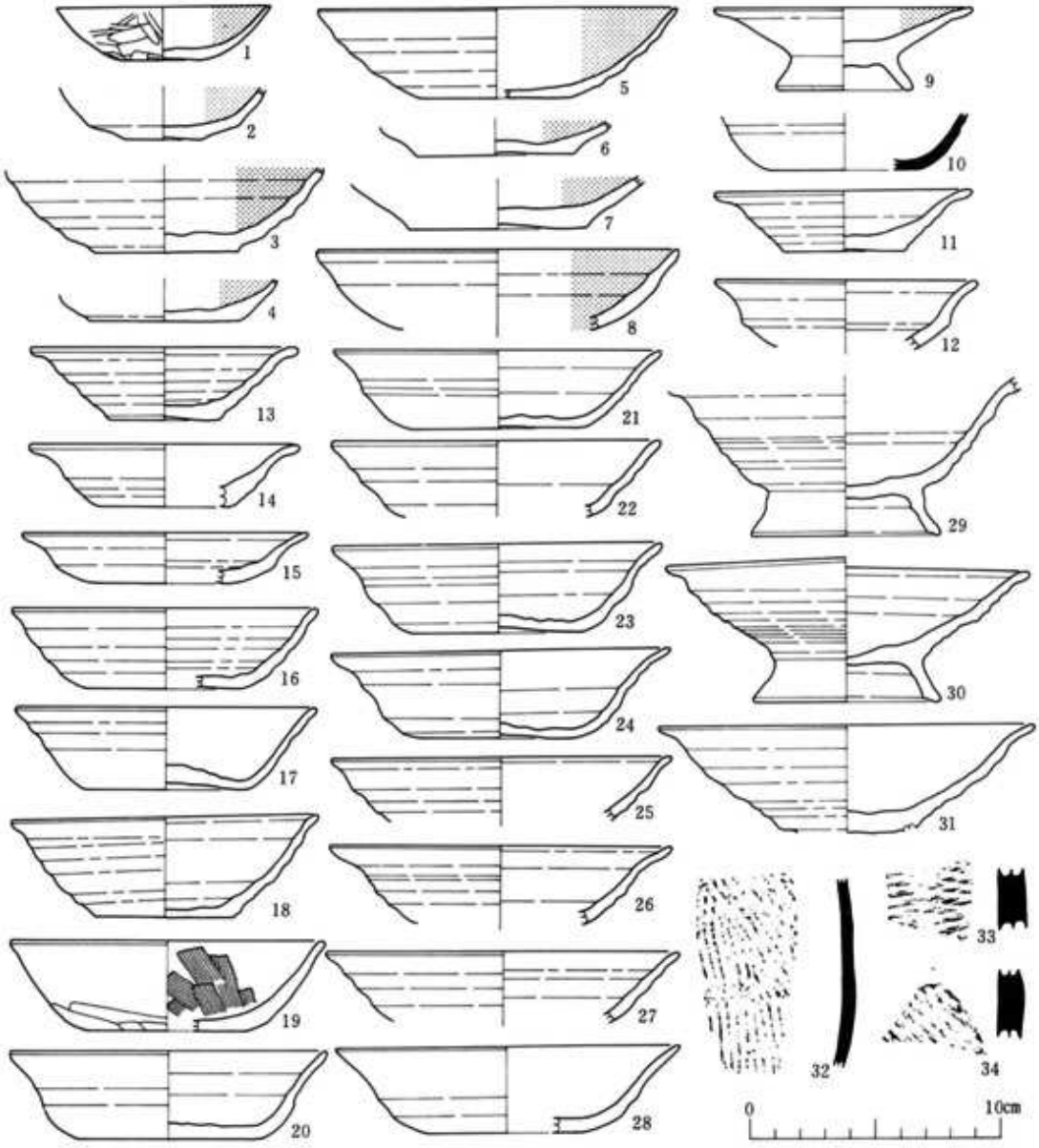
第41図　AG18(Ⅱ期)住居跡平断面図



第42図　AG18(II期)住居跡出土土器実測図)



第43図　AG18(Ⅰ期)住居跡平断面図



第44図　ＡＧ18(Ⅰ期)住居跡出土土器実測図

〔重複関係〕本住居跡の埋没直後にＡＧ18（Ⅱ期）住居跡が重なる形で構築されている。したがって（Ⅰ期）の埋土中間層が（Ⅱ期）の床面として利用されている。

〔壁、床面〕壁の立ち上がりは25cm内外を測るが、一般に削平と撹乱により遺存状態は良好とは云えない。一方傾斜角は70°前後の傾きとなっている。

〔柱穴〕ピットは総数で12個を数える。このうち柱穴と想定されるものは７～10の４個であり、いずれも埋土内に木炭末、焼土粒を混入している。断面形は「Ｕ」字形をみせ、７を除く他は25

cm内外の深さをもっている。

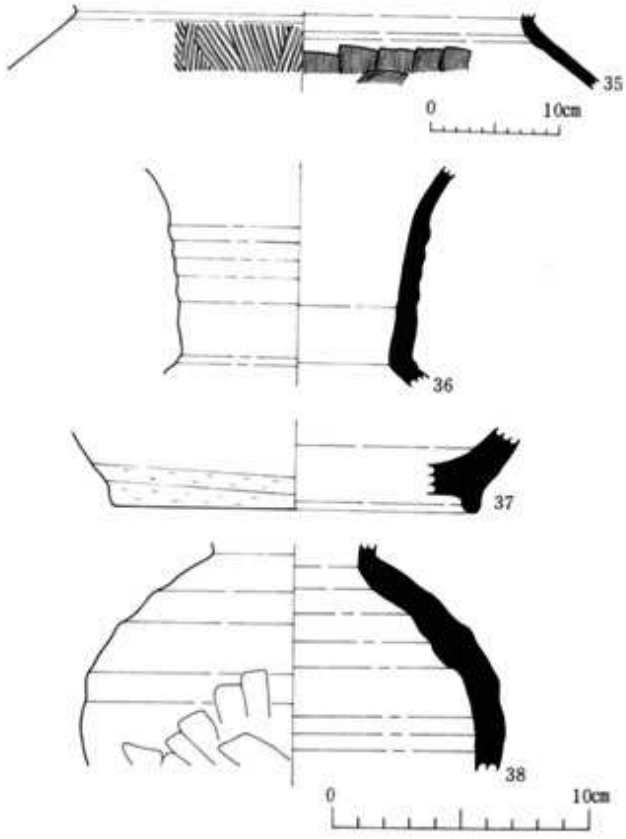
〔焼土〕床面の中央付近に不定形状に焼土及び木炭粒の広がりがみられた。また床面の南側半分に炭化材の散乱があった。

〔遺物出土状況〕遺物は土器類と石製品に分けられる。土器類は坏類と甕類でそのほとんどは床面直上からの出土である。また石製品は碁石で床面に貼りつく形で10個の出土をみた。

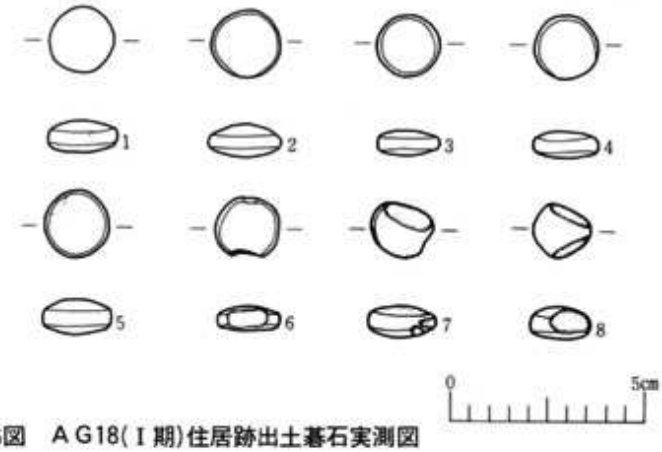
〔出土遺物〕（第44～46図・図版18）

土器

坏　1～9はA類でいずれも成形にロクロを使用している。1は外面底部及び体部全面にヘラケズリの調整がみられその後ヘラミガキを行い内黒処理をした小形皿状の坏である。2～8は器形に若干のバラつきがあるが底部は回転糸切りで無調整、内面ヘラミガキ後内黒処理を行っている。口縁部は外反せず直線状に終熄する傾向をみせている。9は小形の高台付坏で坏部の形態は浅く皿状を呈している。体部の⅔を欠損し全面に二次加熱を受け内面の黒色処理が部分的に剥落している。また高台の内側にロクロの回転痕が残されている。B類では10の1点だけが実測に耐えられたもので他は小片だけである。底部の切り離し技法は回転糸切り手法により無調整で体部の立ち上がりはふくらみをもつが口縁部欠損のためその全容は不明である。なお胎土、焼成とも極めて良好で色調はくすべ色を呈している。C類、本遺構の大半はこの類に属し、大きく、CⅠ類とCⅡ類の二群に分けられる。CⅠ類は硬質でいわゆる須恵系土器の範疇に含まれるものであり、CⅡ類は褐色の色調を呈し焼きがあまく軟質の



第45図　AG18(Ⅰ期)住居跡出土土器実測図



第46図　AG18(Ⅰ期)住居跡出土碁石実測図

第3表　AG18（Ⅰ期）住居跡出土碁石計測表

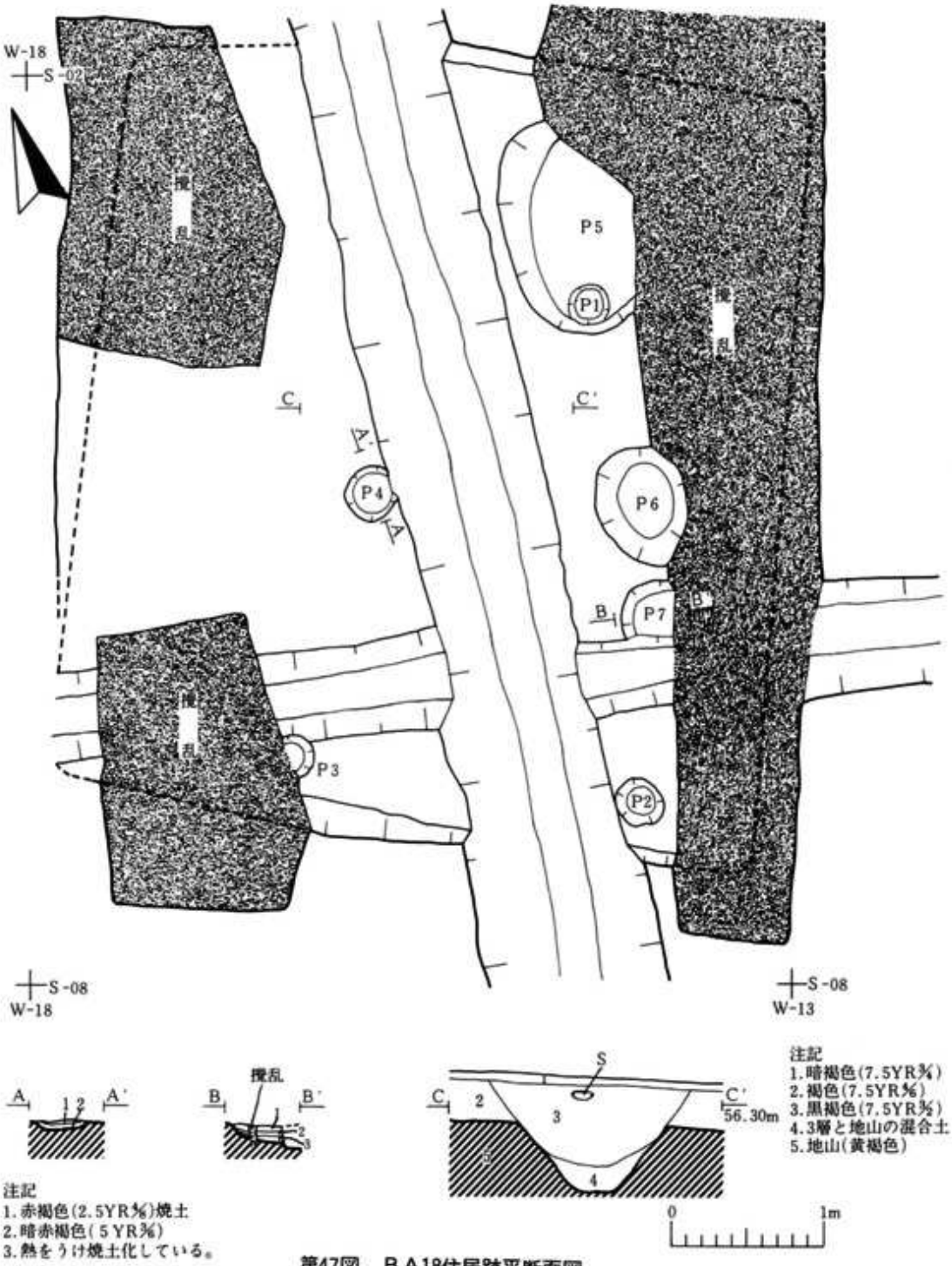
	直　径（cm）	厚　さ（cm）	重　さ（g）	色　調	付　記	材　質
1	1.6	0.8	3.1	白	完　形	石　英
2	1.6	0.8	3.5	黒	完　形	流紋岩
3	1.6	0.6	2.4	黒	完　形	〃
4	1.6	0.7	2.8	黒	完　形	〃
5	1.7	0.8	3.6	黒	完　形	〃
6	1.6	0.7	2.2	黒	一部欠損	〃
7	1.5	0.8	2.3	白	一部欠損	石　英
8	1.5	0.8	2.3	白	一部欠損	〃
9	1.7	0.7	1.5	黒	一部欠損	流紋岩
10	1.6	0.8	1.0	白	一部欠損	石　英

土師質土器である。

CⅠ類　12、15～17、20～26、28の土器でいずれもロクロ成形により底部は回転糸切りの切り離しである。このうちCIa₁類に属すものは本遺構の特徴的な坏と思われる。一般に口径対底径で底径比の大きなものである。また底部は平べったく、体部の立ち上がりは、底部から極端にふくらみ内彎気味に外傾し、体部中央辺で外彎に転じて外傾する。また口縁部が強く外反し直線的に終熄するものと強く外反するものの二形態がある。器面は須恵器に類似し色調は黄白色もしくは薄い灰色を呈している。

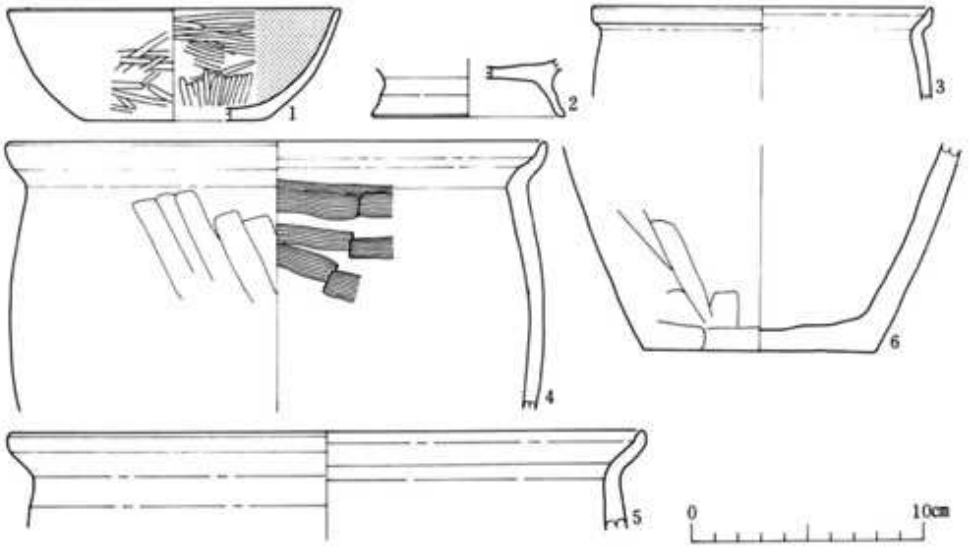
CⅡ類は坏と高台付坏で、29～31以外は全て坏である。11、13、14は皿状の坏で他に比べ容量が極端に小さく、また器形では体部の外反度が強い。口縁部はいずれも強く外反し口唇部は肥厚している。18は体部がややふくらみをもち口縁部が外反する。体部にはロクロ痕が明瞭に残り、底部内面に渦状の隆起がみられる。胎土はやゝ硬質で褐色、内外面に部分的なカーボンの付着がみられる。19は軟質の坏で体部の立ち上がりがほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反をみせる。底部の切り離し技法は二次調整のため不明で切り離し後底部全面にヘラケズリ調整がみられ、それは周辺部にまでも及んでいる。内面調整はヘラ状工具によるナデである。胎土は夾雑物を含まず精良である。口縁部周辺は一般に赤褐色を呈し酸化焔焼成を示す。27は口縁部付近の破片を図上復元したもので胎土、焼成とも前者に類似する。29～31はいずれも高台付坏で同一工房内における製品と思われる。坏の体部はわずかにふくらみをもって外傾し、口唇部が肥厚する。高台は貼り付けによるもので、坏外底面に回転糸切り痕を残している。坏は体部内外面ともロクロ痕が顕著で、器形には歪みがみられる。31は高台部欠損後、接合面の凹凸をけずり坏として二次的利用をはかったものと思われる。

甕　実測可能のものはB類とC類のみで35はBⅡ類広口甕の肩部付近である。外面は平行叩き目による調整が全面にわたってみられる。自然釉が巾0.5～0.8cmで肩部を一周しているがそのほとんどが剥落し茶褐色の痕跡だけを残している。36は長頸瓶の頸部付近の破片を図上復元したものである。内外面ともロクロ痕だけで調整はみられない。胎土は堅緻で色調は灰色を呈している。37は壺の底部破片である。1cm弱の高台付で成形にロクロを用い、底部内面に指またはヘラ状工



第47図　ＢＡ18住居跡平断面図

具によるナデが認められる。胎土、焼成とも良好である。38はＣ類に属す長頸瓶であろう。頸部と底部を欠損している。残存する形態から頸部はかなり細長い形状を呈しているものと思われる。胴部は球状に近く最大径を中央部にもつ、外面調整は斜方向のヘラケズリである。色調は白色に近く胎土は極めて密である。32～34はＢ類の大形甕の胴部拓影図である。外面に平行叩き目と格



第48図　ＢＡ18住居跡出土土器実測図

子目状叩き目がみられる。

石製品（第46図・図版22・第３表）

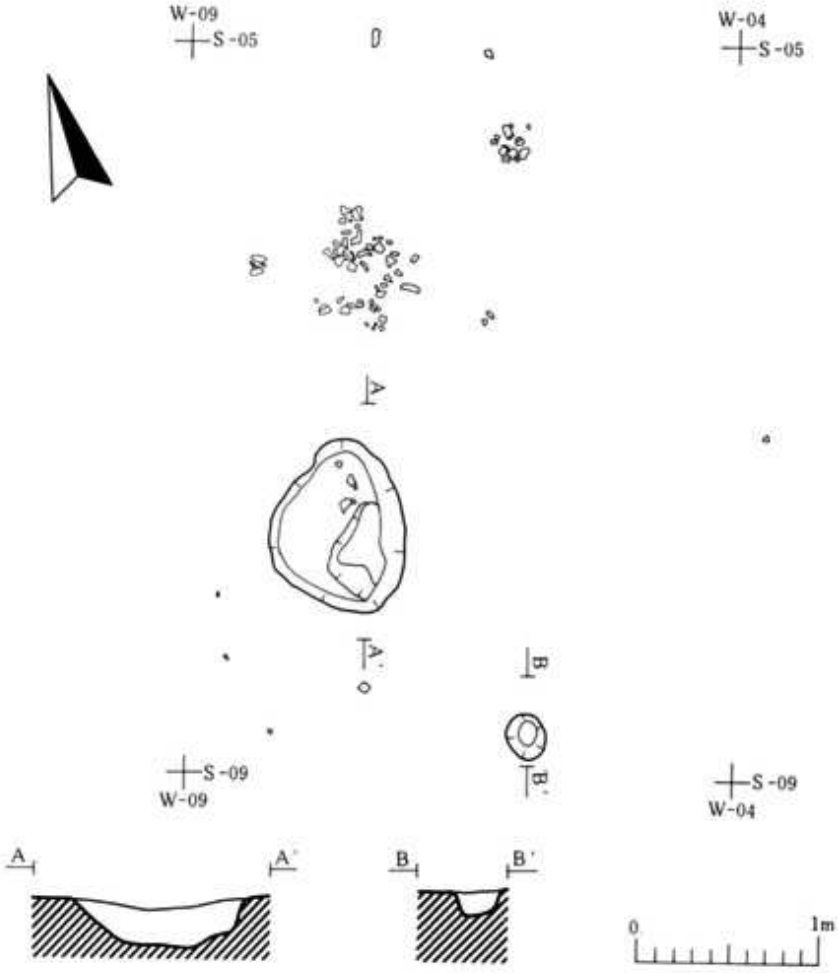
碁石、住居跡の床面に貼りついて出土したもので白石４個、黒石６個の計10個である。これらは床面の北東コーナー付近に１個、南北中軸線の北側部分に８個、中央部に１個の割合で発見されている。なお、床面上には炭化材、木炭粒等が薄く散乱していた。碁石の完形品は白１個、黒４個の５個で他は一部欠損か、⅓程度の欠損品である。１、７、８は白で２～６は黒の碁石である。なお碁石の材質については岩手大学工学部金属資源学科、村井貞允教授により白石のものは石英、黒石のものは流紋岩という鑑定結果を得た。なお県内での流紋岩産出地域は花巻温泉付近と和賀町土畑鉱山付近という教示も併せて得られた。

第49図　ＢＡ18住居跡出土砥石実測図

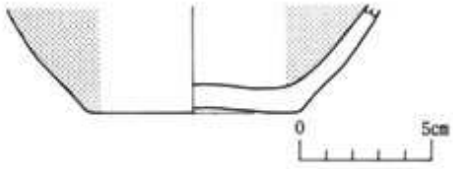
なお夫々の計測数値は第１表に示したとおりである。

ＢＡ18住居跡（第47図）

ＢＡ50から南へ２～８ｍ、西12～18ｍの範囲内に検出した。遺構の検出は50年度調査の際に試掘を行いその結果上層より縄文土器片、Ａ類、Ｂ類土器片及び焼土等を出土した。以上の出土状態から攪乱土層の下部に住居跡の遺存を想定し次年度の調査に委ねた。本遺構はかって住宅等の建造物をのせていたため攪乱による破壊が著しく検出は慎重に行った。しかし遺構の大半は破壊され残存する部分をもって形状、規模を推測せざるを得なかった。



第50図　ＢＣ06住居跡平断面図



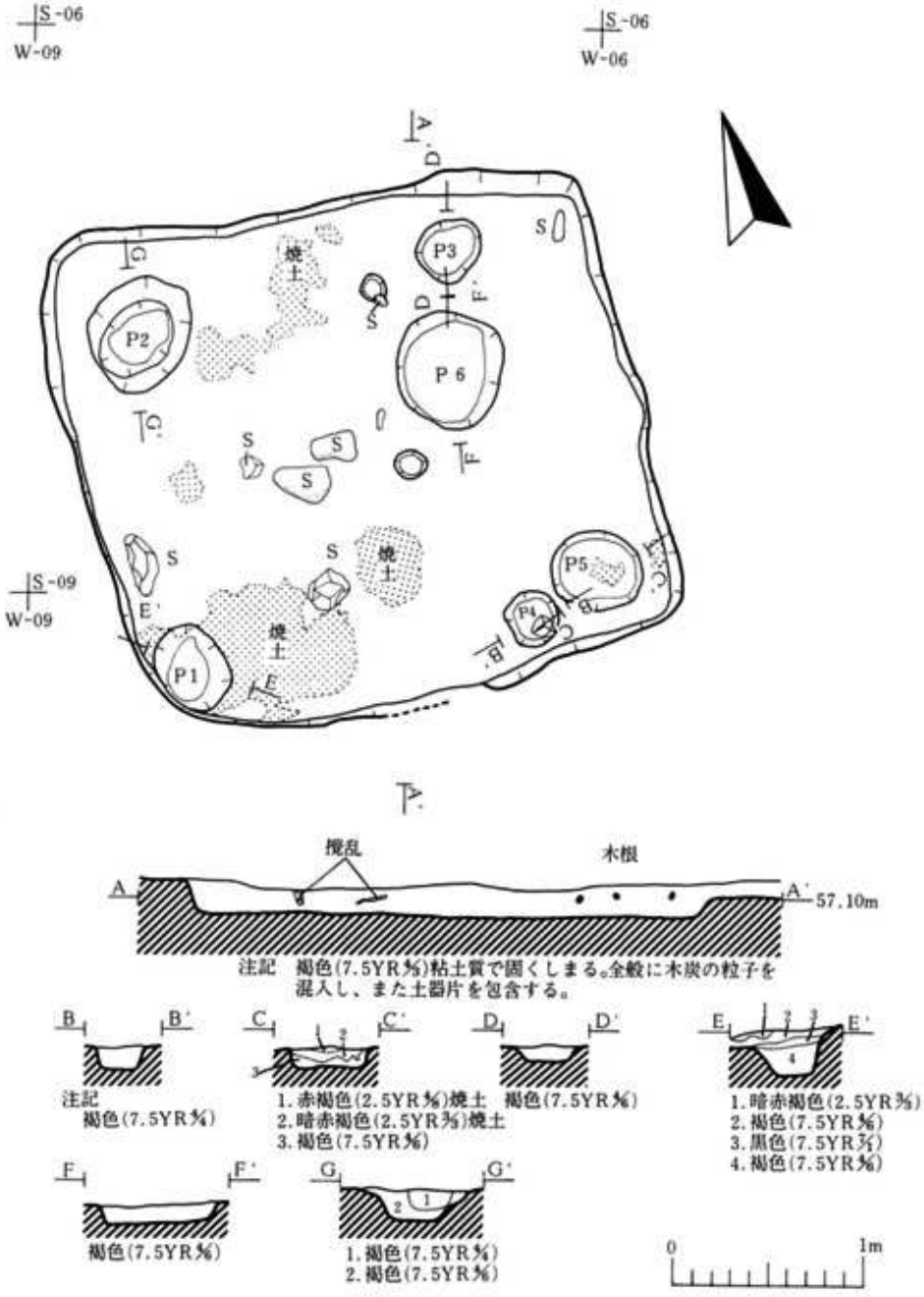
第51図　ＢＣ06住居跡出土土器実測図

〔平面形〕住居跡の中心部分を南北にＡＤ24溝が切り、さらに東西方向にＢＢ18溝が、また東側部分を試掘で切られ正確なプランの想定が著しく阻害された。わずかに遺存する北壁と南壁の一部をもって、ほぼ隅丸長方形プランの住居跡と想定した。南北長5.2ｍ、東西長（推計）約4.5ｍを測り、やゝ大形の住居跡と云える。

〔壁、床面〕残存する壁高は北側で約20cm、南側で23cmを測る。床面はほぼ平坦で東に若干の傾斜が認められ、東西の比高は5～6cmほどとなっている。なお、ピット6、7の付近に焼土の広がりを検出した。

〔ピット〕ピットは総数で7個を検出した。このうち柱穴は1～3の3個で、いずれも深さ25cm～30cmほどである。1は北壁から約1.5ｍほど内側に位置し、2と3は南の壁際に位置している。

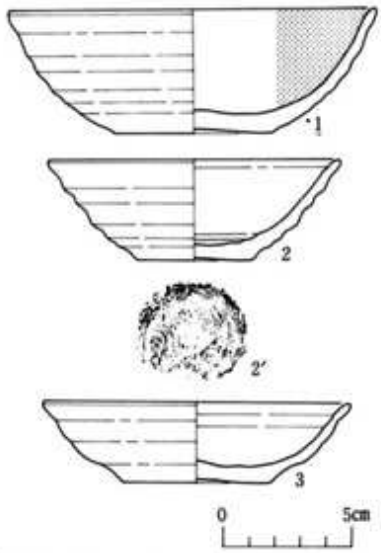
ピット6は形状、位置関係から推し貯蔵穴の可能性が考えられる。ピット7は約¾を欠失しているが残存する土層から「かまど」の燃焼部と想定される。床面からの深さ約6cmを測り埋土は3層に分層される。1層は焼土化し、2層は暗赤褐色を呈し加熱によるものと思われる。なお前年度の試掘時において東壁部分の断面に煙道の一部とみられる焼土層を検出している。しかしそれ以外の遺構の存在は発見できなかった。



第52図　ＢＣ09住居跡平断面図

〔出土遺物〕（第48・49図・図版20）

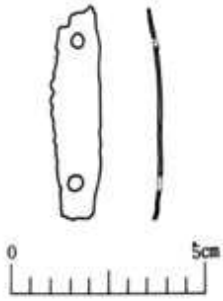
遺物は全て土器類だけで坏、甕類である。しかし量的には少なく坏はA、C類で占められ、甕はA類とB類の破片である。1はAIb類の坏で成形にロクロを用いているが体部外面には手持ちヘラケズリの調整がみられる。ケズリ調整後、内外面にヘラミガキを行い、後内黒処理を施こしている。器形は底部径に対し大きくまた器壁の立ち上がりは底部から丸味をもって内彎気味に外傾し口縁部が心もち外反傾向をみせている。2はCIIb類の高台付坏の坏部を欠損した破片である。ロクロ成形で調整はみられない。なお高台部はやゝ高めで「ハ」の字状に開脚する。3～6は甕の破片である。6を除き全てロクロ成形である。これらは口縁部の作り出しに共通性があり一般に短かく「く」の字状に外反し口唇部に若干の挽き出し傾向が伺える。6は巻き上げによる底部付近の破片である。底部は平底で概して厚手の作りとなっている。調整は胴部下半にヘラケズリがみられ焼成はあまく脆弱である。またピット2の埋土内から砥石1個が出土している。材質は凝灰炭である。



第53図　BC09住居跡出土土器実測図

BC06住居跡（第50図）

本住居跡はBA50から南へ6～9m、西へ3～6mの範囲内で検出された。遺構は削平と撹乱により程んど遺存していない。床面と想定される部分から土器片、焼土、木炭末を検出するに及び住居跡と確認した。



第54図　BC09住居跡出土金属板

〔出土遺物〕（第51図）

遺物は土器類に限られ完形品はなく全て破片だけである。坏類はCI、CII類の破片十数点、甕はA類の底部破片であった。51図は甕の底部破片でやゝ小形である。成形にロクロを用い底部は回転糸切りにより調整はない。器面はやゝ摩滅し内外面の調整は判然としないが内外面とも黒色処理がなされている。焼成は良好である。

BC09住居跡（第52）・図版13）

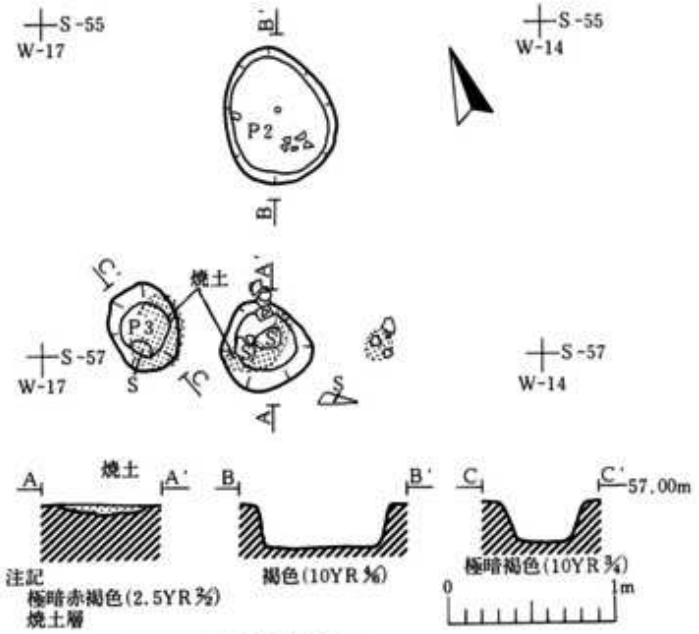
BA50から南6～9m、西6～9mの範囲内に検出された遺構である。

〔遺構の確認〕第2層シルト質粘土の上面を検出面とした。

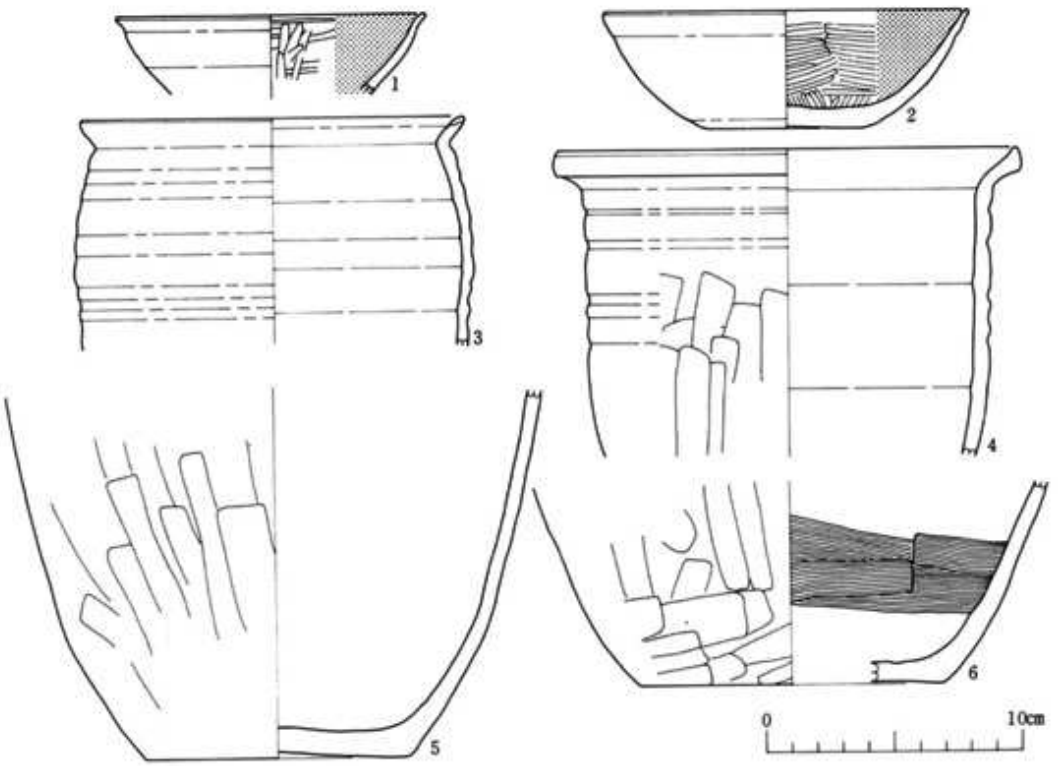
〔平面形〕東西約3m、南北2.7mの隅丸長方形プランを呈している。

〔堆積土〕単層で構成され褐色（7.5YR⅘）の粘土質でやゝ固くしまっていた。埋土内に木炭粒及び土器片の混入がみられた。

〔壁、床面〕褐色シルトの地山を壁とし、残存壁高は15～20cmである。床は黄褐色の地山面を直接床としており、貼床、周溝などは認められなかった。



第55図　ＣＨ18住居跡平断面図



第56図　ＣＨ18住居跡出土土器実測図

〔ピット〕総数で8個を検出した。主柱穴は1～4の4個で床面の面積に対しやゝ大形である。これらの埋土はいずれも単層で褐色のシルトが主体である。

〔焼土遺構〕床面の南西隅に不定形の焼土の広がりがみられその他数箇所にこれらが点在していた。

〔出土遺物〕（第53・54図・図版20）

床面直上から縄文土器片、A類、C類の土器片の出土をみた。縄文土器片は細片若干にとどまる。平安時代の土器は坏類と甕類が主体となっている。坏は復元可能のもの3点で1はAⅡ類の坏である。成形にロクロを用い、底部は回転糸切り手法により体部の立ち上がりは丸味をもって内彎しながら外傾する。口縁部はわずかに外反し、内面の調整は底部付近に放射状のヘラミガキを認めるが他は摩滅により明瞭でない。ミガキ後黒色処理を施こしているが二次加熱をうけ黒色部分がとんでいる。2、3はCI類に属すいわゆる須恵系の小形坏で成形はロクロにより内外面の調整はみられない。2は体部外面に成形時のロクロ痕が顕著にみられる。なお焼成、胎土とも良好で概ね密である。次に第54図に図示した金属製の金具1枚がピット1埋土内から出土している。材質は真鋳とみられ厚さ1㎜ほどで両端に径3.5㎜ほどの窄孔がある。用途等については不明である。

ＢＥ12住居跡

ＢＣ09住居跡の南西約4～5ｍの地点で検出された遺構で、ＢＣ06住居跡同様に攪乱が著しく、かつて住宅に付随する便槽の下に埋れ遺構の検出に至らなかった。攪乱部分の周辺に土器片が出土し、且つ焼土、炭化材の検出をもって住居跡と確認した。土器片は旧床面と想定される地山シルト面に密着して出土しＣⅡ類の細片のみであり、実測可能のものは発見できなかった。

ＣＨ18住居跡（第55図）

御仮屋の堀跡精査の中で発見された遺構である。遺構は地山面に達する削平をうけ壁の検出はできず平面プラン等は不明である。したがって住居跡に伴う3個のピットをもって遺構と認めた。またピット内及びその周辺から若干の土器片と焼土の広がりを検出した。

〔ピット〕ピットは3個で柱穴と断定できるものはない。ピット1と3は埋土内に焼土が固く詰っていた。ピット2は形状と出土遺物から推定し貯蔵穴の可能性が考えられる。またこれらのピットはいずれも埋土上面に川原石（径15㎝内外）がのっていた。

〔出土遺物〕（第56図・図版20）

出土遺物は全て土器類で坏はA、B、Cの各類を、甕はA、B類を夫々出土している。なお坏ではＣⅡ類、甕はA類によってそのほとんどを占め他は若干にとどまる。1は小形内黒坏で底部を欠損し、成形にロクロを用い、底部切り離し技法は不明である。体部はやゝ丸味をもって立ち上がり口縁部で外反する。内面はヘラミガキ調整後内黒処理を施こしている。2はAⅡa類に分類される坏で⅓弱を欠損しピット3の壙底部付近から出土したものである。ロクロ成形で底部は回転糸切り無調整である。体部はやゝ丸味をもって立ち上がり口縁部の外反はみられないが底部内面に放射状の細かいヘラミガキが行われ、体部中央から口縁部にかけ横方向の入念なミガキ後、黒色処理を施こしている。なお外面は摩滅と剥落により調整は不明である。

第４表　住居跡遺構別計測一覧表

No	名　称	重複の有無	短軸×長軸（m）	平　面　形	床面積（㎡）	周溝の有　無	貼床の有　無	かまど位置及び煙道状況	柱穴	貯蔵穴	出土遺物	付　　記
1	ＸＦ24住	無	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不明	不　明		焼土、木炭、出土、土師器片集中出土
2	ＸＨ09住	無	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不明	1	土師器坏破片	床面まで削平を受け５個のpitを遺存
3	ＸＪ03住	無	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不明	不　明	土師器片	焼土の広がりを確認
4	ＡＣ15住	無	不　明	隅丸長方形？	不　明	無	無	東壁、煙道は壁端から約１ｍ外方へ伸びる袖に補強材として川原石を用いる	1	1	土師器	北半分は道路下にもぐり調査できず西壁部分は攪乱によって不明
5	ＡＤ12住	無	不　明	不　明	不　明	無	不　明	不　明	4	無	ナ　シ	焼土あり
6	ＡＤ21住	無	不　明	隅丸正方形？長方形	不　明	不　明	無	南壁東寄り？屋外壁に垂直に約１ｍ伸びる	不明	不　明		南壁端のみ残し他は攪乱を受ける
7	ＡＥ12住（Ⅰ期）	有	3.0 × 3.7	隅丸長方形	11.1	無	無	不　明	不明	無		西南コーナーをほとんど攪乱されている
8	ＡＥ12住（Ⅱ期）	有	3.2 × 4.0	隅丸長方形	12.8	無	無	不　明	2	不　明		西南コーナー北東コーナーを攪乱されている
9	ＡＥ24住	有（煙道部分のみ）	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	南壁、煙道	不明	不　明		西側、北側の程んどが調査区外
10	ＡＦ21住	無	3.5 × 3.75	隅丸長方形	13.1	無	無	不明（無し？）	8	無		北壁を削平される
11	ＡＦ24住	有（煙道のみ）	3.6 × 2.8		10.1	有	有	北壁西寄り屋外に伸びる	4	不　明		東壁部はＡＤ21南北溝で切られる
12	ＡＧ18住（Ⅰ期）	有	3.75×4.40	隅丸長方形	16.5	無	無	不　明	4	無		床面に焼土が広がる
13	ＡＧ18住（Ⅱ期）	有	（不明）× 5.10	不　明	残存床面積約13㎡	無	無	不　明	4	1		東西の両壁部分をほとんど削剥される西側はＡＤ21南北溝で切られる
14	ＢＡ18住	無	4.5（推定）× 5.3	隅丸長方形（推定）	23.9（推定）	無	無	東壁南寄り（攪乱により構造規模は不明）	3	不　明		床面中央をＡＤ21南北溝で切られる東壁を南北方向に攪乱をうける西側南北コーナーとも攪乱
15	ＢＣ06住	不　明	不　明	不　明	不　明	無	無	不　明	1	1		削平と攪乱を全面にわたって受ける
16	ＢＣ09住	無	2.7 × 3.0	隅丸長方形	8.1	無	無	不　明	4	無		床面に焼土、川原石が散在する。
17	ＢＥ12住	無	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不明	不　明	土師器片	土師器片集中出土
18	ＣＨ18住	無	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	不　明	無	1	土師器	全面を攪乱、削平

甕は3～6までで全てA類である。3、4はロクロ成形で長胴形の甕である。4は体部外面にヘラ状工具による縦方向のケズリ調整がみられる。またロクロ回転による凹凸が顕著である。5、6は底部から胴部にかけての破片でやはり長胴形の甕と推定される。いずれも外面はヘラケズリ調整で6のみが内面にヘラナデの調整がみられる。

2 考 察

(1) 竪穴住居跡

2ケ年に亘る継続調査で発見された平安時代の遺構は竪穴住居跡18棟である。ここでは住居相互の特徴を項目ごとに整理し、住居跡の先後関係について若干の考察を加えたい。また前述したとおり本遺跡は遺存度が極めて悪く全てについての資料が得られず、遺存度の比較的良好なものに限って考察資料とする。なお第2表は住居跡遺構一覧表である。

〔平面形〕 プランの明らかなものは8棟あり、これらはいずれも隅丸の長方形で方形を呈するものはAD21住居跡の1棟だけである。

〔規模〕 規模の判明するものはやはり8棟でこれを長軸の長さで分類すると次のようになる。

①4m以上	AE12(II)住	AG18(I)住	AG18(II)住	BA18住	4棟
②3.0～3.9m未満	AE12(I)住	AF21住	AF24住		3棟
③3.0m未満	BC09住				1棟

長軸4m以上の住居跡が4棟で最っとも多く、3.0m未満の小形住居跡がわずかに1棟だけとなり本遺跡は3m～5mの中規模住居跡で構成された集落跡と云える。

〔柱穴〕 柱穴を検出できた住居跡は10棟で、うち床面のほぼ全容を知りえたものは3棟だけである。柱穴は4個のものと8個のものに分けられ、8個のものはAF21住の1棟だけである。また柱穴位置の明瞭なもののうち2個が対角線上にのり他の2個が壁に偏るものにAC15住、AE12(I)住、AG18(I)住、BA18住、BC09住がある。

〔かまど、煙道〕 かまど施設を伴う住居跡はAC15住、AD21住、AE24住、BA18住の4棟がある。このうちAE24住とAD21住の2棟が南かまどで他の2棟は東かまどである。またかまど位置はいずれも壁の中央から若干ずれて付設されるのが一般的である。

以上の資料は全遺構からの比率では50%にも満たないもので考察資料としての価値に多分に疑問を残すものであるが大凡の傾向性だけはとらえられるものと思う。本遺跡における住居構造から遺構の構築時期をみると、

①平面プラン－隅丸長方形プランが主体

②長軸、短軸長の平均値－4.1mと3.35m

③柱穴、4個が一般的で対角線上にのるもの2個、対角線にのらず壁に偏よるもの2個の組み合せが主体

④かまど位置－東壁か南壁に付設される。また煙道を伴ない屋外に伸ばす。

以上の共通性をもとにグルーピングすると、

Ⓐ AC15住、AE12(I)住、AG18(I)住、BA18住

Ⓑ A B 21住、A E 24住、B C 09住

Ⓒ A E 12(II)住、A F 24住、A G 18(II)住

の3グループに分けられる。Ⓐ群は北上市相去遺跡[注2]、同西野遺跡[注3]等の住居跡に近以しており Ⓑ群に先行もしくは同時期の住居跡と考えられ、またⒸ群はⅠ期住にのるか、または先行する住居跡を切っていることからB群に後続する住居跡群と考えられる。しかし住居構造のみをもって時期差を判定することは危険性があり、やはり共伴遺物とのかかわりの中で考究されるべきものと思われる。したがって本項では一応Ⓐ群、Ⓑ群、Ⓒ群の先後関係だけにとどめておく。

(2) **出土遺物**

・出土土器の分類（第57・58図）

土器類は坏、高台付坏、皿、椀、甕、長頸瓶など多岐にわたるが、ここでは主に坏類と甕類にしぼり次のような分類基準を試みた。また第56、57図は分類基準をもとにした模式図である。

坏は遺構外出土の破片2点を除き全て製作にロクロを使用している。したがって底部切離し後の調整の有無、内外面の調整の有無と技法、黒色処理の有無、焼成方法の差異により3通りに分類した。

A類　ロクロ切り離し後ヘラケズリ調整を加え、内面にヘラミガキ調整、内面または内外面に黒色処理するもの、酸化焔焼成（土師器）

B類　色調がくすべ色を呈し胎土が極めて密で硬質、還元焔焼成（須恵器）

C類　胎土に硬、軟の二様があり前者は黄橙、または黄白色の色調を呈し還元焔焼成に近い後者は胎土が粗く、酸化焔焼成で脆弱、両者とも内外面に調整のないのが一般的であり黒色処理もみられない（赤焼き土器）

坏A類　本類は再調整の有無、黒色処理、器形などの相異により3つ　細分される。

AI類　底部切り離し技法は二次調整のため不明、黒色処理が施こされる。器形の差異からさらに3分類される。

AII類　黒色処理　底部回転糸切無調整、器形の差異により3分類される。

AIII類　内黒処理の高台付坏

坏B類　ロクロ成形により底部は回転糸切り無調整で、内外面の調整はなくロクロ痕のみである。色調にはくすべ色をしたものと赤褐色気味のものがある。

坏C類　ロクロ成形で色調は赤褐色または黄橙色を呈し胎土に硬、軟の二種類がある。前者は還元焔に近い焼成をうけ良好である。器形の差異から2類に細分。（須恵系土器）後者は軟質で脆く、酸化焔焼成による。調整の有無、器形の相異により3類に細分、これらは夫々4類、5類、2類に小細分される。（土師質土器）

CI類　ロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り無調整で器内外面の再調整みられない。焼成は還元焔に近い。器形の差異から2つに細分される。

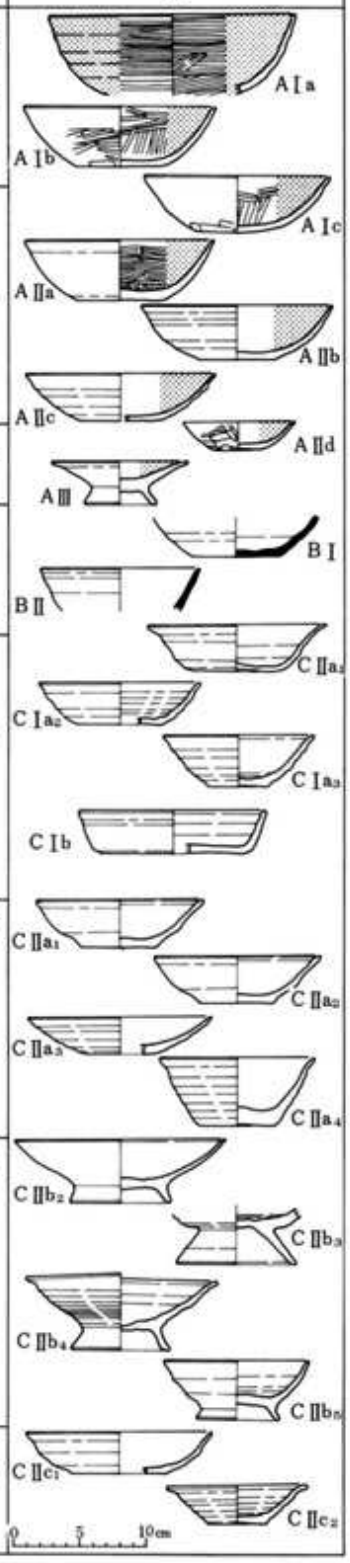
CIa　坏で本類は器形の差から3つに細分される。

CIb　盤

CII類　軟質でロクロ成形、焼成は酸化焔焼成。器種の相異から3つに細分

分類	硬さ	焼成	器形 体部～口縁部	調整 底部	調整 口縁部～体部
A類 AⅠ AⅠa	軟～やや軟	酸化炎焼成	体部内弯気味に外傾 体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部わずかに外反	二次調整のため底部切離し技法は不明	内面または内外面へラミガキ後黒色処理 底部～底部付近に手持ちヘラケズリ
A類 AⅠ AⅠb					
A類 AⅠ AⅠc					
A類 AⅡ AⅡa			体部、ふくらみをもって外傾、口縁部わずかに外反 体部が直線的に外傾 体部やや直線的に外傾、ロクロ痕顕著、小形皿状	回転糸切り、無調整	内面へラミガキ後、黒色処理
A類 AⅡ AⅡb					
A類 AⅡ AⅡc					
A類 AⅡ AⅡd					
A類 AⅢ			高台付坏	不明	内面へラミガキ後、黒色処理
B類 BⅠ	硬	還元炎焼成		回転糸切り、無調整	
B類 BⅡ					
C類 CⅠa CⅠa₁	やや軟～硬	酸化炎～還元炎焼成	体部中央付近にふくらみをもち口縁部が大きく外反 体部がふくらみをもって立ち上がり口縁部がわずかに外反 小形で体部にロクロ痕顕著 小形ミニチュア盤状	回転糸切り、無調整	内外面とも無調整
C類 CⅠa CⅠa₂					
C類 CⅠa CⅠa₃					
C類 CⅠa CⅠa₄					
C類 CⅠb					
C類 CⅡa CⅡa₁	軟～やや軟	酸化炎焼成	体部下方がふくらみ以後直線的に外傾 体部はふくらみをもって立ち上がり口縁部でわずかに外反 体部が直線的に緩く立ちあがる 体部が直線的に外傾器高が高く厚手式	回転糸切り無調整のものが一般的であるが一部底部付近に手持ヘラケズリの二次調整をうけたものがみられる	一般的に内外面無調整
C類 CⅡa CⅡa₂					
C類 CⅡa CⅡa₃					
C類 CⅡa CⅡa₄					
C類 CⅡb CⅡb₁			（高台付坏） 大形で坏部分は浅形 Bi に類似、口縁部の外反はみられない。 高台部が比較的高く厚手作り 坏部が内弯気味に外傾し口縁部が大きく外反、器形の歪みが強い 小形で内弯気味に外傾	坏部と高台部を別個に製作し後接合したもの 坏部の底に回転糸切りのものがままみられる。	内外面とも無調整
C類 CⅡb CⅡb₂					
C類 CⅡb CⅡb₃					
C類 CⅡb CⅡb₄					
C類 CⅡb CⅡb₅					
C類 CⅡc CⅡc₁			（皿状） 小形、体部はややふくらみをもって外傾 小形、体部は外弯気味に外傾、口縁部大きく外反	回転糸切り、無調整	内外面とも無調整
C類 CⅡc CⅡc₂					

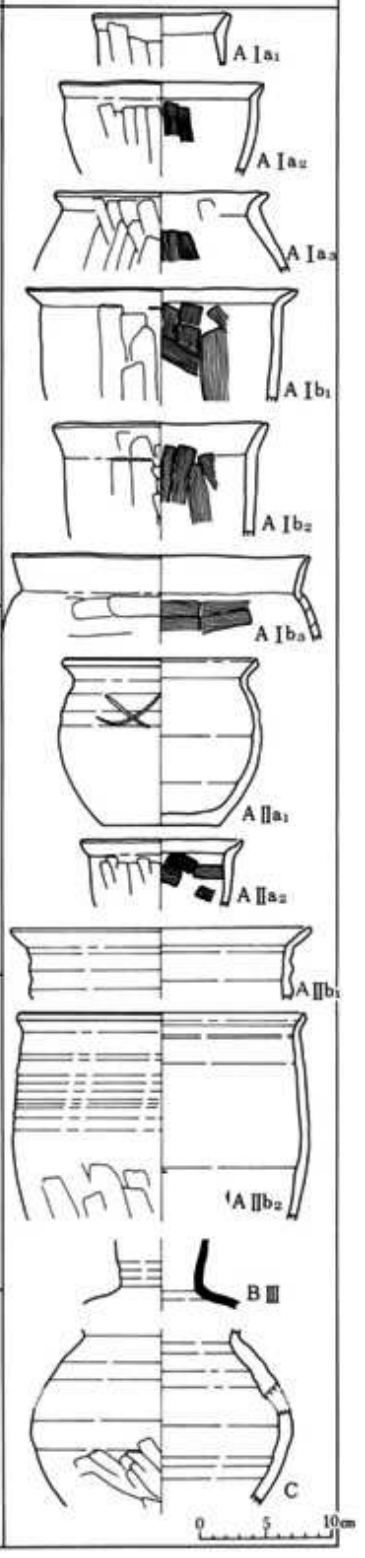
図



第57図　坏類模式図

分類	焼成	ロクロ	器形 口縁部 ― 胴部	最大径
A類 AⅠ AⅠa AⅠa1	酸化炎焼成	ロクロ未使用	口縁部が「く」の字状にゆるく外反	口縁部
AⅠa AⅠa2			口縁部が直立気味か、わずかに「く」の字状に外反	口縁部～胴上半部
AⅠa AⅠa3			口縁部が「く」の字状に強く外反、口唇部は丸くおさまる。	胴部
AⅠb AⅠb1			口縁部が短かく「く」の字状に外反	口縁部
AⅠb AⅠb2			口縁部がやや長く胴部からゆるやかに外反	口縁部
AⅠb AⅠb3			口縁部が極端に薄く直線的に外傾	肩部付近
AⅡ AⅡa AⅡa1		ロクロ使用	口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部がわずかに上方へ挽き出される。器高がやや低く平底	胴部
AⅡa AⅡa2			口縁部がやや強く〈く」の字状に外反し、口唇部が上方または上下方向に挽き出される。	
AⅡb AⅡb1			口縁部が屈曲して外傾、胴部はロクロによる凹凸が顕著、長胴甕	胴部
AⅡb AⅡb2			口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が上方または上下方向に挽き出される。	口縁部
B類 BⅠ	還元炎焼成	ロクロ使用	小形、体部中央辺にヘラケズリ調整	胴部中央付近
BⅡ			中～大形、外面に叩き目、内面にヘラナデ	胴部中央
BⅢ			壺、または長頸瓶	胴部中央
C類	還元炎焼成	ロクロ使用	壺または長頸瓶、外面に部分的なヘラケズリ、内面ロクロ回転の痕跡	胴部中央

図



第58図　甕類模式図

第5表　坏類別比率

	A	B	C		計
			CⅠ	CⅡ	
個体数	32	6	22	70	130
%	24.6	4.6	16.9	53.9	100 %
破片数	314	22	170	928	1,434
%	21.9	1.5	11.9	64.7	100 %

CⅡa　坏で器形の差から4細分される。

CⅡb　高台付坏、器形の差から5細分。

CⅡc　Ⅲ状の坏、器形の差から2細分。

甕　甕類にはA類（土師器）、B類（須恵器）、C類（須恵系土器）、D類（上記以外のもの）の4種類がある。

A類　製作にあたりロクロ未使用のものをAⅠ類、ロクロ使用のものをAⅡ類とした。AⅠ類、AⅡ類とも器形の大小により夫々2細分した。

AⅠa　口径18cm以下の小形甕。口縁部の形状の相異により3細分した。

AⅠb　口径18cm以上の中、大形甕。口縁部の形状の相異により4細分した。

AⅡa　口径18cm以下の小形甕

AⅡb　口径18cm以上の中、大形甕

AⅡa、AⅡb類ともに縁部の形状の相異により2細分した。

B類　くすべ色を呈する所謂、須恵器である。本類は大形甕、小形甕、壺、長頸瓶など器種のちがいにより3分類。

BⅠ類　小形甕（広口甕も含む）

BⅡ類　中、大形甕（同　　上）

BⅢ類　壺または長頸瓶

C類　A、B類に含まれない土器で白黄色を呈し胎土は緻密であるがB類に比べやゝ軟質（須恵系土器）

D類　白色で還元焔焼成になり胎土が極めて緻密である。器内外面に釉のたれが認められる。

・土器類と遺構の年代

出土土器を各遺構毎、及び遺構外に分けて集計したものが第6、7表である。ここでは各住居間の相対年代を想定するために、各住居跡における類別ごとの共伴関係をもとにみていきたい。その資料として土器偏年の普偏的素材である坏類をとり上げる。XH09住、AC15住、BA18住、BC06住の4住居跡からロクロ使用の土師器坏ではやゝ古手とみられるAⅠ類土器が出土している。このうちXH09住が4個体の復元可能土器を出土し、AC15住がこれに続いている。他は各1個である。また破片数においてもXH09住が他に比べ多い。次にB類土器の共伴ではAC15住に1点だけみられるだけである。次にAⅡ類土器と共伴する遺構はXF24住、AC15住、AE12(Ⅰ)住、AG18(Ⅰ)住、BC09住、CH18住などである。このうちB類土器との共伴関係をもつものが、AC15住、AE12(Ⅰ)住、AG18(Ⅰ)住の3棟だけになる。C類だけにとどまる住居跡は、AE

第6表　遺構別土器出土数（但し、完形、復元可能土器のみを集計）

	坏類																															甕類																		D類	計
	A類								計	B類		計	C類																		A類												計	B類			C類	計		
	AI			AII				AIII		BI	BII		CI					計	CII											計	AI								AII				BI	BII	BIII				
	AIa	AIb	AIc	AIIa	AIIb	AIIc	AIId						CIa				CIb		CIIa				CIIb					CIIc			AIa			AIb			AIa	AIb	AIIa		AIIb								
													CIa$_1$	CIa$_2$	CIa$_3$	CIa$_4$			CIIa$_1$	CIIa$_2$	CIIa$_3$	CIIa$_4$	CIIb$_1$	CIIb$_2$	CIIb$_3$	CIIb$_4$	CIIb$_5$	CIIc$_1$	CIIc$_2$		AIa$_1$	AIa$_2$	AIa$_3$	AIb$_1$	AIb$_2$	AIb$_3$			AIIa$_1$	AIIa$_2$	AIIb$_1$	AIIb$_2$								
1 X F 24 住					1				1																							2											2							
2 X H 09 住		4							4								1	1		6	1	1	1							9																						
3 X J 03 住																																																	
4 A C 15 住			2	3	2				7	1		1	1						1		9	3		3	3		1	1	2		20	2	4	2	4	2				1		1	2	18						1	1
5 A D 12 住																																																	
6 A D 21 住																																																	
7 A E 12(I)住					1				1												2		1	1	1						5															1			1		
8 A E 12(II)住																																																	
9 A E 24 住																					1		2						2		5										2			2							
10 A F 21 住																													5																			
11 A F 24 住																					1		2						2		5										2			2							
12 A G 18(I)住					2	5	1		8	1		1	11	1				12	1	2						3			3	8	2	2	1	4	2	1			1				13		1	2	1	4		
13 A G 18(II)住													3					3	1											1	2	2	1	4	2	1			1				13							
14 B A 18 住		1							1														1						1								1		1		2	4							
15 B C 06 住	1								1																																									
16 B C 09 住				1						1					2			2																															
17 B E 12 住																																																	
18 C H 18 住				2					2																										2					1			1	4							
19 西掘トレンチ										1		1				1		1	1											1										1		1	2		2			2		
20 B類遺構外		1							1					1				1		1	2		4							7										1			1			1		1		
21 X類遺構外								1	1											3										3	1			1						1		2							
22 A類遺構外	2								2	1	2	3			1			1			1							1		2				1								1	2		1	1		2		
23 遺構外				1				1	2										1	1	1									3					1					2		2	5							
合計									32									22											70													70					10		1